



第76図 大西遺跡4次調査区遺構配置図（1/300）

IV 大西遺跡第4次調査の報告

1 調査の概要

調査地点の所在 大西遺跡は、福岡県豊前市大西の北東側に南北にのびる尾根状丘陵の西側斜面に立地する。今回報告する第4次調査は、丘陵頂部から緩斜面にあたり、豊前市大西612-1、613-1~3、615、616-1・2、617、619-3を対象地として平成24年度下半期に発掘調査を行った。調査対象面積は全体で約2,700m²、うち実調査面積は2,270m²である。なお、豊前市教育委員会がこれに先立つ平成22・23年度にやはり東九州道の建設に先立って西に接する水田面の調査を行っている（大西遺跡第2・3次調査）。

調査地点の周辺環境 調査地点は、豊前市の東半に広がる広い扇状地帯の中ほどに位置し、扇状地中に埋没しつつも尾根状の低丘陵として残された千東原丘陵の頂部から西側斜面にかけての範囲にあたる。低地との比高差は約3~7mほどを測る。丘陵の東側斜面には西ノ原遺跡が広がっており、本遺跡と西ノ原遺跡は本来同一の丘陵の東西斜面に広く展開する同一の集落であったと考えられる。

遺跡の範囲 大西遺跡は、福岡県教育委員会により付与された東九州自動車道における文化財包蔵地番号の中津29地点にあたり、豊前インター・エンジ建設予定地の西側本線部分にあたる。遺跡の東端は丘陵上を南北に貫く県道犀川豊前線までで、その東には西ノ原遺跡が広がる。一方、遺跡の西側丘陵裾部には水田が広がっているが、過去の圃場整備時に豊前市教育委員会により発掘調査が行われており（豊前市1988）、裾部平坦面のうち丘陵よりの範囲にまで集落が広がることが判明している。南側の市道を挟んだ南では、東九州道の建設に先立つ試掘調査で遺跡の包蔵が認められず、今次調査区より南には大きく遺跡は広がらない可能性が高い。一方北側隣接地においては、民家等の建設に先立つ試掘調査により埋蔵文化財の包蔵が確認されており、また調査成果も勘案すれば遺跡は調査範囲より北側に広く展開している可能性が高い。

調査区の設定 大西遺跡第4次調査においては、工期の関係上開発側からの細かい要望が相次ぎ、これに応えていった結果、最終的には調査区内を5区に分割して発掘調査を行わねばならなくなってしまった。このため、空中写真や図面類が多く、また一部で遺構面の高さがすり合わなくなるというような事態も出来ましたが、報告においては出来るだけ整理して述べることとした。

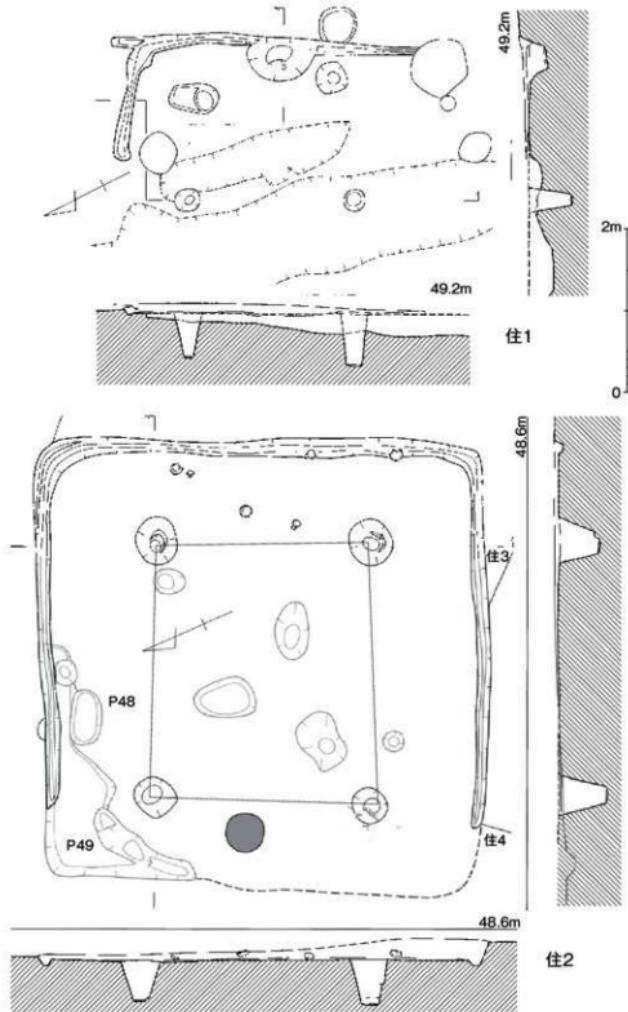
2 調査の成果

(1) 概 要

調査区の位置 調査対象地の中央西寄りには高さ2mほどの造成崖面があり、コンクリートブロックなどでしっかりと保護されていたため、調査区はやむを得ず、大きく東西2区に分割することとした。東側の丘陵上位にあたる調査区が広く、約2,100m²の広さをもつ。これをI区とする。一方西側の丘陵裾部にあたる調査区は狭く、160m²程の大きさで、これをII区とする。工事側の要望に応えて調査区を引き渡しながら調査を進めたため、調査の順序は変則的となり、I区の1/3ほどが終了した段階でII区の調査に移り、II区の終了後再びI区に戻るといった複雑な工程を取ったた

め、遺構番号はI区とII区の間で複雑に連続することとなった。このため報告では、I区・II区を併せて述べつつ、遺構の検出位置についてI区・II区の呼称を適宜用いることとした。

土質 I区・II区ともに旧状は宅地であった。西ノ原遺跡と同じように、県道沿いに近い台地頂部は著しい削平を受けていたほか民家の基礎や畠の歴跡などによる擾乱がひどい状況であった。したがって表土はほとんど存在せず、地山は火山噴出物由来土で比較的深部の土壤の様相を示し、明黄白色の粘砂質土で硬く締まっていた。表土はI区の西側に行くほど徐々に赤色味を帯び、浅



第77図 1・2号竪穴住跡実測図 (1/60)

い部分の土壤の特徴を示した。丘陵裾部のⅡ区では、火成土壤が黒ボク化した黒色粘砂質土が約30cm堆積し、下層の赤褐色粘質土との層界は漸移的な状況であった。

遺構埋土 遺構の埋土は暗～黒褐色粘砂質土からなり、Ⅰ区においては地山である赤褐色～明黄色粘質土との区別は比較的容易であったが、遺構面が黒ボク化して暗褐色を呈するⅡ区においてはやや識別に難があった。また、Ⅱ区の上層には丘陵の上位から流れ込んだと見られる遺物を多く包含する黒色粘砂質土が堆積していて、表土剥ぎ時の遺構面の識別にやや困難を伴う状況があった。

検出遺構 4次調査で検出した主な遺構は、方形堅穴住居跡13軒、掘立柱建物跡12棟、土坑12基、溝1条である。このほか、畑の畝跡と思われる細い溝が連続する遺構を発見した。これらの遺構の所属時期は弥生時代中期・後期～古墳時代前期・後期を主とする。また、これらの遺構などから出土した土器などの遺物は、パンケース120箱にも及んだ。以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

(2) 堅穴住居跡

I区の中程から西側にかけて、またⅡ区から、計13軒の堅穴住居跡を検出した。大半の住居跡は西に傾斜する斜面部に位置していて、東壁が非常に良く残る一方西壁の残りは悪く、しばしば堅穴部の規模すらも把握できないような状況であった。古墳時代後期の住居跡の多くが西側にカマドを持つため、今次調査ではカマドの残りが極めて悪く、構造を報告できるものはわずか1例に過ぎない。一方、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡にはしばしば東壁に壁際土坑が見られたが、東壁の残りが良いこと、地山が堅固で良質であること、地山と遺構埋土の識別が比較的容易であったこと等の諸条件が幸いして、壁際土坑の構造や性格（主に出入口との関係）について重要な知見を得ることが出来た。以下に、各住居跡について報告していきたい。

1号堅穴住居跡（図版37、第77図）

I区北側の中央部で検出した。1号建物跡と切り合い関係を持ち、これに後出する。傾斜と造成段により中央火炉跡を含む西側半分が失われ、残された東側も主柱穴と壁際土坑、周壁溝の一部が見られるに過ぎない。

周壁溝と主柱穴との位置関係から、北側にはベッド状遺構が付属していたのは確実で、2本主柱の住居跡とすれば推定規模は南北6.0m、東西2.4mほどの長方形プランの住居跡となるだろう。残存規模は長軸4.78m、短軸1.60mほどである。東壁のおそらく中央部と推測される箇所に壁際土坑が付属している。壁際土坑は長軸0.88m、短軸0.54m、深さ0.20mほどの規模を測り、西側に浅いくぼみを有する。後述する他例より、このくぼみは梯子等の出入り施設を設置した痕跡の可能性を考えられる。主柱穴は径0.25～0.3m、深さ0.45mほどでしっかりと掘り込みである。

土器小片が若干出土していて、扁平な帶状突帯をもつ破片などがある。

2号堅穴住居跡（図版37、第77図）

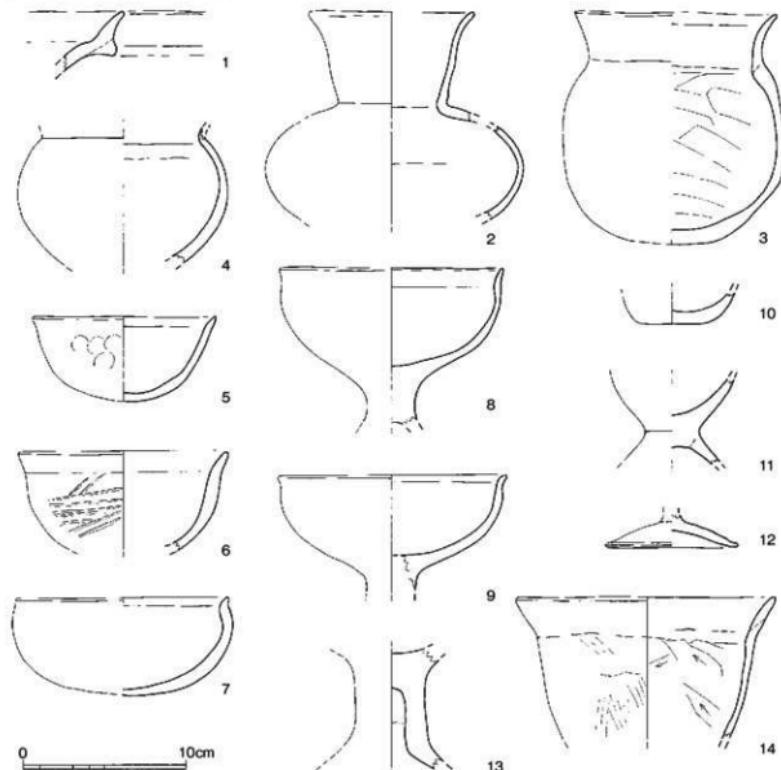
I区北西端部で検出した方形プランの堅穴住居跡である。3・4号住居跡と切り合い関係を持ち、これらに後出する。

残存深さはごく浅く、西側の床面が削平により大部分失われているものの、周壁溝や床下掘り込

み、硬化面などからおおよその形状が把握でき、南北5.16m、東西5.18mの規模に復元できる。床面からは4本の主柱穴を検出した。径は0.4~0.5m、深さは0.5~0.6mでしっかりと掘り込みである。北側の壁中位、壁から約0.3mほどのところに直径0.45mほどの略円形に被熱赤変部が形成されており、この位置にカマドが付属していたものと推測されるが、袖や床面は完全に失われている。赤変部は床の下層にまで熱の影響が及んだものであろうが、隣接する西ノ原遺跡第3・4次調査区でも同様に赤変部が0.1m程度の深さをもつ例が多い。

出土遺物

土器（図版51、第78図） 1は二重口縁壺の口縁部小片で器表が荒れている。2は口頭部と体部が接合しないが同一個体と思われる長頸壺で口縁部は1/2が残存、その下位は完周する。器壁が薄く胎土良好、丁寧に作られていて、体部外面は範磨きで仕上げるようである。3は口縁部が高く伸びて緩く開く小型壺で、球形の体部をもつ。ほぼ完存するが、口縁部の形状・高さが不整で雑な作りとの印象を持つ。体部内面は範削りで仕上げるが、外面は赤変して器表が荒れている。4は口縁部と底部を欠く球形の体部片。頸部付近で1/4が残存する。胎土は比較的良好で体部内外面も丁寧に調整されているが、器表が荒れている。



第78図 2号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

5はほぼ完存する鉢で、口縁部をわずかに外方へ引き出すような形となる。器表が荒れるが外面に指頭痕が見え、内面は丁寧に調整される。6は口縁部の1/3が残存する。これは口縁部を小さく外折させる椀で、体部外面に刷毛目ではなく箆で引っ掻いたような鋭い痕跡が残る。7は口端部を小さくつまむ椀で口縁部の1/3が残存、底部付近は完存する。底部から口縁部にかけて外面の1/2ほどが被熱赤変する。

8・9はよく似た器形の脚付椀あるいは高杯と呼ぶべきか。口縁部を小さく外反させる椀形の土器に脚部を付す。器表が荒れているが胎土は良好である。10は外縁が丸みをもつ平底の底部片。11は脚付鉢であろう。12は小片かつ端部が不整であるために復元図に不安がある。

北西隅では床面に不整形の落ち込みがあって土器が出土している。13はP49出土の高杯片。図示部は完周するが、器表が剥落する。14はP48出土の鉢で、口縁部の1/4ほどが残存する。胎土は良好といえるが作りが雑な感を受ける。また、口端部付近に赤味の強い土を意図的に使用するようで、帯状に発色が異なっている。

3号竪穴住居跡（図版37、第79図）

I区北西端部で検出した。2号住居跡に西側を大きく破壊されているが、2号住居跡の床面下層に本住居跡に伴うと考えられる硬化部を検出し、およそその形状を復元するに至った。

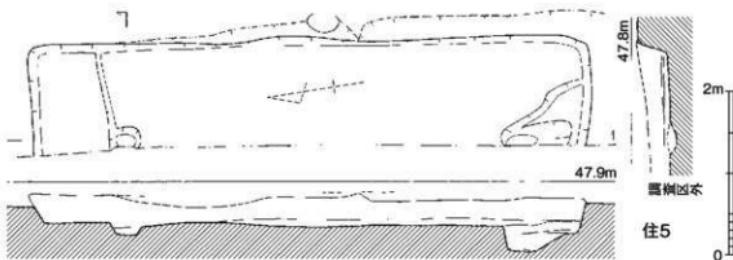
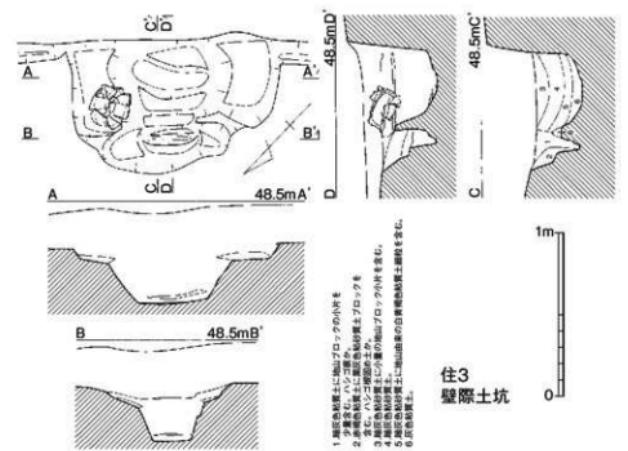
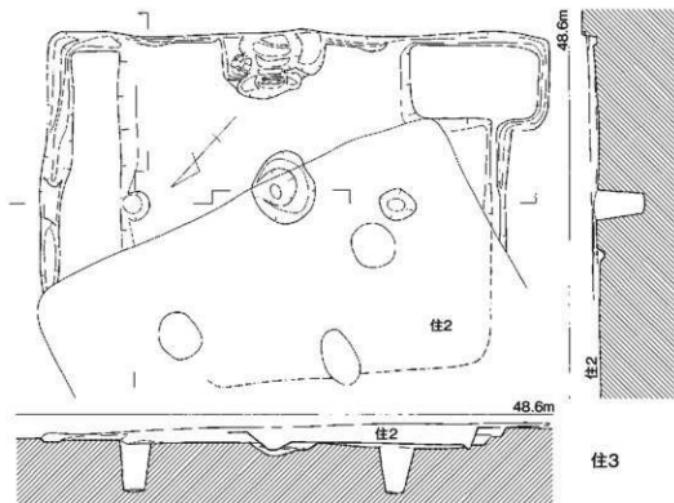
主軸を北西-南東にとる長方形の住居跡で、北辺にベッド状遺構、東辺に壁際土坑、南東コーナー部に張り出し部、中央に炉跡を持ち、主柱穴は2本である。北辺のベッド状遺構は検出した範囲では辺の全面につき、幅0.7~0.85mほどの規模を測る。張り出し部は幅0.9m、長さ1.5mほどのベッド状を呈し、うち長辺の0.3mほどが南に張り出す。炉跡は深さ0.1mほどの浅い皿状を呈する。主柱穴は径0.35~0.45m、深さ0.6m弱を測りしっかりとした作りである。壁際土坑については別に述べる。住居跡の規模は張り出し部を除き5.10m、幅は推定で4.00mを測る。

壁際土坑

東辺のはば中央（張り出し部を含めない）で検出した。検出面で1.3×0.8mほどの大きさを持つ不整半長円形で、中央部の深く大きい土坑と左右の浅い段、そして手前の狭く深い土坑の4つの部位に分かれる。特に手前の幅が狭く深い土坑部分の埋土に着目すると、最下部幅0.05mほど、上面幅が0.1mほどで東側の立ち上がりが約25度を測る暗い色調の粘質土が認められた（1層）。形状から、おそらく木製の出入り施設（はしごや階段など）の抜き跡と考えられる。埋土の断面形状をよく見ると、住居の内側に大きく膨らんでおり、おそらく一本造りの刻み階段の痕跡ではないだろうか。これを固定するために、東側の大きな土坑部分との境界に粘土質の土を詰めている（6層）ことも読み取れる。一方この東に隣接する大きな土坑部分は、深さ0.2m、長さ0.65m、幅0.5m程度の規模をもつが、刻み階段を想定するちょうど階段裏のスペースに位置していることがわかる。左右の浅い段に木製の蓋が乗ると想定し、収納施設と考えたい。

出土遺物

土器（図版51、第80図1~3） 1は長胴となる甕で体部下半が完周、口縁部は大部分を欠損する。底部を失うが丸底のようで、その付近の外面は箆削りで仕上げ、それ以上は細かい刷毛目である。内面は下半が撫でのようで、上半はやはり細かい横刷毛が見える。2は内厚となる鉢で、これはほぼ完存する。体部外面は荒れているが刷毛目が見え、内面は遺存状態がよい。3は高杯片で、杯部は屈曲部付近で図上復元したものである。脚部も同一個体であろう。これも器表が荒れて、調整痕は見えない。



第79図 3・5号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

4号竪穴住居跡（図版38、第81図）

I区北西端部で検出した。2号住居跡に北東コーナー部分を破壊されている。

西側は削平により損なわれるほか、一部は調査区外に広がっており、全形は不明だが、残されたほかの壁と主柱穴の位置から、おそらくやや長方形形状を呈する2本主柱の住居跡と復元できる。規模は、長軸4.56m、短軸3.72mほどであろう。北・西壁の全面と南壁の西寄り2/3ほどにベッド状遺構を付し、またベッド状遺構が付かない東壁の中央部に壁際土坑、南東コーナー部に突出部を設ける。床面中央には炉跡、その南北に主柱穴が2本見られる。壁際土坑は深さ0.2mほどの浅いもので、単純な堀方をしている。張り出し部は1.50×1.00mの長方形形状のベッド状を呈し、そのうち長軸の0.7m程が南の竪穴部外に突き出す様相を呈する。炉跡は直径0.6mほどの不整円形で断面は皿状を呈し、深さは0.15mほどと浅い。主柱穴は径0.3m程度とやや小さいが深さは0.45~0.6mありしっかりと掘り込みである。

出土遺物

土器（第80図4・5） 4は小型甕の底部であろうか、丸みをもつ平底で器壁が薄い。器表は荒れている。5は高杯口縁部の小片で、これも器表が荒れている。

5号竪穴住居跡（図版38、第79図）

I区北西端部で検出した。畠の畝状遺構を切り、竪穴部の大半が西側の調査区外に広がる。

残存部分の規模は幅1.22m、長さ6.74mで幅はさらに大きかったであろう。北辺に幅0.9mほどの規模のベッド状遺構を付す。主柱穴などの諸施設は全て調査区外に位置すると思われ、詳細は不明である。

出土遺物

石製品（図版61、第150図19） 安山岩の扁平な石で、明瞭な使用痕といったものはわからないが、破面を除いて全体に平滑化する。図示した面では図のように線刻かと思われる浅いがしっかりとした線が見える。ただ、この線は破面の中も走り、背面でも見られるので偶然に生じた石目の可能性があるが、背面のそれはいかにもひび割れというので、表面のものとは趣が異なる。線刻が偶々石目に重なったものか。また、背面では表面のそれと直角方向の同様の線刻も見られる。背面の外周は赤色顔料を付したかのような赤色となり、それは図右上の小さな破面には及ぶが、それ以外の破面には及んでいない。

土器（第80図6~8） 6・7は形状が似る二重口縁壺片で、いずれも胎土良好な小片である。8は全長6cmほどの短い把手片。胎土は精良といってよい。

6号竪穴住居跡（図版38、第81図）

II区の北東部で検出した竪穴住居跡である。II区で検出した住居跡は本住居跡1棟のみである。

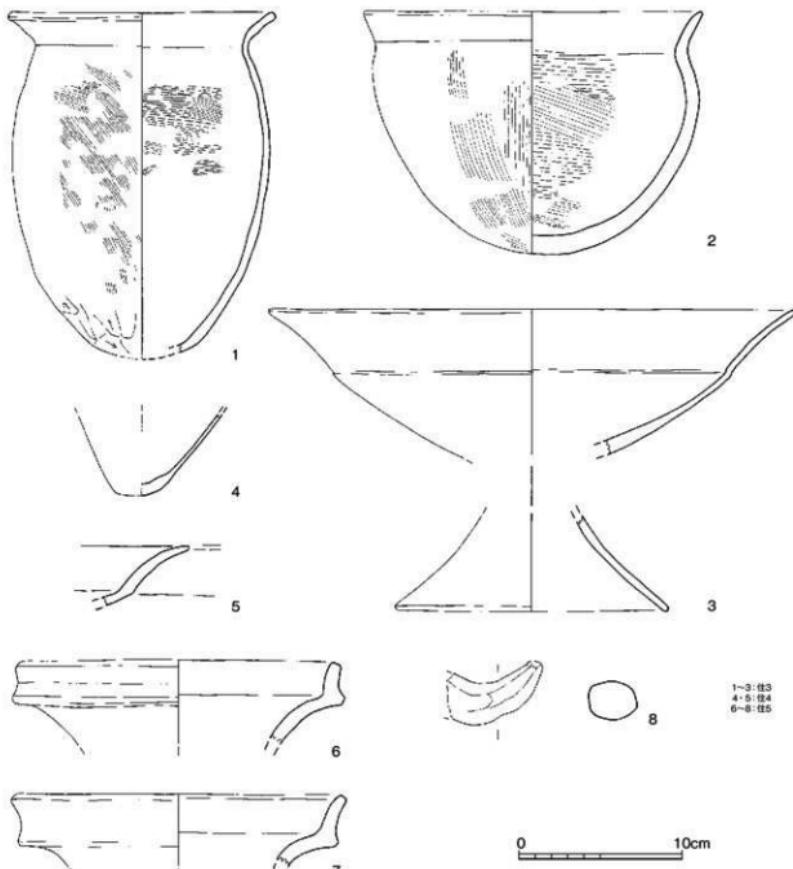
平面形状はやや歪んだ平行四辺形を呈し、規模は長軸4.76m、短軸3.68mほどを測る。南北壁に沿ってベッド状遺構を付し、竪穴部の中央には炉跡、それを挟んで南北に2本の主柱穴を持つ。東壁の中央には壁際土坑も見られる。付近には黒褐色粘砂質土からなり遺物を多く包含する層が広がっており、本住居跡はこの層を切り込んで作られる。付近は後後に宅地として利用されたため住宅の基礎による搅乱が激しく、本住居跡も各所を破壊されている。ベッド状遺構は南北側共に幅0.9~0.95mで共通するが高さが異なり、北側が床面から0.1mほどと比較的低いのに対し南側は0.2m弱あってかなり高い印象を受ける。炉跡は径0.5mほどと小型で深さも0.1mほどと浅い皿状を呈す

る。主柱穴は直径0.3~0.4m、深さ0.55~0.6mとしっかりとした掘り込みである。壁際土坑は0.4×0.6mの長椭円形で2段掘りとなっている。

出土遺物

石製品（図版61、第149図6） 灰褐色砂岩製の石庖丁の残欠。背を含めて全体に丁寧に研磨されていて、刃部はなお鋭い。鎌は見えない。穿孔は両面から浅い角度でなされる。孔の付近が部分的に剥離するが、背側は全体に黒変していて、火熱を受けて剥離したものかも知れない。

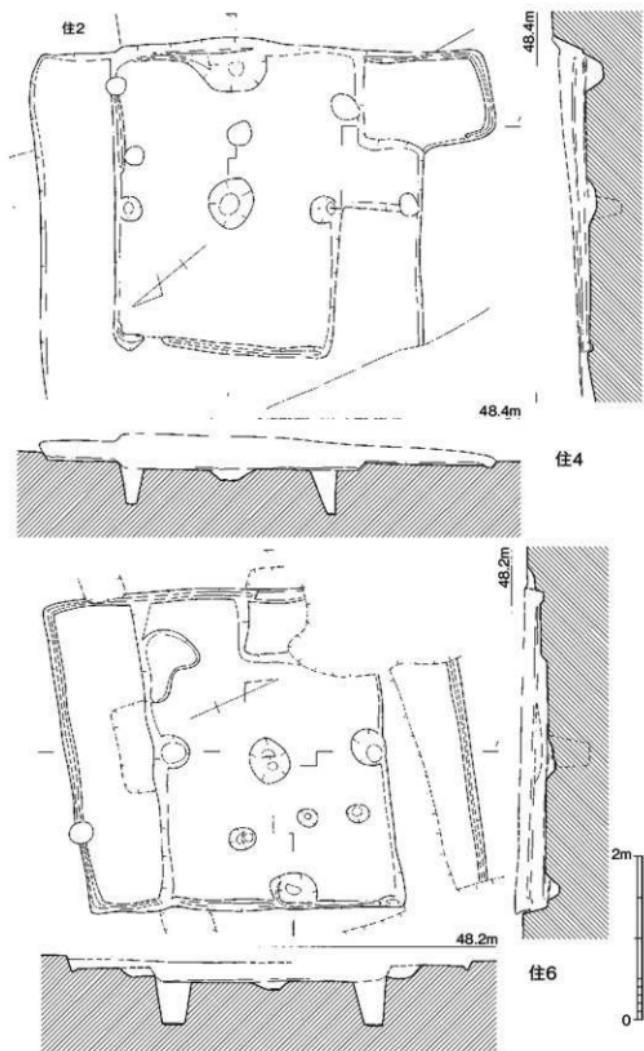
土器（図版51、第82図1~7） 1はほぼ完存する壺であるが、口端部は全く残存していないようである。外傾・直行する短い口縁部をもち、体部は偏球形に近い丸底となる。体部外面に刷毛目・鏡磨きが、内面にも弱い刷毛目と思われる工具痕が見える。底部付近は真っ赤に変色、頸部付近は黒色化する。2は袋状口縁部片で、1/4の残片。内外の器表が荒れている。3は下膨れとなる尖底気味の体部をもち、口縁部が緩くC字形に外彎する壺で完存する。口縁部内面に弱い横線状の凹みが連続して入る。体部最大径部付近から下位は赤変、上位は一部赤変する部分もあるが黒色化する部分が多い。4は短く強く外彎する口縁部をもつ壺の口縁部小片で、復元口径に不安がある。5



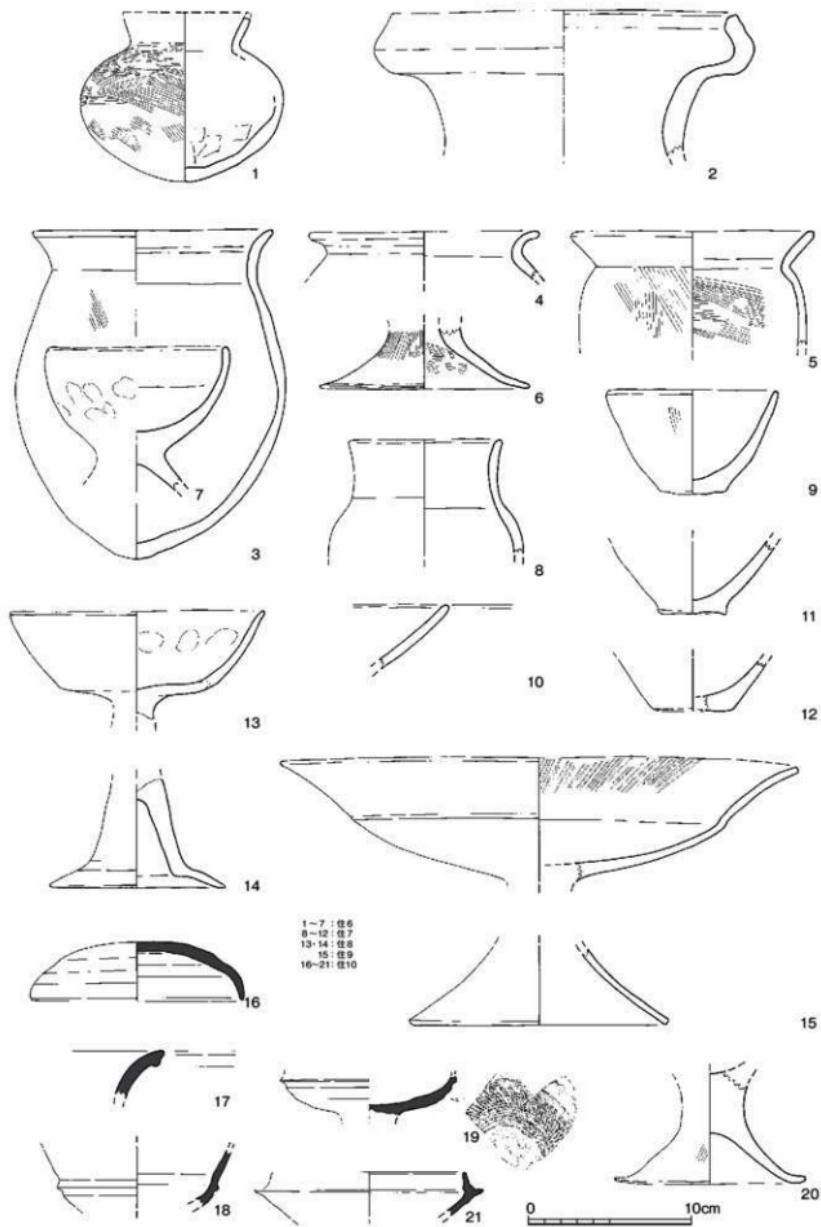
第80図 3~5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

は張りの弱い体部をもつ壺で、口縁部の1/4が残存。外面全体が煤けている。この2点は比較的胎土良好である。6は脚台で、外面の1/2ほどが焼けて真っ赤になっている。

7はP55とした主柱穴出土の脚付椀。口縁部は多くを欠くが、その下位はほぼ完存する。胎土は比較的良好、器表が荒れて調整痕がよく見えない。



第81図 4・6号堅穴住跡実測図 (1/60)

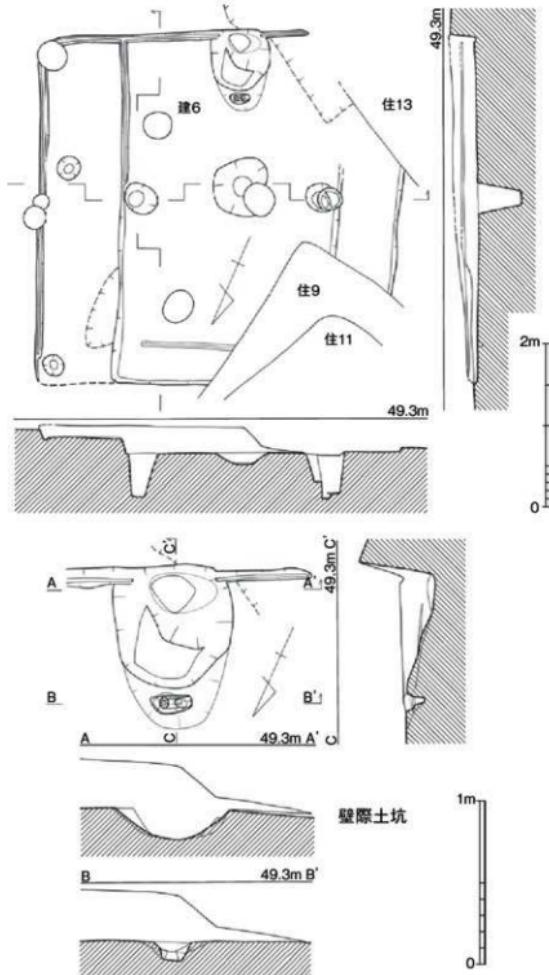


第82図 6~10号堅穴住居跡出土器実測図 (1/3)

7号竪穴住居跡（国版39、第83図）

I区南西部で検出した。9・13号住居跡、6号建物跡と切り合い関係を持ち、これらに破壊される。また、残された遺構同士は直接的に切り合ってはいないが、11号住居跡とも重複関係にあり、9号住居跡を介してこれより古いことが分かっている。

長軸を北西-南東にとり、南北壁にベッド状遺構、東壁の中央に壁際土坑、竪穴部の中央に炉跡、その南北に2本の主柱穴を持つ。ベッド状遺構は一部破壊されているおそらく南北両辺の全面につき、南側が幅0.7m、北側は幅0.9mほどを測る。壁際土坑については別に詳述する。炉跡は径0.6mほどの不整円形で深さは0.15mほどを測り、断面は皿状を呈する。主柱穴は直径0.25~

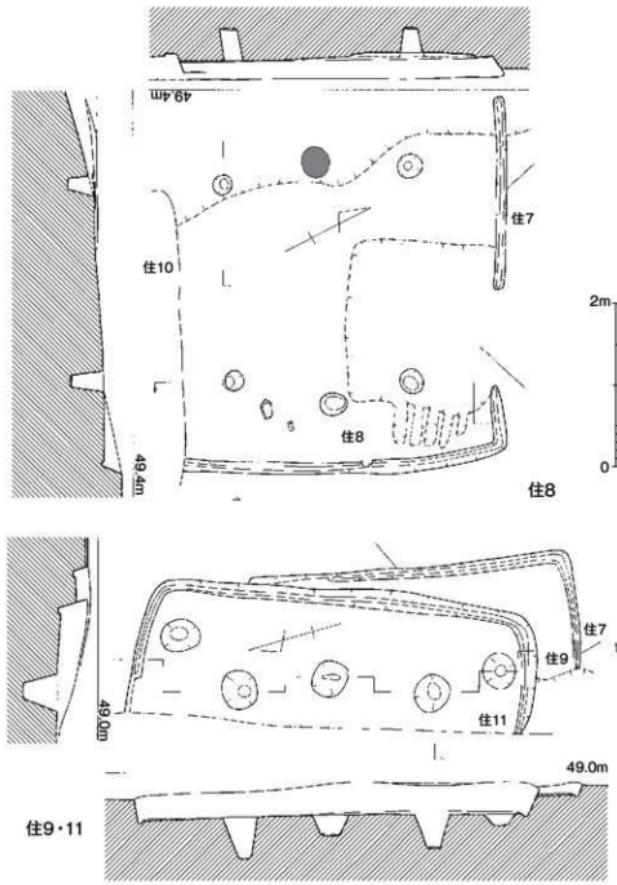


第83図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/30)

0.4m、深さ0.5~0.6mを測りしっかりととした掘り込みである。なお、床面を一段下げたところに四壁に並行するように細い溝が現れた。下層で削平されて既に失われた住居跡の壁周溝の可能性もあるが、方位が本住居跡の西壁に並行しており、本住居跡の建て替え、あるいは本住居跡に伴う何らかの施設であった可能性があるが判然としない。

壁際土坑

東壁のはば中央部に掘り込まれた土坑である。平面形状は大略卵形で長軸1.0m、幅0.7mほどを測り、底部は住居跡の壁側と中央寄りとの二つの小土坑に分かれる。中央寄りの土坑は当初の埋土である黒褐色粘質土を掘り下げていくと直径5cmほどの小円形の痕跡が5cmほどの間隔を置いて並んでいる状況が現れた。調査者は出入り施設の痕跡として梯子を想定するが、ステップとなる横木を固定するには幅がせますぎるようと思える。昇降施設の痕跡であることは疑いないが、それがど



第84図 8・9・11号堅穴住居跡実測図 (1/60)

のようなものであったのかは今後の課題であろう。一方、壁側の土坑は深さ0.2mほどの二段掘りで0.7m四方の略隅丸方形を呈し、出入り施設の固定孔を埋め戻したあとに掘削しているとみられる。3号住居跡で確認した、出入り施設背後のデッドスペースを利用した収納施設と考えられる。

出土遺物

石製品（図版61、第150図20） これも顕著な使用痕は認められないが、全体に滑らかとなり、特に図表裏の2面が平滑化する安山岩。図下端の破面は人為的なものであるかも知れない。

土器（第82図8～12） 8は口縁部がほぼ垂直に近く立ち上がる壺で、口縁部の1/4が残存。器表が荒れている。9は炉跡から出土した鉢で底部は完周、体部も2/3ほどが残存する。赤変、黒色化といった被然の痕跡は見えないが、器表のほとんどが剥落している。10は屋内土坑出土の鉢。小片であるが胎土は良好、調整も丁寧になされる。11・12は小型平底の底部。

8号竪穴住居跡（図版40、第84図）

I区南西部で検出した。7・13号住居跡を破壊し、10号住居跡に南辺を大きく破壊される。西辺は調査区外に広がっている。

床面からやや歪んだ正方形に配置された主柱穴と考えられるピットが4本検出され、また竪穴部西寄りの西辺中央部でカマドの使用により形成されたと推定される被然赤変部が確認されたことから、正方形プラン・4本主柱で西辺中位にカマドを付す古墳時代後期の竪穴住居跡と復元される。南・西辺が完全に失われているため規模は不明だが、主柱穴の位置より推定すると東西長4.44m、南北幅4.36mの規模が復元される。床面は攪乱により大きく荒らされており、さらに北側2/3ほどは徐々に西に傾斜していることから、本来の床面は大半が削平により失われたと考えられる。にもかかわらず西辺の内側中位にカマドによる被然赤変部が認められるのは、2号住居跡と同様に、赤変が床下の地中にまで及んでいたことによるものだろう。主柱穴の配置はやや乱れがあるが、いずれも床面からの推定深さが0.4m前後あり、直径も0.3mほどで共通性が高く、周囲にはほかに主柱穴たり得る柱穴も見られない。

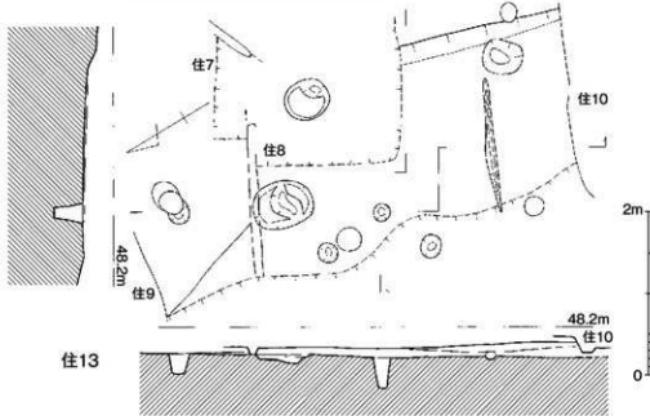
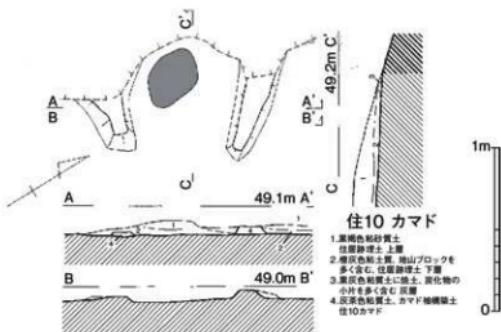
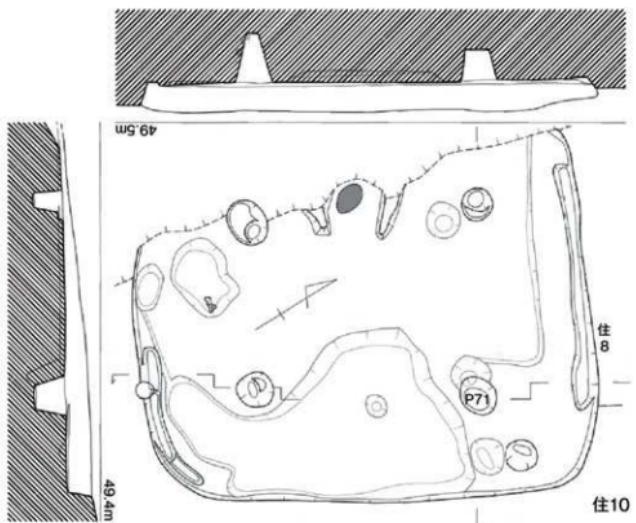
出土遺物

土器（図版51、第82図13・14） 13は完存する高杯杯部で、器表が剥落する。14は脚上部の1/2が残存するが、端部は小片となる脚部片で、これは赤く焼き上がりついて杯部とは別個体のようである。

9号竪穴住居跡（図版40、第84図）

I区南西部、11号住居跡に西側の大半を破壊される状態で検出した。西側の半分以上が調査区外に広がっていることもあり、東辺の大半と南辺の一部が調査できずに過ぎない。南東側で7号住居跡と切り合い関係を持っており、これを破壊する。

9号住居跡の床面上で本住居跡に伴うと考えられる主柱穴を2本検出しており、これらの2本を含む4本の主柱から構成される平面方形プランの住居跡と推定できる。その場合、弥生後期以降の住居跡を想定でき、出土遺物はその蓋然性を示している。しかし、この遺跡での弥生後期の住居跡では例外なく東辺にいわゆる屋内土坑を設置しているが、本住居跡にはそれが見られない。したがって、周囲の住居跡と同様に西壁の中位にカマドが付されているものの調査区外にあたって確認できない古墳時代後期の遺構の可能性もある。規模は南北幅のみ判明し約3.76m、東西長は4本主柱の方



第85図 10・13号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)

形住居跡であることを前提とすると主柱穴の位置から判断して南北幅よりやや長い4.4mほどと推定されるが確実ではない。

出土遺物

土器（図版51、第82図15） 出土土器は少ないが、全体を窓える高杯を図示した。口縁部が大きく浅く開き、下半が浅い高杯で杯部は完存に近い。器表の一部のみが遺存状態がよく、暗文が観察できる。脚部は開きが小さく、これは器表が荒れている。出土遺物に須恵器ではなく、積極的に古墳後期に属するといえるものはない。

10号竪穴住居跡（図版40・41、第85図）

I区南西部で検出した住居跡である。8号住居跡の南側で、これを一部破壊するように切り合う。西壁が削平され、あるいは調査区外の西側に広がるほかはほぼ全体を検出できた。

平面プランはほかにあまり例を見ない隅丸方形で、床面からはやや南北が長い長方形上に配された4本の主柱穴と西辺中位に付された内接型のカマドを検出した。竪穴部の規模は、南北幅が完全に把握でき最大で5.40mを測る。一方東西長は西壁が失われているため主柱穴やカマドの位置などを勘案して推定すると4.4mほどの規模となり、やや幅の広い隅丸長方形形状の住居跡となろう。床面には硬化面が広く形成され、これを除去すると平均深さ5cmほどの不定形の床下掘り込みが現れた。

カマド

西壁のほぼ中位に検出した。西壁自体は削平により失われていて袖の接壁状況や長さは判明しないが、残された袖がわずかに内側にすばまっており、平面形状は壁に直行しながらまっすぐ平行にのびるよりはわずかに弧を描くタイプと推定される。袖間の距離は最大部で0.7m弱を測る。支脚やその痕跡は確認できなかった。被熱赤変部が形成されている位置から判断すると、削平により失われてしまった可能性もある。埋土は大半が住居跡の埋土と共に西寄りの最下層に灰層がわずかに残されていた。

出土遺物

石製品（図版61、第149図2） 直径5mm、長さ4mmほどの滑石製白玉で、直線的に穿孔された孔径は2mmである。側面は白い筋が入る。柱穴P71の埋土上層出土。

土器（図版50、第82図16～20） 16～19・21は須恵器、20は土師器である。

16はほぼ完存する口径12.9cm、器高3.6cmの杯蓋で、天井部・口縁部界は緩くわずかに凹んでいる。焼成は甘い。17は壺口縁部小片で、口端部に断面三角突帯を付す。18・19は高杯。18は残存する内外全面が灰を被って黒色化する。19は胎土・作りともに良好な残片で、内面に窯土の小片が熔着している。21はP71とした柱穴からの出土である。

20は図示部がほぼ完周する高杯脚部で、胎土良好、赤く焼き上がる。

11号竪穴住居跡（図版40、第84図）

I区南西部で検出した。9号住居跡を大きく破壊するように切り合い、西側の半分以上が調査区外に広がる。竪穴部の位置は7号住居跡と重複しており本住居跡が後出するが、間に11号住居跡を介しており残された遺構同士の直接的な切り合い関係はない。

東壁は完存するが、南北壁は西側の半分以上が調査区外にのびており、西壁は完全に調査区外にある。従って規模は南北幅が判明し、4.68mを測る。床面からは2本の主柱穴が出土しており、出

土器や先に触れた屋内土坑の在り方などを勘案すれば4本主柱で方形プランの古墳時代後期の住居跡と推定される。これを前提として残された東壁と主柱穴の位置などから東西長を復元すると、4.6mほどの規模になろう。検出した主柱穴は径0.4m、深さは0.5mほどありしっかりと堀方を持つ。カマドは周囲の住居跡と同じく西壁の中位に持つと推測されるが調査区外にありすでに削平により失われたと見られる。

出土遺物

石製品（図版61、第149図3・7） 3は滑石製紡錘車の断片で、上下両面はやや不整となり、側面は匙面状に成形される。淡灰色の地に暗灰色の斑が入る。7は立岩産石庖丁の小片で、穿孔は両面から浅い角度でなされる。

土器（第86図1・2） 遺物は少ない。1は須恵器杯身小片で、焼成が甘い。2は土師器甕で、口端部をわずかに欠いているようである。器壁が薄く器表が荒れているが、外面が赤変するとともに内面上半が黒色化する。

12号堅穴住居跡（図版41、第87図）

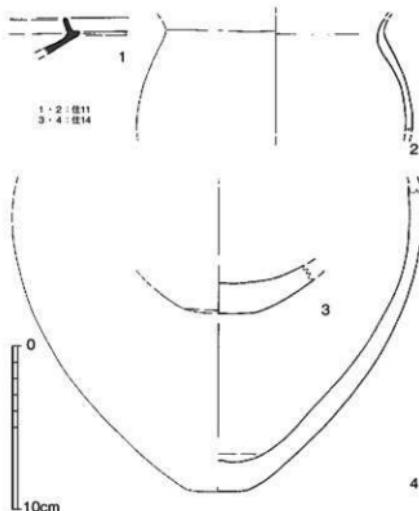
調査区東側の10号土坑から東へ約5mのところで検出した円形に廻る柱穴で、元は円形プランの住居跡である。丘陵の頂部にあたるため特に削平が著しく、主柱穴のみの検出である。主柱穴にあてたものでは、どれもよく似て柱痕がはっきりするものであった。柱穴の径は0.25~0.3m、深さ0.07~0.2mで、柱穴から外縁に1m程度大きくして考えると推定される住居の径は8.5m程度であろう。

出土遺物はない。

13号堅穴住居跡（図版41、第85図）

I区南西部で検出した。8号住居跡と重複しておりこれに大きく破壊されるほか、7~10号住居跡とも重複関係にあっていずれよりも古い。

検出した遺構は南側の壁周溝と中央炉跡、2本の主柱穴で、北側の主柱穴は7号住居跡の床面下から、そのほかは8号住居跡の床面掘り込み下層から検出した。また、中央炉跡東側のやや南によった位置の攪乱中に床面からの深さが復元で0.2m弱を測る深い土坑があり、報告者はこれを壁際土坑とするが、他例は壁際土坑がほぼ壁の中央につくため中央炉跡の位置に対応するものが大半であり、やや疑問も残る。おそらく弥生時代後期の2本主柱・長方形プランの住居跡と推測され、規模は南北長のみ復元でき約5.2mを測る。前述の土坑が壁際土坑だとすれば、東西幅は約2.5mに復元できよう。中央炉跡は直径約0.6m、深さ0.1mほどの浅い皿状を呈する。主柱穴は直径0.25~



第86図 11・14号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

0.3m、深さはやや浅く0.3~0.4mほどを測る。

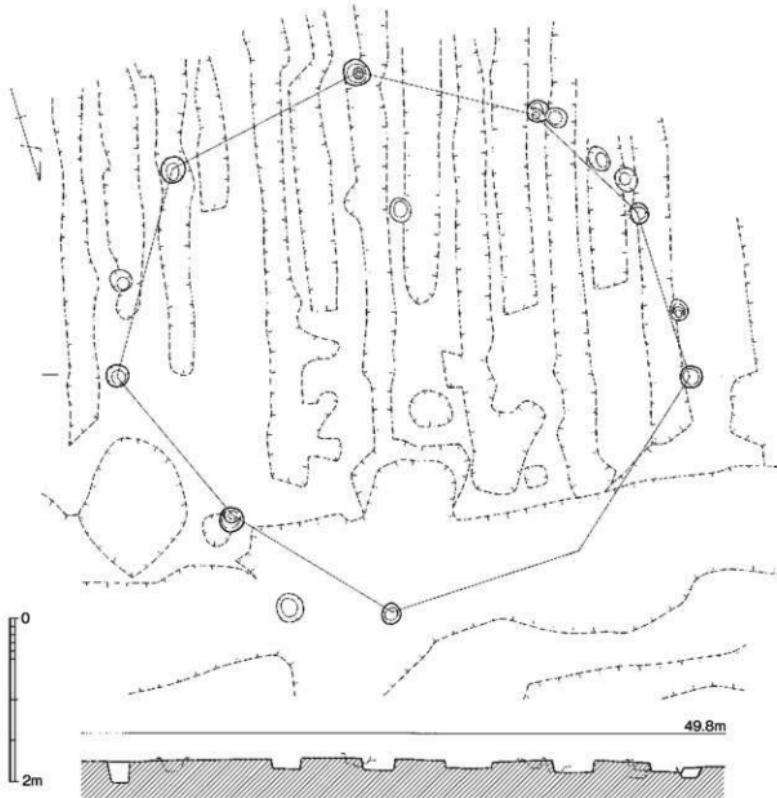
出土遺物は少なく図示していないが、弥生後期に属すると判断している。

14号竪穴住居跡（図版42、第88図）

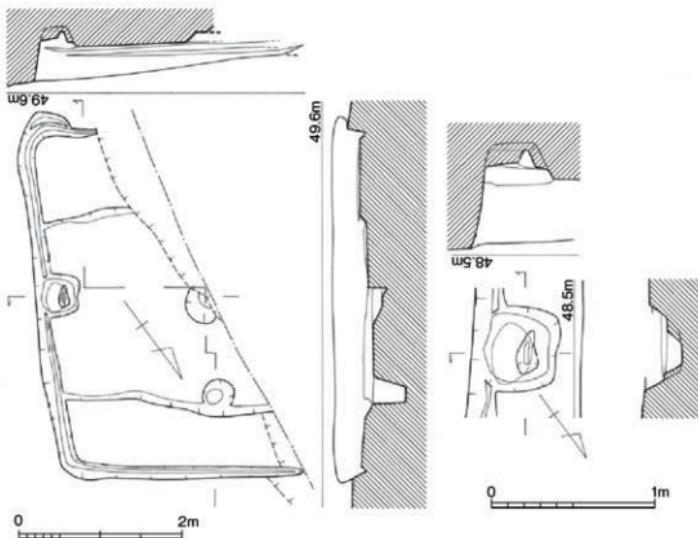
I区中央部の西端で検出した。調査区西側に半分以上が広がっており、西壁は完全に失われているほか、南壁の大半と北壁の一部も失われている。ほかの遺構との切り合い関係はない。

南北壁に幅約0.8~0.9mのベッド状遺構を付し、床面からは中央炉跡と北側の主柱穴、東壁の中央部に壁際土坑を設置する。南側の主柱穴は調査区外に位置するものであろう。竪穴部の規模は南北長が4.10m、東西幅は中央炉跡と東壁の位置関係から3.9mほどに復元できよう。中央炉は半分弱が削平により失われているが深さ0.1mほどの浅い皿状を呈する。主柱穴は直径0.3m、深さ0.4mほどの規模を持つ。

壁際土坑



第87図 12号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第88図 14号堅穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

東壁の中央部に検出した。幅0.55m、長さ0.4mほどの略長方形を呈する小土坑で、深さ0.25mほど掘り込んでから幅0.2m、厚さ0.05mほどのおそらくは昇降施設の根元部分を埋め込み、まわりを0.15mほど埋め戻して深さ0.1mほどの浅い土坑状に仕上げた構造である。残念ながら埋土の記録はない。同様に昇降施設の根元を埋設した痕跡が確認できた3・7号住居跡の場合、壁側を深く掘り込んだ状態で残しており、おそらく収納施設として利用していたと考えられるが、本例の場合土坑部分は浅くスペースも十分ではない点が両者との相違であろう。

出土遺物

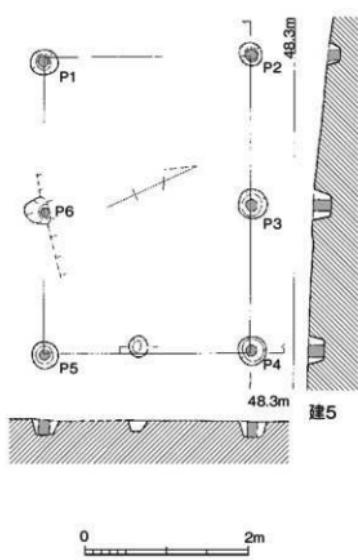
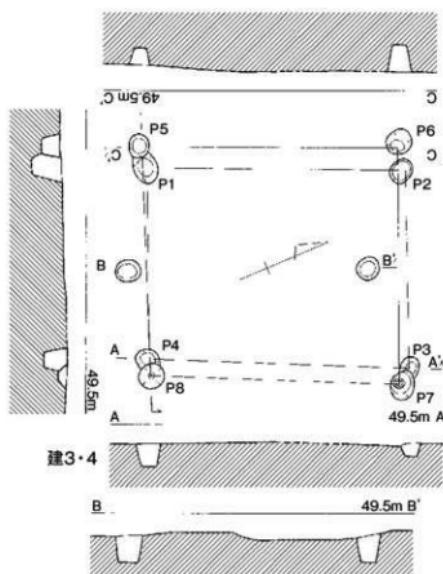
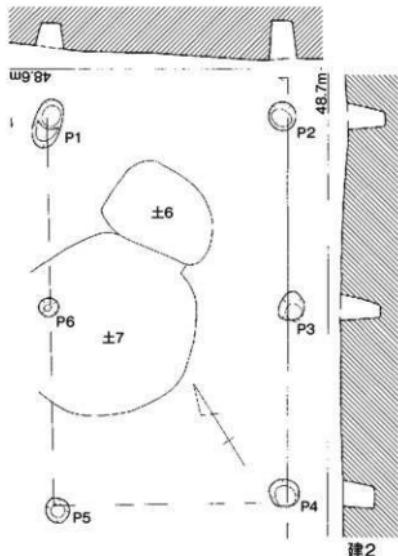
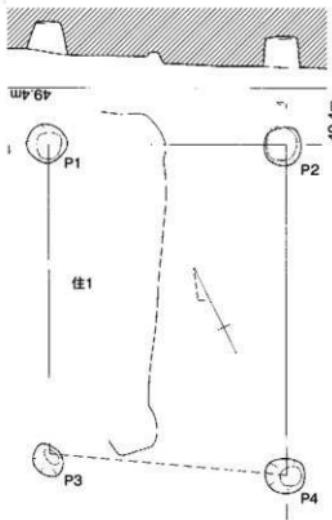
土器 (第86図3・4) 3はレンズ状底部としてよいが、膨らみはわずかである。4は1/2強が残存する平底の底部片。胎土は良好といってよいが、器表は荒れる。

(3) 掘立柱建物跡

I区内から11棟、II区から1棟の計12棟の掘立柱建物跡を検出した。大半が1×1間または1×2間の構造を持ち、弥生時代後期に属するものと考えられるが、6号建物跡だけは3間×3間の側柱建物で古墳時代後期に属すると考えられる。番号は調査の進捗に従って付しておき、以下これに従って北側から時計回りに述べていくこととする。

1号掘立柱建物跡 (図版37、第89図)

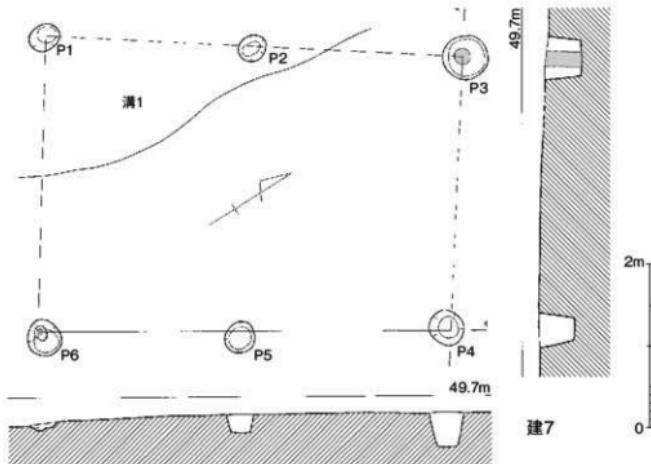
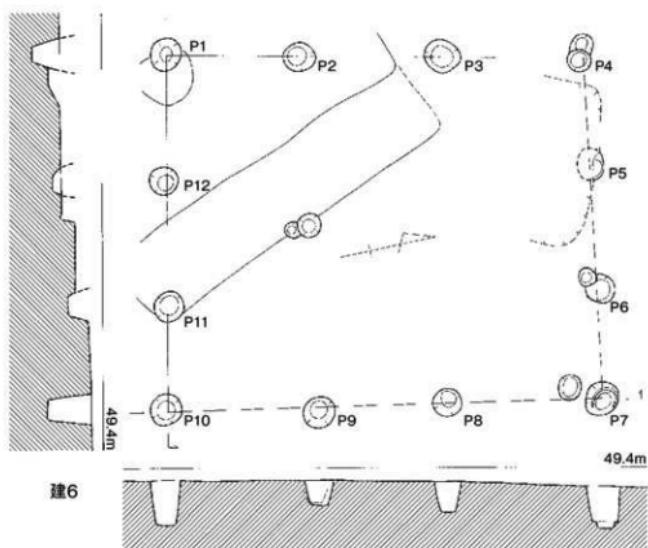
I区北東寄りで検出した1×1間の建物跡である。1号住居跡と切り合い関係を持ち、本建物跡が先行する。主軸は北東-南西方向で、桁行3.84~4.10m、梁行2.92mの規模を持ち、柱配置は南西の柱穴がややずれるほかはおよそ長方形プランである。柱穴の規模は径0.45~0.5m、残存深さ



第89図 1～5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

は0.4m内外である。

P 2（調査時はP 7、以下同。）とした柱穴から外面を刷毛目調整した壺頭部以下の残片が出土している。弥生後期に属するものであろうと想定している。



第90図 6・7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

2号掘立柱建物跡（図版42、第89図）

I区北西部で検出した1×2間の建物跡である。北西側に2～5号住居跡が隣接するが、本建物跡と切り合い関係はない。弥生後期の7号土坑と切り合い、これに主柱穴の1本を破壊される。

主軸は北東～南西方向で、桁行4.66～4.82m、梁行2.80～2.88m、桁行の柱間距離は芯～芯で2.26～2.48mを測り、おおよそ長方形プランに則っている。主柱穴は6号土坑に上半を破壊される1本を除きいずれも検出面で直径0.3m前後、残存深さは残りのよい東側で0.4～0.5mを測り、底面レベルはおおよそ共通する。

P4・3・2（P12・13・16）から土器片が若干出土する。そのうち、P2から無文扁平な帶状突帯をもつ小片が出土している。

3号掘立柱建物跡（図版42、第89図）

調査区北東側で4号建物跡とほぼ重複して検出された1×1間の建物跡である。4号建物に破壊されており、これに先行する。主軸は北東～南西方向で、桁行3.14～3.18m、2.36～2.42mの規模を測り、おおよそ長方形プランに則っている。主柱穴は0.3m前後の長楕円形で、残存深さは検出面より0.3m前後と、同じ位置で切り合う4号建物跡よりもやや深い。

出土遺物はない。

4号掘立柱建物跡（第89図）

調査区北東側で3号建物跡とほぼ重複し、これと一部切り合いを持ちつつ後出すする1×1間の建物跡である。主軸は北東～南西方向で、桁行3.06～3.16m、梁行2.84～2.94mでやや歪みのある長方形プランである。主柱穴はいずれも径0.25m内外の略円形を呈し、残存深さは3号建物跡よりも浅く0.1～0.2m程度である。

遺物としてP8（P11）から土器小片2点が出土しているが、記すべき特徴はない。

5号掘立柱建物跡（図版43、第89図）

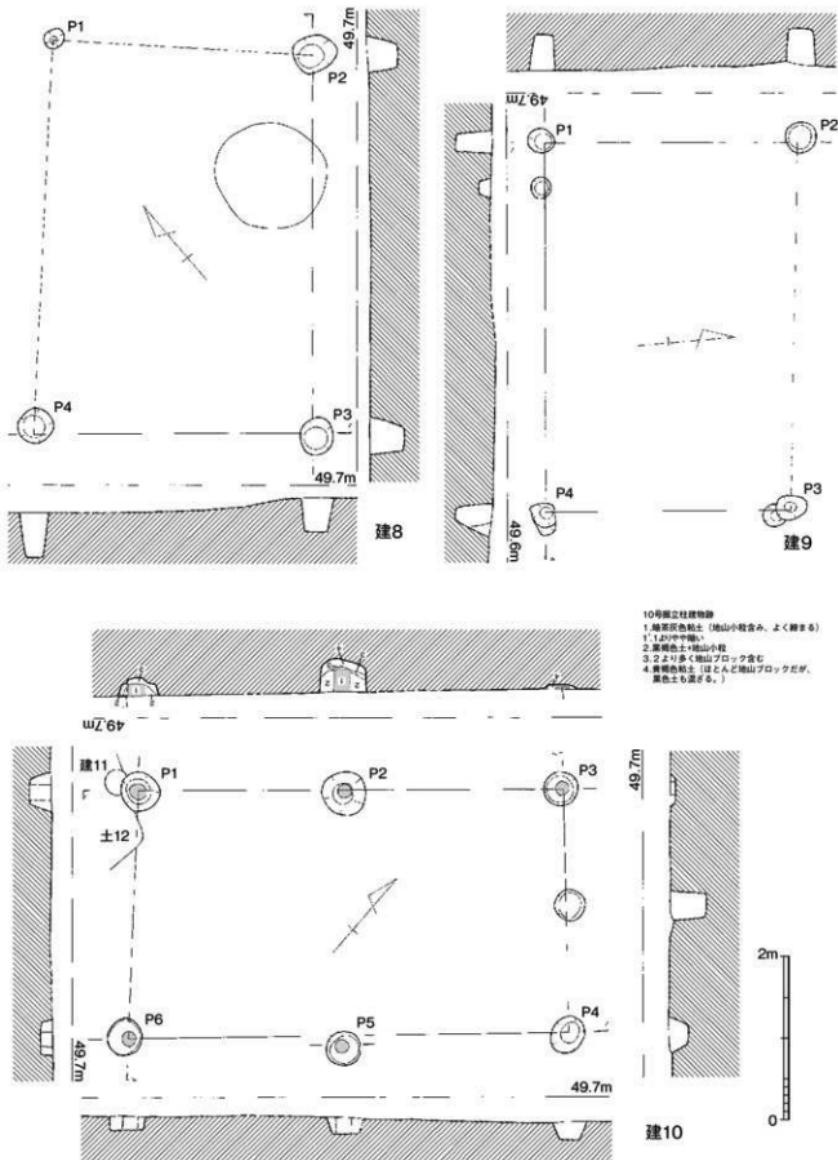
II区中央部で検出した建物跡である。北に6号住居跡が隣接するが直接的な切り合い関係はない。西側に堆積している黒褐色粘砂質土からなる遺物包含層の上層から掘り込まれており、この層の堆積よりも後で建てられた施設である。主軸は大略東西に向き、桁行3.64～3.66m、梁行2.56m、桁行の柱間距離は芯～芯で1.82～1.86mを測り、かなり整った柱配置を持つ建物跡である。主柱穴はいずれも直径0.25～0.3m程度の円形で残存深さは0.2m前後とかなり浅い。柱穴底面の中央部には直径0.1～0.15mの柱の当たり痕と考えられるわずかなくぼみが取取された。

P4・3（P53・54）から土器片が出土していて、P4には口縁部を逆L字状とする城ノ越式甕の小片があるが、包含層が同後期までに形成されたものであることから、混入と考えるべきであろう。

6号掘立柱建物跡（図版43、第90図）

I区南西部で検出した。7～13号住居跡が切り合いながら密集する北東側に隣接し、7号住居跡と一部の柱穴が切り合い関係を持っていてこれに後出す。

主軸を大略南北にとる3×3間の側柱建物で、規模は桁行が5.10～5.36m、梁行が4.20～4.36m



第91図 8~10号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

を測る。柱間距離は桁行が芯-芯で1.66~1.8m、梁行が1.36~1.56mとややばらつきが見られる。西に隣接する9・11号住居跡、南に隣接する8・10号住居跡といった周囲の古墳時代後期の住居跡群とおおよそ方位をそろえており、埋土の色調も類似することから、古墳時代後期の建物跡の可能性が高い。

多くの柱穴から数点の土器小片が出土している。そのうち、P4（P65）からは口端部に面を作り出す弥生後期に属するものと考えられる甕口縁部小片がある。

7号掘立柱建物跡（図版43、第90図）

I区南側の西寄りで検出した1×2間の建物跡である。1号溝と切り合い、これよりも古い。主軸は北東-南西にとり、規模は桁行が5.2~5.4m、梁行が3.36~3.64mを測り、桁行の柱間距離は芯-芯で2.40~2.56mとややばらつきが見られる。柱穴は大きなものでは直径0.55m、小さなものでは0.35m程度の略円形で、残存深さは最大0.45m程度である。底面レベルにはややばらつきが見られ、南東側に行くほど浅い。P3の底面より、柱の当たり痕とみられる直径0.18mの円形のくぼみを検出している。

P3（P83）とした柱穴から土器小片が若干出土するが、これも記すべき特徴はない。

8号掘立柱建物跡（図版44、第91図）

I区中央やや南寄りで検出した。南に7号建物跡、北に12号建物跡が隣接し、西には1号溝もあるがこれらの遺構との切り合い関係はない。また、柱の配列内に9号土坑が存在するが、残された遺構の直接的な切り合い関係は持っていない。

1×1間の建物跡で、桁行4.62~4.72m、梁行3.2~3.46mの規模を測る。7号建物跡と比較的の規模が類似するが、本建物跡は桁行に柱間柱穴がない。柱穴は擾乱により削平されたP1を除き直径0.4~0.45mほどの略円形で深さは0.4~0.55mとしっかりとした堀方を持つ。

P4（P82）とした柱穴から甕の体部下端付近の破片が出土していて、弥生中期初め頃の土器を想定している。

9号掘立柱建物跡（図版44、第91図）

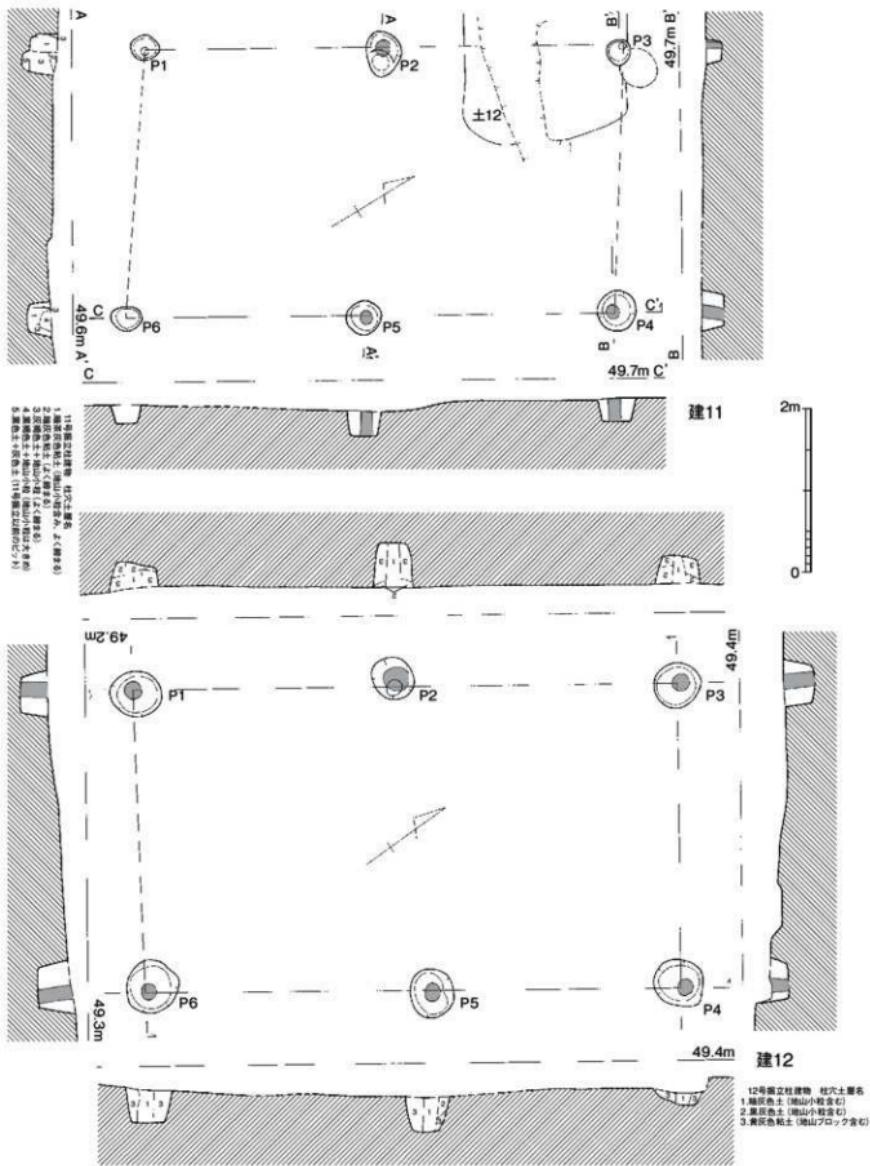
I区中央やや北寄りの東側で検出した。北に3・4号建物跡が、東に4号土坑が隣接する。西側には柱の配列範囲を一部重複させながら10号建物跡が隣接するが、残された遺構同士の直接的な切り合い関係はない。

1×1間の建物跡で主軸を東西にとり、規模は桁行4.56m、梁行3.00~3.20mを測り、北西側の柱穴がやや北にずれるほかは大略長方形状に分布する。8号建物跡よりわずかに小型で、構造が共通する。主柱穴は検出面で直径0.3~0.4mの不整円形で、深さは0.4~0.5mを測り、比較的よく残る。

出土遺物はない。

10号掘立柱建物跡（図版44、第91図）

I区中央部やや東寄りで検出した。主軸を北東-南西にとる1×2間の建物跡である。南に隣接する11号建物跡と柱穴の一つが切り合い関係を持ち、本建物跡が後出する。また、東側では柱の配列範囲が9号建物跡と一部で重複するが、残された遺構同士の直接的な切り合い関係はなく先後



第92図 11・12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

関係は不明である。

建物の規模は、桁行5.22～5.42m、梁行2.98～3.02mを測り、桁行の柱間距離は芯一芯で2.54～2.80mとややばらつきが見られる。柱穴は直径0.4～0.6mとやや大きく、残存深さは0.2～0.5mとやや幅が見られる。P4を除く5つの柱穴は検出面で埋土の中央に円形に暗い色調の粘質土が見られ、土層を確認したところ底部よりやや上層までのびている状況が確認できたという（土層図参照）。調査担当者は、これを柱痕跡と想定した。しかし、最下層は数cmの厚さにわたって地山ブロックを多く含む埋土が堆積し、その上から暗い色調の粘質土が始まることから、これが柱痕跡とすれば、一度底部まで柱穴を掘り下げておいてから数cm埋め戻して柱を立てたことになり、弥生時代の倉庫建物としては一般的ではない。従って、調査担当者が柱痕跡と考えた暗い色調の埋土については、ややその性格に不明確な部分が残される点は否めない。

各柱穴から土器片が出土しているが、尖底に近い丸底の底部を除いて特徴はない。須恵器の出土を見ないが、古墳後期に属するとの可能性を考えている。

11号掘立柱建物跡（図版45、第92図）

調査区のはば中央部で検出した。北に隣接する10号建物跡と柱穴の一つに切り合い関係が認められ、本建物跡が先行する。また同じ柱穴が12号土坑とも切り合っており、これに後出する。西には12号建物跡が隣接するが切り合い関係はない。

主軸を北東～南西にとる1×2間の建物跡で、規模は桁行が5.90～6.00m、梁行が3.28～3.30mで比較的大型の建物である。桁行の柱間距離は2.92～3.08mを測る。柱穴は直径0.5～0.6mと大きめで、残存深さは0.15～0.5mとやや幅がある。柱穴P2・5・6の検出面で、埋土の中央部に直径0.2m弱の暗い色調の粘質土が認められ、土層を確認したところ、この粘質土は底部までのびていた。従ってこれらは柱痕跡と認められる。また、一部の柱穴に底面には柱の当たり面と考えられる直径0.2m弱の円形のくぼみも認められた（図では赤線で表現）。

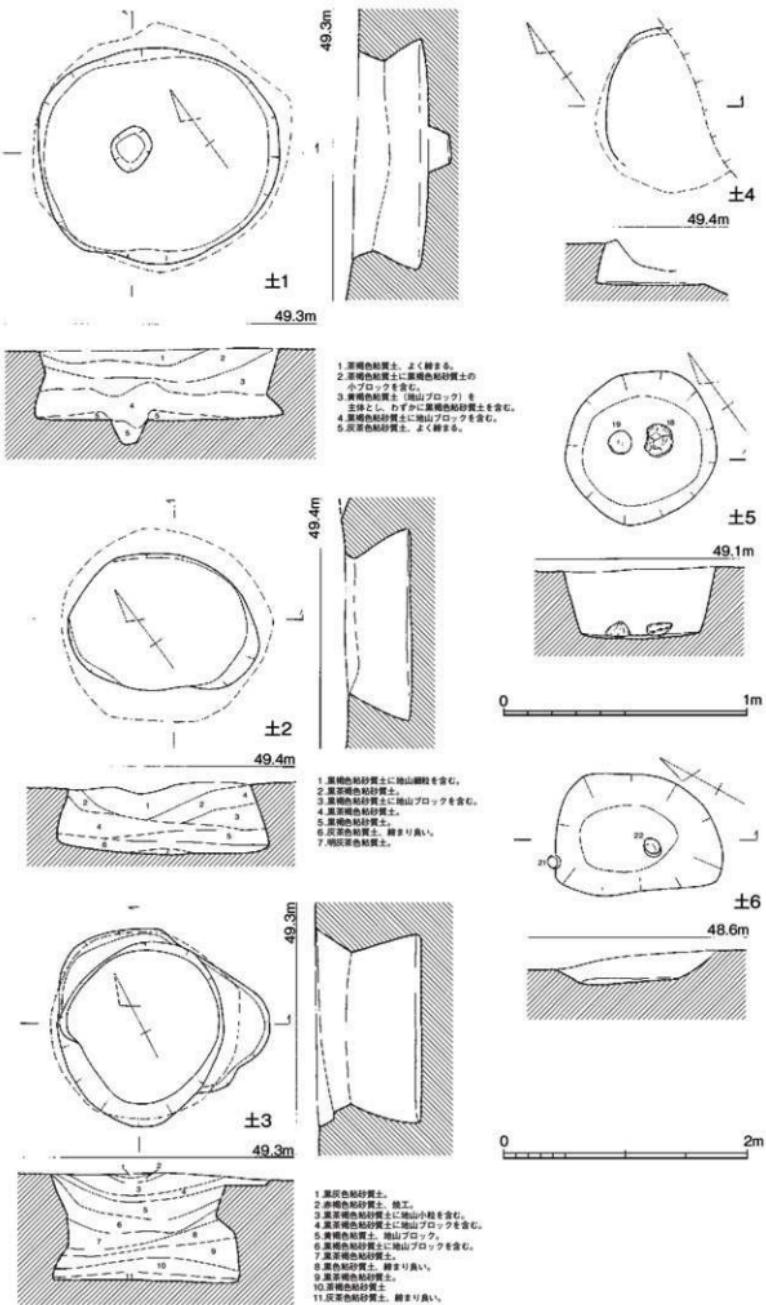
出土遺物はない。

12号掘立柱建物跡（図版45、第92図）

調査区のはば中央で検出した1×2間の建物跡である。東に11号建物跡が、南に8号建物跡が隣接するが相互に切り合い関係を持たない。

主軸は北東～南西方向で、規模は桁行が6.58～6.68m、梁行が3.72～3.76mを測り、桁行の柱間距離は3.12～3.52mでややばらつく。1×2間の建物跡の中で最も規模の大きな建物跡である。柱穴も大きく、直径0.6m前後の略円形で深さは0.2～0.5mとややばらつきを持つ。検出面で埋土の中央に直径0.2m弱の円形の痕跡を発見し、底部まで柱状に暗い色調の粘質土が続く状況が確認された。柱痕跡と考えられる。一部の柱穴には底面に円形のくぼみが認められ、柱の当たり痕と推定されるが、検出面で確認した円形の埋土の位置とややずれが見られるのが興味深い。

P1（P110）とした柱穴から土器小片1点が出土しただけである。



第93図 1～6号土坑実測図 (1～4・6は1/40、5は1/20)

(4) 土坑

大西遺跡第4次調査では、I区で計12基の土坑を検出した。平面が円形プランを呈し、壁が内傾する、いわゆる袋状貯蔵穴が多いが、平面が長楕円形の土坑で古墳時代後期に属するものも散見される。袋状貯蔵穴については、検出面で埋土の周囲の地山にひびが入り、変色する例が散見され、一部については変色部分を崩落堆積土と誤認して掘削してしまったが、土層などを確認した結果、原則として変色部は土坑が埋没するまで崩壊せずに残っていたと推測される。以下、各遺構ごとに詳述したい。

1号土坑（図版45、第93図）

I区の北東コーナー部付近で検出した。平面形状は長径1.95m、短径1.85mの椭円形を呈し、壁はきつく内傾しつつ立ち上がって底部から0.2~0.4m付近で屈曲し、外反しつつ口縁部に至る。いわゆる袋状貯蔵穴である。残存深さは0.6m、底面径は2.05mほどを測る。底面の中央やや寄りに直径0.3m、深さ0.2mほどの小ビットを持つ。埋土はレンズ状を呈し、ゆっくりと自然埋没した状況を示す。

出土遺物

土器（第94図1~3） 1は逆L字状となる城ノ越式の壺口縁部小片、2は口縁部端を欠損するが同様の形態になるであろう小片。これは頸部下に断面三角突帯を付すとともに、内外面を赤色塗彩する。3は図示部がほぼ完周する壺底部で、器表が荒れている。内面底部付近が黒色、その上位は褐色となっている。

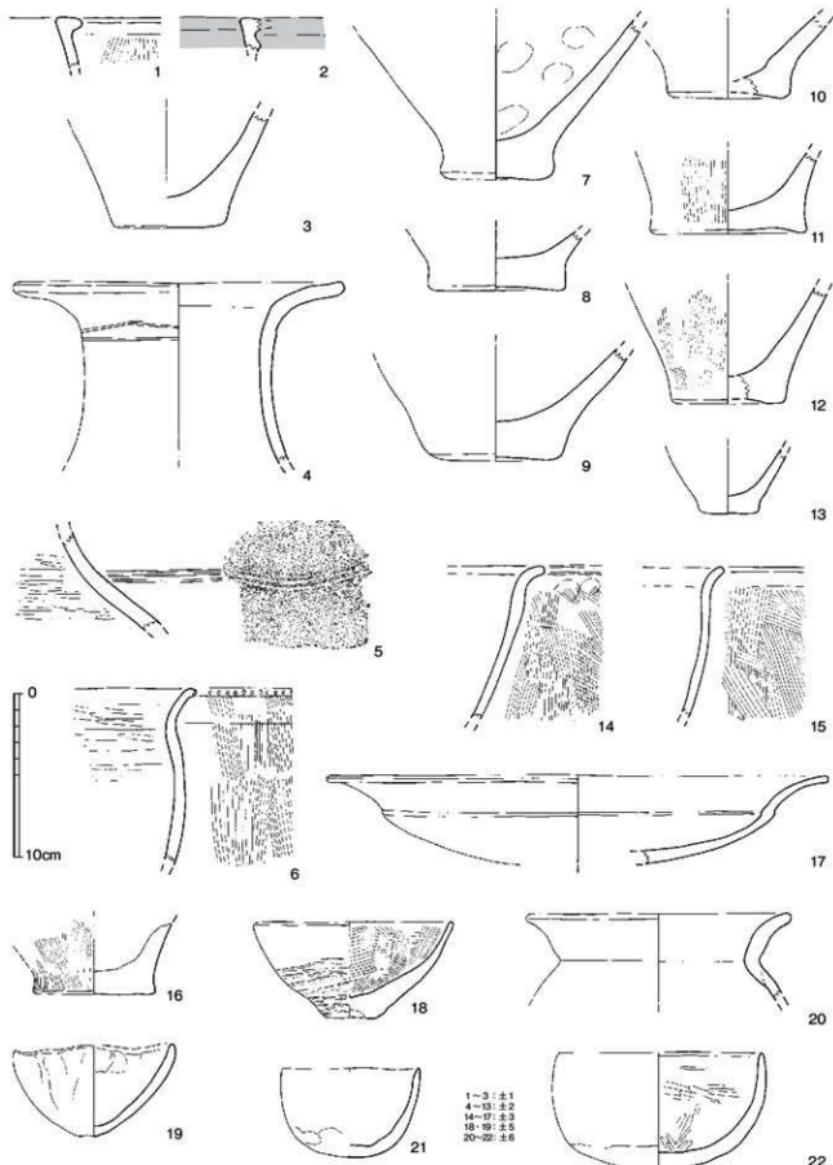
2号土坑（図版46、第93図）

I区の北東コーナー部付近で検出した袋状貯蔵穴である。北東に1号土坑が、東に3号土坑が隣接する。南には3・4号建物跡も位置する。底面形状は直径1.75mほどの略円形を呈するのに対し、検出面における平面形状は長軸1.5m、短軸1.1mほどの不整長楕円形を呈するが、短軸部分の壁がきつく内傾するのに対し長軸部分の内傾度は緩く、このような形状を形成している。当初よりこの形状に作られた可能性もあるが、一方では長軸部分の壁体が0.2mほど崩落した可能性もある。埋土には現れていないため、崩落したとすれば使用中であったと推測される。残存深さは0.5m程度で、埋土はレンズ状を呈し、自然埋没の状況を示す。底面中央部がごく浅くぼみ、調査時にはビットと認識して0.1mほど掘り下げたが、土層を検討したところ大半が地山と判断され、結局ビットというほどのはっきりしたくぼみではないという結論に至った。

出土遺物

土器（第94図4~13） 4は頸部が高く直して口縁部が強く外反する壺口頸部で、頸部上位に2条の範描沈線を巡らせるが、始点・終点がずれている。胎土は良好であるが、器表が荒れている。5は3条の範描沈線を刻む肩部の小片。これも沈線は平行ではない。6は如意形口縁をもつ壺の小片。口縁部の外反は弱く、端部下端に繊細な刻みを付す。内面は全体を範磨きで、外面は刷毛目で仕上げる。

7~13は底部である。7は1/2が残存、内外面ともに範磨きで仕上げるようである。8は完周、これは器表が荒れている。9は3/4が残存、これも範磨きで仕上げるようである。10は1/2の残片



第94図 1～3・5・6号土坑出土土器実測図 (1/3)

で、器表が荒れている。11・12はいずれも1/2ほどの残片で、いずれも外面に刷毛目が残る。11は底部外縁から体部下端にかけて赤変し、内面もわずかに赤変する。13は小型土器の完周する底部で、器表が荒れている。

3号土坑（図版46、第93図）

I区北東コーナー部付近で検出した。1号土坑の南、2号土坑の東に隣接する。

検出時の平面形状は東が一部突出する直径1.4mほどの円形を呈し、壁はややオーバーハングしている。底面は略円形で直径1.6mほどを測る。残存深さは最大0.8mほどあり、比較的残りの良い袋状貯蔵穴である。東側の突出部は底面に降りるための階段状の施設である可能性もあるが、当初より設計されていたものかについては他例も含め慎重な検討が必要だろう。

出土遺物

石製品（図版61、第149図15） 安山岩の扁平な川原石といってよいのであろう。全体に滑らかとなるが、図下側の側面に不自然な小さな凹凸が無数に見られ、叩き石として使用されたものと思われる。

土器（第94図14～17） 14・15は如意形口縁の甕小片である。口縁部の外反の度合いが異なっているが、いずれも短く胎土も似ていて同一個体の可能性がある。ともに内面は施磨き、外面は刷毛目で仕上げる。16は図示部が完周する底部で、内面がすべて剥落する。

4号土坑（図版47、第93図）

I区北寄りの東端で検出した。西に9号建物跡が隣接する。本土坑は半分ほどが東側の調査区外に掛かっており、全形は把握できていないが、直径1.3～1.35mほどの円形プランの袋状貯蔵穴の底部付近と推定される。上半部は大きく削平されていて残存深さは0.3mほどしかなく、東側は攪乱に破壊されている。

出土遺物はない。

5号土坑（図版47、第93図）

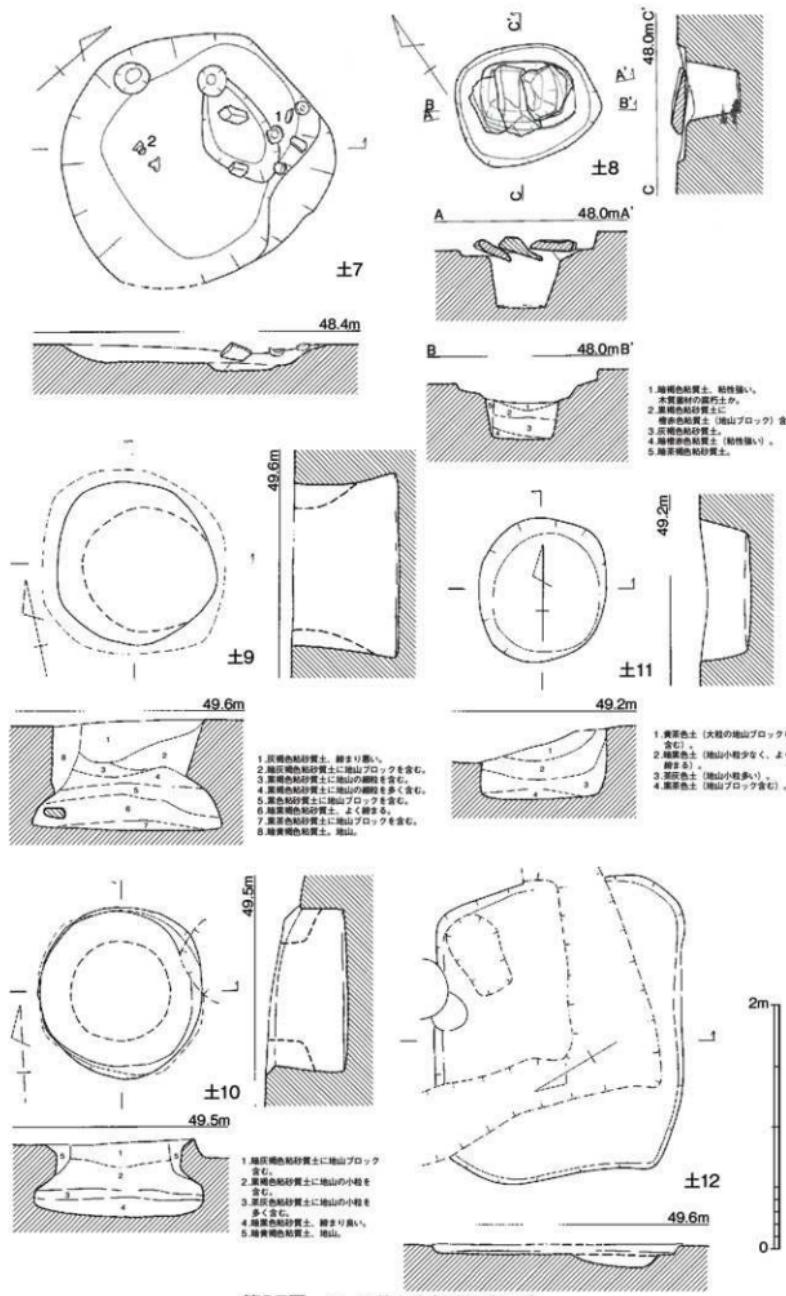
I区中央やや東寄りの北側で検出した小土坑である。平面形状は円形プランで直径約0.6mほどを測る。壁の立ち上がりはごくわずかに外反し、底部は平坦で直径0.5mほどを測る。残存深さは0.3m弱ほどである。埋土は黒灰色粘砂質土の單層である。底面直上より小型の鉢が2個体出土した。一方は正位で、もう一方は逆位で置かれていた。

出土遺物

土器（図版51、第94図18・19） 18は底部がほぼ完存、口縁部の1/3が残存する鉢で、外面が荒れているが一部に叩きが見える。正位して出土したが内面の遺存状態はよい。19は伏せ置かれた尖底気味となる鉢で、ほぼ完存する。手捏ねで作られていて口縁部は不整となるが、内外面は比較的平滑化する。胎土は良好。

6号土坑（図版47、第93図）

I区北東よりで検出した。2号建物跡の柱配置枠内にあるが、残された遺構との直接的な切り合い関係はない。また南に7号土坑が隣接するが、切り合い関係は持っていない。平面形状は長軸1.4m、短軸1.0mほどの不整長楕円形で、残存深さはごく浅く0.2m程度しかない。底面はわずか



第95図 7~12号土坑実測図 (1/40)

に船底状を呈し、壁の立ち上がり角度は緩い。

出土遺物

土器（図版52、第94図20～22） 20は肉厚となる甕で、頸部の1/4が残存。全体に焼けて赤変、器表が荒れているが、体部内面の箝削りを確認できる。21は北西小口上から出土した円筒形に近い体部に丸底をもつ鉢あるいは椀で、完存する。全体にわずかに歪んでいて、内外面で器表が剥落している。22は土坑内、床面から8cmほど浮いて出土した。口径が大きくなるが、形状は21に似る。上面観がわずかに扁円形となり、内面は多くが剥落するがなお鏡磨きを確認できる。体部下半から底部にかけて焼けて真っ赤となる。

7号土坑（図版47、第95図）

6号土坑の南西側に隣接して検出された。検出当初は6号土坑や周辺の不整形の浅い掘り込みなどと一体の遺構と認識しており、一段下がったところでそれぞれが別個の遺構であることが判明した。元々大きく削平されていて浅くしか残っていなかったが、一段落としたためさらに浅くなってしまい、残存深さは0.1m程度しかない。平面形状は不整円形で直径は2mほどを測る。底面の北寄りに不整形の段落ちや小ビットが認められる。調査担当者によると、埋土には鉄分が非常に多く含まれている雰囲気があったため、鍛冶関連遺構の可能性も考えたが、特徴的な構造などは発見できなかつたとのことである。ただし、内部からは使用痕のある石材なども出土し、周辺に関連遺構が存在した可能性もある。

出土遺物

土器（図版52、第96図1～3） 1は杯部の1/2、脚部の2/3ほどが残存する高杯。口縁部は高く、わずかに内彎して立ち上がり、その下位は甘い稜線をもつ。脚部は3方に円孔を穿ち、裾部が踏ん張る形となる。胎土は良好であるが器表が荒れる。2は異形の高杯であろうか。太く短い柱状部に小さく短い裾が付く。これも胎土は良好といってよい。3は柱状部が長くなる在地系の高杯片。図示部はほぼ完周する。

8号土坑（図版49、第95図）

I区北東端部で検出した小型の石蓋土壙墓である。5号住居跡の東に近接し、また東には2号住居跡も隣接する。

検出面における平面形状は長軸1.15m、短軸0.95m程度の不整円形を呈し、0.05mほど下がったところで平坦面がある。さらにその内部に長さ0.6m、幅0.45m程度、深さ0.45mほどの略長方形の墓壙が配置されていて、その上に3枚の平たい石材を並べて蓋をしている。3枚の蓋石はそれぞれやや斜めに落ち込んでおり、埋土の最上層には木質が腐朽したような粘質土が薄く見られることから、おそらく木蓋が存在したものとみられる。また、西側の小口にも幅5cm内外の細長い土層が縦に入っており、これも木質の腐朽した痕跡の可能性がある。

以上の点を鑑みて、本土坑は石蓋木棺墓であった可能性が高いが、東側の小口には痕跡が認められず、また調査の不備で横断方向の土層がないため南北の側壁の存在の有無が確認できず、断定はできない。規模が小さいことから、小児用と思われる。長方形プランで2本主柱の住居跡群と同じく弥生時代後期に属するものか。

土器小片が若干出土しているが、時期等は不明である。

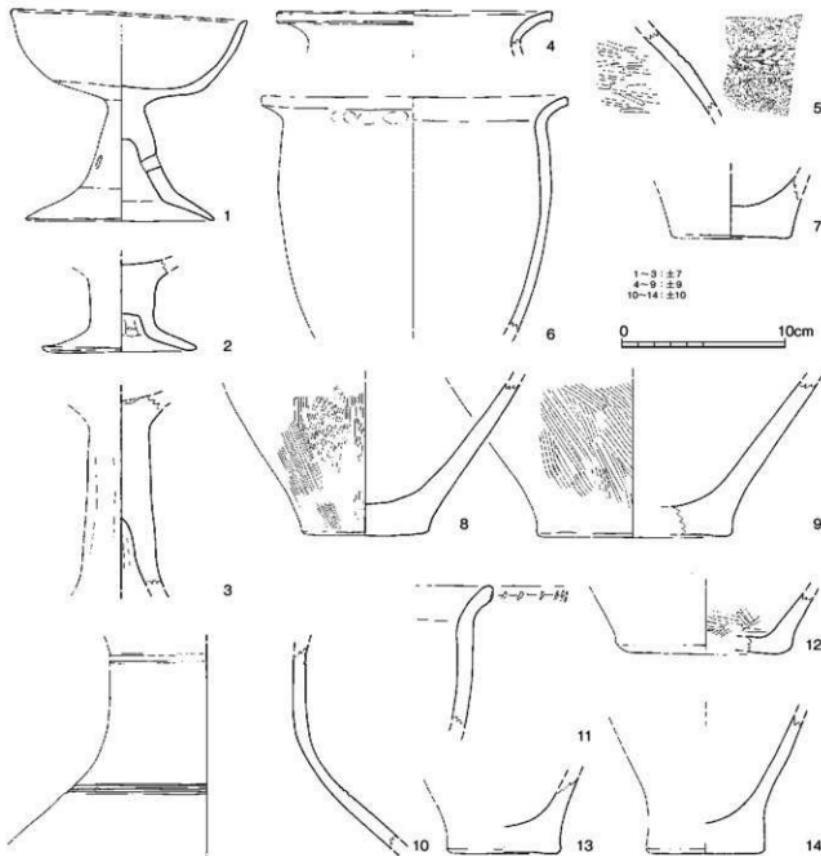
9号土坑（図版48、第95図）

調査区中央やや南寄りで検出した袋状貯蔵穴である。8号建物跡の柱配置内に位置するが残された遺構同士の直接的な切り合い関係はない。

検出面における平面プランは直径1.3mほどの不整形圓形だが、調査時に西側の壁を中心に大きく破壊してしまっていることが土層により確認でき、おそらく本来の検出面での規模は直径1.1m程度であったろうと思われる。これに基づき推測される形狀を点線で記入している。内部の埋積状況を見ると、開口部から土が少しづつ流入して堆積した状況を示し、自然埋没であることが推測される。側壁は大きくオーバーハンプグしてすばまた後にやや開きつつ上にのびる。底面は水平で、直径は1.55mほどを測る。

出土遺物

石製品（図版61、第149図4） 緑色片岩を使用した扁平打製石斧。図上端は剥離する程度で本



第96図 7・9・10号土坑出土土器実測図 (1/3)

來の形状を留めるようである。下端は折損するようであるが、図右下のラインは本来の姿のようで、全長はさほど変わらないのであろう。

土器（図版52、第96図4～9） 4は大きく開く壺口縁部小片で、復元口径に不安がある。5は壺の肩部小片である。横位の範描沈線の上下に刷毛目原体を用いて刺突文を刻み、稲穂をモチーフにしたような施文を行っている。さらに下位にも弱い横位沈線を刻む。6は如意形口縁となる甕で、図下端付近で1/3が残存するが器表が荒れている。図示した範囲で上下を3等分した場合、下端は焼けて器表が非常に荒れており、中位は黒色化、上端（頸部下以上）は白色化する。

7は2/3が残存する底部変で、底面外縁から体部下端にかけて赤変する。8は完周する底部で、外面は細かな刷毛目、内面は施磨きのようである。底面には粉や稻藁の痕跡かと思われるものが全面に残る。体部下端が赤変。9は1/3ほどが残存。外面の刷毛目はよく残るが、内面が荒れる。底部側縁が特に荒れ、部分的に赤変している。

10号土坑（図版48、第95図）

I区のはば中央部で検出した袋状貯蔵穴である。南に9号土坑と8号建物が隣接する。検出面での規模は1.25mほどで図示しているが、土層を見ると東西それぞれ0.2mほどを誤って掘削して広げてしまっているよう、本来の開口部の広さは直径0.8m程度であったと推測される。底面は直径1.4mほどの略円形で、壁は大きくオーバーハングしてすぼまる。残存深さは0.65mほどで残りは比較的良好。埋土はほぼ水平に堆積している。

出土遺物

土器（第96図10～14） 10は頸部の1/2ほどが残存する壺で、肩部に3条、口縁部下位に2条以上の範描沈線を刻むものである。器表が荒れていて、外面は黒色、内面は灰黄色～暗灰色となる。11は如意形口縁の甕小片で、口縁部の外反が小さく弱い。口端部下端に刻みを付す。

12は底部の1/4の残片で、内面に施磨きが見える。13はほぼ完周する底部で、外面が赤変。14は内面に施磨きが観察でき、底部側縁が非常によく焼けている。これも完周する。

11号土坑（図版48、第95図）

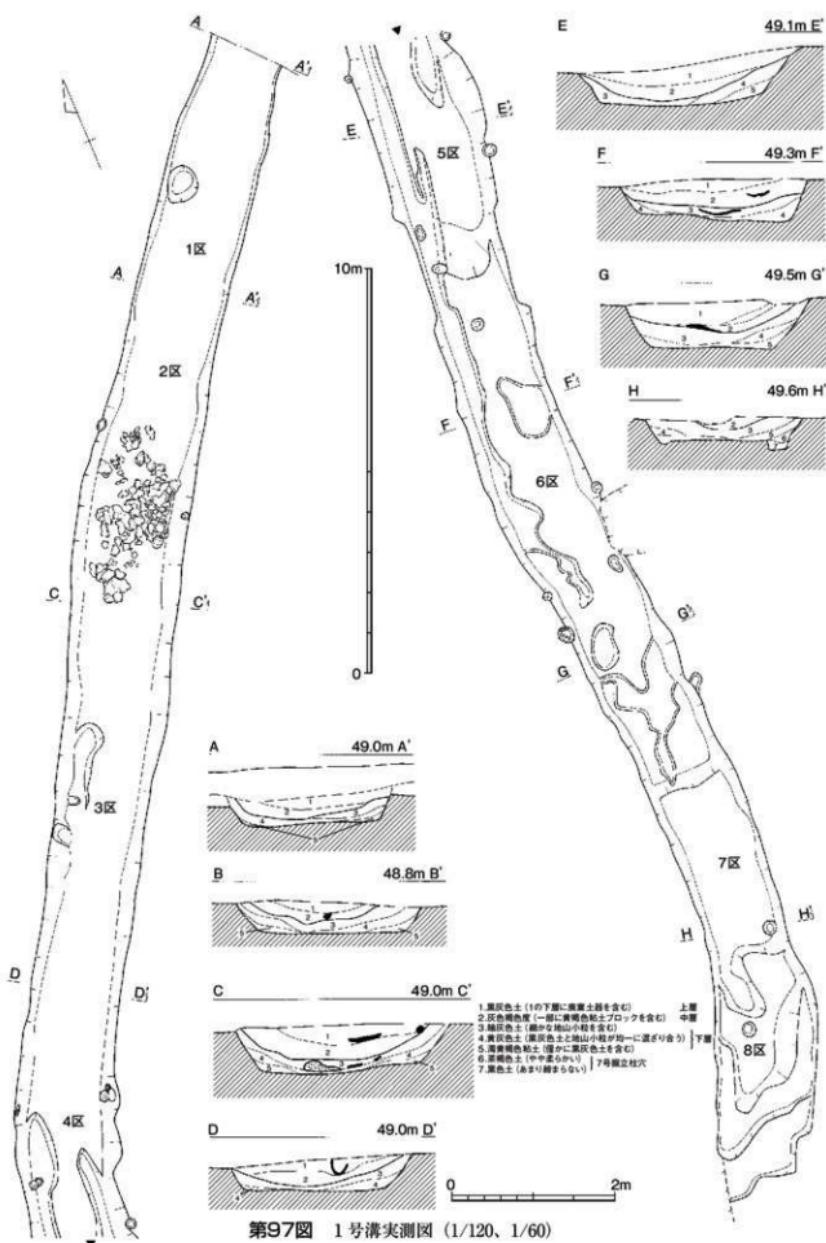
調査期の中央や北寄りで検出した。北に1号住居跡・1号建物跡が隣接する。検出面における平面プランは略円形で、直径1.05～1.15mほどを測り、底面は0.95～1.0mほどとやや小さい。壁はほぼ直立する。埋土はレンズ状体積の様相を示す。袋状は呈さないが貯蔵穴とみて良いものと思われる。

出土遺物はない。

12号土坑（図版49、第95図）

調査区のはば中央部で検出した。10・11号建物跡のビットのそれぞれ一つずつと切り合い関係を持っており、両者に先行する。平面プランは隅丸長方形で、長軸2.4m、短軸2.0mほどの規模を測る。深さはきわめて浅く0.05m程度で、中央部を擾乱により大きく破壊されている。

土器小片が若干出土するが、時期等はわからない。



第97図 1号溝実測図 (1/120、1/60)

(5) 溝

調査では、I区を南北に縦断する溝を1条検出した（1号溝）。埋土の特徴や出土遺物が示す時期などを勘案すると、東に県道を挟んで隣接する調査区である西ノ原遺跡第3・4次調査区で検出した1号溝と繋がり、丘陵頂部を大きく囲い込む環濠の続きと判断できる。

1号溝（図版50、第97図）

I区中央やや西寄りを北から南へ弓形に縦断する断面逆台形の溝である。南側の延長は少しづつ東に向きを変えるが、丘陵頂部に向かって地山の削平が徐々に深くなるため、削平によって失われていてどこまでのびていたかは不明であるが、隣接する西ノ原遺跡の1号溝へと向かうと思われる。溝の残存状況であるが、東側壁面は削平されているが、西側は住居壁面の高さ・上層の立ち上がりから考えて比較的に残りがよいと推測される。溝底面の高さはおそらく旧地形に添っており、南側に行くに従って高くなっている。埋土の堆積状況も西ノ原遺跡と同様で、大きく三層に分かれている。上層は西ノ原遺跡第4次調査1号溝の1層にあたり、多くの土器が廃棄されている。中層は同じく2層にあたり、部分的には地山の流れ込みが大きく堆積している。下層は同じく3～5層にあたり、北部でまとまって廃棄された遺物が出土している。出土土器には完形品に近いものもあるが、ほとんどは欠損品で不要になつたものを廃棄している状況である。検出全長約60m、幅は2.20～2.70mほど、深さは0.3～0.6mが残存する。

出土遺物

1区上層

土器（図版52、第99図） 1は1/4が残存する二重口縁壺片で、器表が荒れて調整痕は見えない。2は高くC字形に外彎する口縁部片で壺であろうか。胎土は比較的良好。3は頸部が締まり、高く短く外彎する口縁部をもつ壺、甕いずれとも決しがたい形態の土器で、底部は平底であるがその外周は丸みをもつ。体部はほぼ完存し、口縁部は1/2ほどが残存する。器表が荒れるが、体部外面に刷毛目が微かに見え、内面には明瞭な刷毛目は見えないが、工具の痕跡から弱い刷毛目で仕上げたものと思われる。

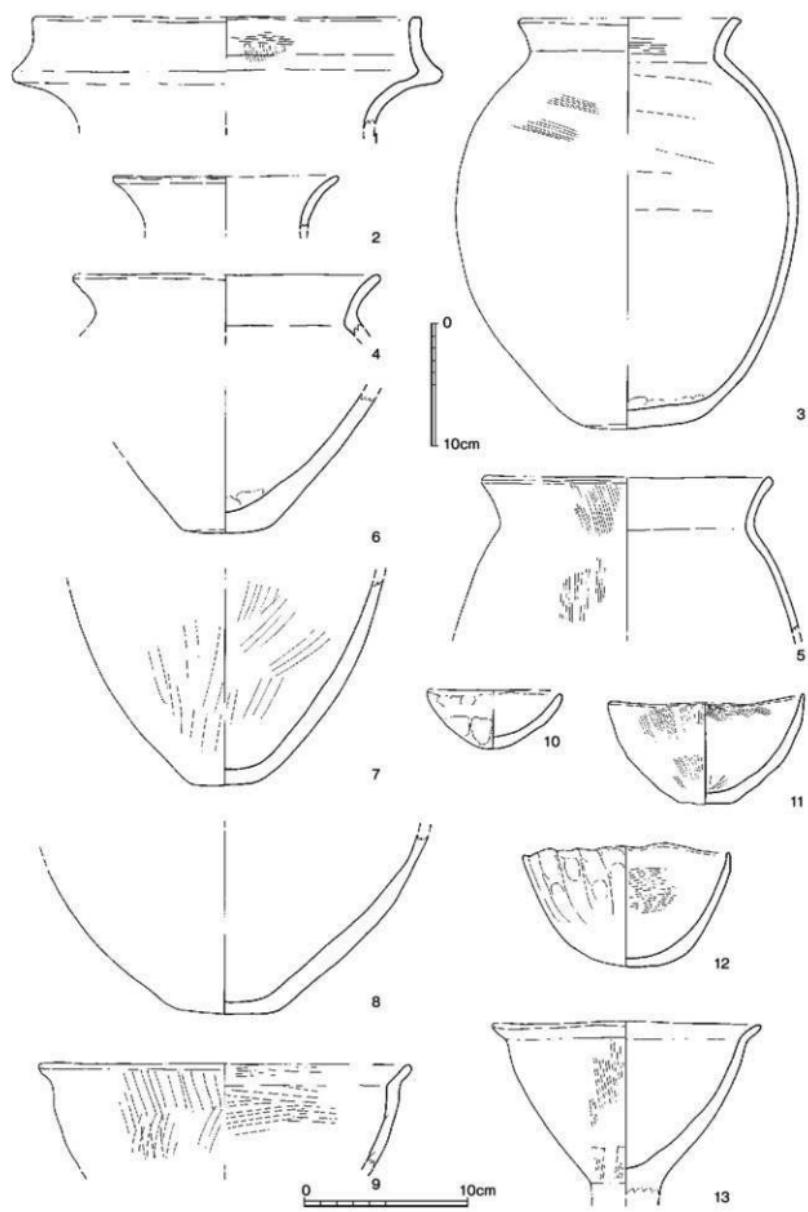
4は器表が荒れる甕の口縁部片。5は外反が弱く、長い口縁部をもつ甕片で1/4が残存する。外面は全体に刷毛目が見えるが、内面の調整は不明。

6～8はいずれも平底となり、その外周が丸みをもって体部へ移行する完存する底部。器表が荒れているが、7では内外面に間隔が広く浅い刷毛目が残る。

9は手捏ねの小型鉢で、器表は平滑化していて、胎土も良好。10は平底となるほぼ完存する鉢で、内外面に刷毛目が見える。また、口縁部は手捏ねのように不整である。12はやや大型の手捏ねの鉢で、これもほぼ完存する。胎土良好で、外面に指撫で痕、内面には刷毛目が残る。口縁部は不整となる。



第98図 1号溝
出土鉄製品実測図
(1/2)



第99図 1号溝1区上層出土土器実測図 (1・3・5は1/4、他は1/3)

13は如意形口縁をもつ弥生前期末の小型壺である。口縁部の1/3が残存、外面に刷毛目が残る。また、外面は概ね灰黄褐色、内面は灰黒色となる。

1区下層

土器（図版52、第100図） 1は器表が剥落する壺小片で、復元口径に不安がある。2は体部の張りが弱く、口縁部がく字形に外反、端部に面を作る。体部外面に幅の広い平行叩きが残るが、内面には箝削りや刷毛の痕跡は見えない。3は体部に比して口縁部が小さく、鉢のような形となる可能性もある。口縁部の1/3が残存、内外面に疎らな浅い刷毛目が残る。

4は平底をもち、体部から口縁部にかけて直行して開く鉢で、全体に肉厚となる。外面は灰黄褐色だが部分的に赤変し、内面は黒色化する。内面には刷毛目が残り、外面下端付近に面取したような痕跡が見えるが、積極的に箝削りと言いたい。弱い刷毛目とした方が妥当であろう。

5は器台片で、くびれ部より上方の内面が最も火熱を受けたよう赤変する。

6は脚部がほぼ完存、杯部の1/4が残存する高杯。口縁部は短く大きく外脣、屈曲部以下とほぼ同じ高さとなる。全体に黄白色といった色となり、器表は荒れてほとんど剥落している。なお、脚部に透孔はない。

2区上層

石製品（図版61、第149図8） 暗灰色粘板岩製の石庖丁。刃部が直線に近くなっているが、図左端の剥離部付近は通有の半月形の石庖丁と同様の形状を呈することから破損品の修復の結果生じた形状と判断される。全体に丁寧に研磨され、背は丸味をもち、刃部は鋭く鏽をもつ。穿孔は両面から深い角度でなされる。

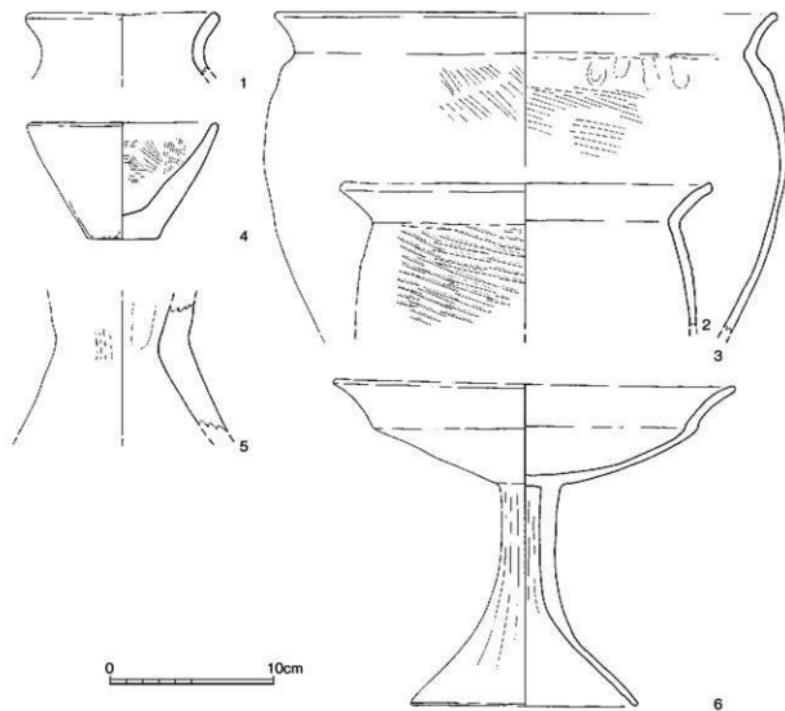
土器（図版52・53、第101～104図） 11は口頭部と底部を欠くが、図示した部分がかなり残存する大型土器で、残存高が45cmほどを測る。径部下端及び体部最大径の付近に扁平な帯状突帯を巡らせて刻みを付す。内面は大部分に刷毛目が残り、外面には同じく平行叩きが見える。体部中位の突帯上下の叩き痕は不連続のようである。2は頭部下に断面長方形のしっかりとした突帯を付す珍しい壺である。体部はほぼ球形となり、く字形に外反する短い口縁部を付す。器表が荒れていることもあって、胎土が非常に粗く見える。

3～9は壺あるいは甕といずれでも呼称できるような形態の土器である。3は頭部のやや下位に断面台形の突帯を巡らせ、その上端に粗雑な刻みを付している。頭部は締まり、口縁部は小さく外傾してほぼ直行する。器表が荒れているが、口縁部外面及び内面に刷毛目が見える。また、内面頭部下位に粘土紐の繼ぎ目も残る。4は小さく外傾して直行する短い口縁部をもつ。体部は縱に長い球形だが、底部はなお小さな面を残す。これも器表が荒れる。5は頭部が完周する小型土器で、胎土は比較的良好である。体部内面に2.5cmの間隔で粘土紐接合痕が残る。6は肩部付近以下がほぼ完存する小型壺で、肉厚となる。内外面ともに刷毛目主体で仕上げる。7は長胴となることから甕と呼ぶ方が妥当であろうか。体部下位の一部を欠くほかはほぼ全体が残っていて、体部下半と口縁部付近の肉厚が随分異なり、口縁部は形状が不整である。底部付近が真っ赤となり、その上方は赤變あるいは煤けている。8は口頭部が緩く高くC字形に立ち上がる。これも器表が荒れるが、肩部以下の内面で箝削りの痕跡を認めることができるが、頭部下位には及んでいない。外面は肩部付近以下が煤ける。9はく字形に外反する口縁部及び尖底気味の球形体部をもつ土器で、体部中位で1/2程度が残存、底部付近はほぼ完周する。体部外面上半は刷毛目が残るが、下半は雑な箝磨きで仕上げる

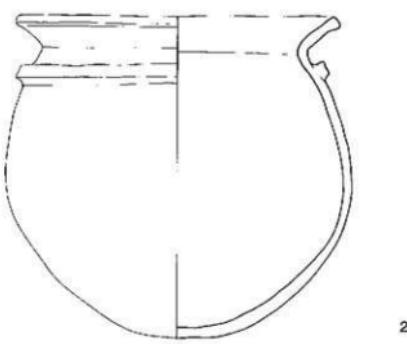
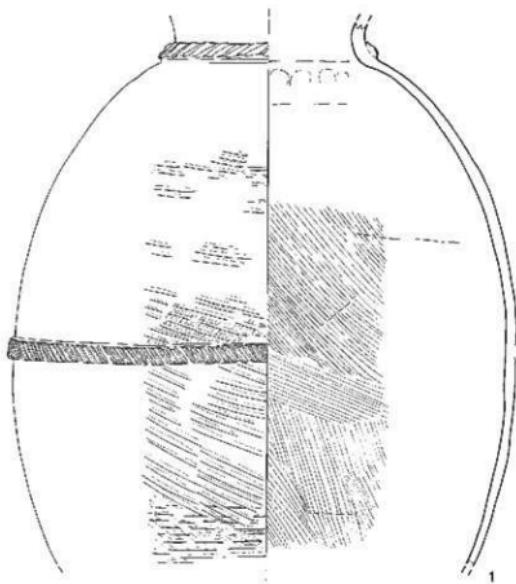
ようである。内面は刷毛目主体で、4cm弱の間隔をあけて粘土紐接合痕がよく残る。胎土は比較的良好であるが、全体に形状不整となっている。

10は張りの弱い体部から縮まりの弱い頸部、そして短く緩く外彎する口縁部へ続く。器表が荒れているが、外面は全体に平行叩きが残り、内面には刷毛目が見える。11は内外面を刷毛目で仕上げる小片。12も口縁部の外反が弱い壺で、これは端部に面を作る。概ね茶褐色となるが、肩部以下の外面が黒色化している。13は口縁部が強く外反・外彎する壺で、口縁部の1/2が残存。これも口端部に面をもつ。体部の内外面を刷毛目で仕上げ、外面には煤も付着する。14も口縁部が強く外反し、端部に面を付す。これも体部内外面を刷毛目調整するようだが、器表が荒れて細部はわからない。15は長胴となる体部下半部で、底部は完存する。外面は刷毛目調整、内面は原体を替える刷毛目で調整するが、下位に縦位の範削りが観察できる。直接火熱を受ける底部周辺の器表が特に荒れている。16は完周する平底の底部。内面には刷毛目が残るが、外面は剥落する。直径7mm前後のチャートが多く含まれている。17も完存する底部で、これも器表が荒れる。

18は小型の変形土器であるが、頸部が不明瞭で深鉢とも呼べるような形状である。完存する平底の底部から高く立ち上がるが、口縁部はわずかに外反しつつ、徐々に肉薄となって終わる。胎土は比較的良好で、内外面を刷毛目主体で仕上げる。19は平底の底部から体部が直線的に外傾して立ち上がり、口縁部をわずかに内側へ曲げて終わる変化の少ない鉢。ほぼ全ての器表が剥落、全体に濃い赤色に変色する。20は一見するところ底部・体部が球形に連続し、口縁部を小さく外反さ

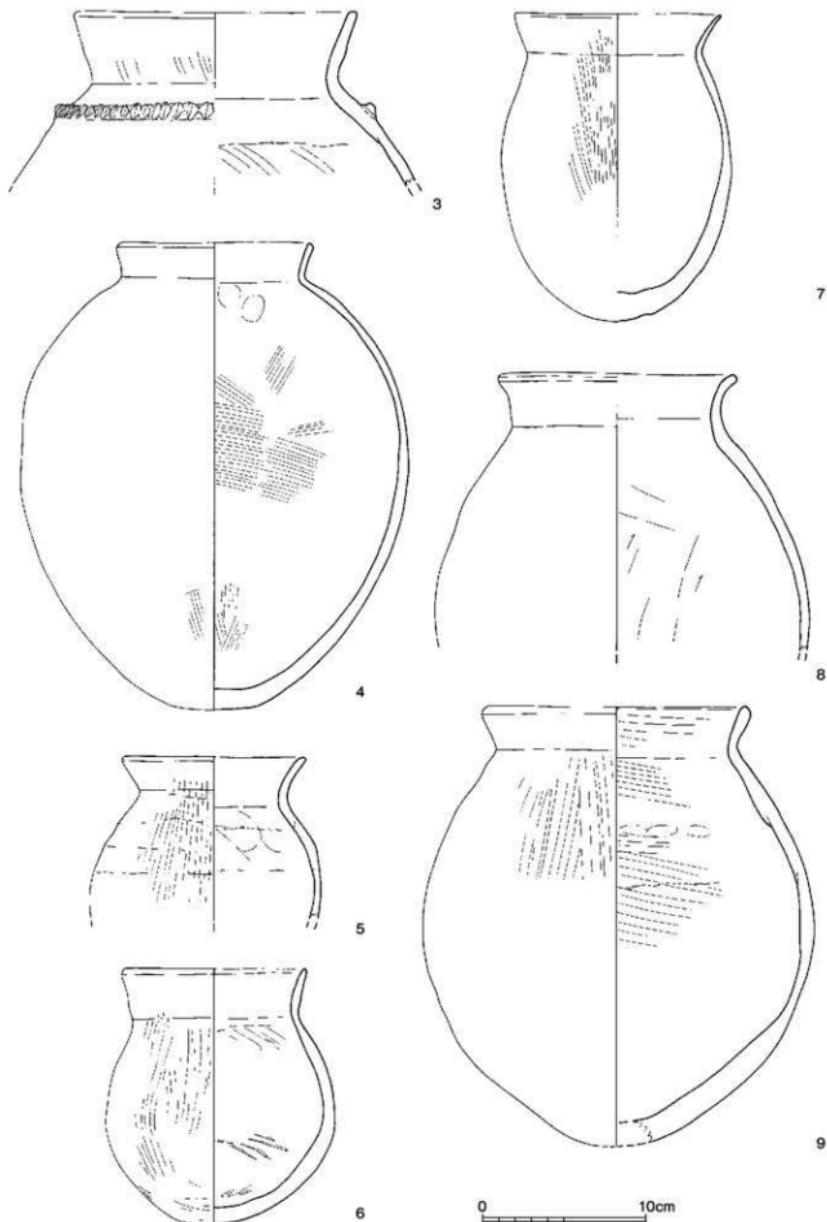


第100図 1号溝1区下層出土土器実測図 (1/3)



0 20cm

第101図 1号溝2区上層出土土器実測図1 (1/4)



第102図 1号溝2区上層出土土器実測図2 (1/3)

せる鉢だが、完周する底部には平坦部がなお残存する。外面の半分強が赤変し、器表は剥落する。21も20に似た器形となるがやや浅く、火熱を受けた痕跡は見えない。底部は完周するが、口縁部付近は小片となるために復元口径に不安がある。22も同じような形態の鉢に脚台が付いたものである。脚部付近は完周、体部の1/3が残存する。これも器表が荒れているが、赤変する部分は脚部の一部分である。23~25は手捏ねの小型鉢である。23は胎土良好で、口端部の一部を欠く。赤変するが内面に黄褐色に付着物が残る。液体を煮込んだものであろうか。24はほぼ完存するが、口端部は不整となる。器表が荒れるが、内外面ともに器表の平滑化は丁寧になされる。25は底部付近が完周、口端部付近は小片となる深鉢形の手捏ね。これは胎土が粗いものの、やはり器面調整は丁寧といってよい。26は脚部片で、被熱の痕跡は見えないが器表は荒れている。27は高杯杯部で、2/3が残存するが、器表が剥落する。口縁部の立ち上がりが稜線以下の部分に比して低い。28は3方に円孔をもつ中空の、29は孔がない中実の高杯片である。30はつまみ状の突出部を欠損する支脚で、わずかに赤変する。

2区下層

石製品（図版61、第149図11） 暗灰色粘板岩製の石庵丁片で、厚さが3mmほどと非常に薄い。背も含めて研磨は丁寧になされるようだが、図背面には敲打痕を残し、研磨の及ばない面がかなり残る。刃部はやや摩耗しているようで、穿孔は片面からなされている。

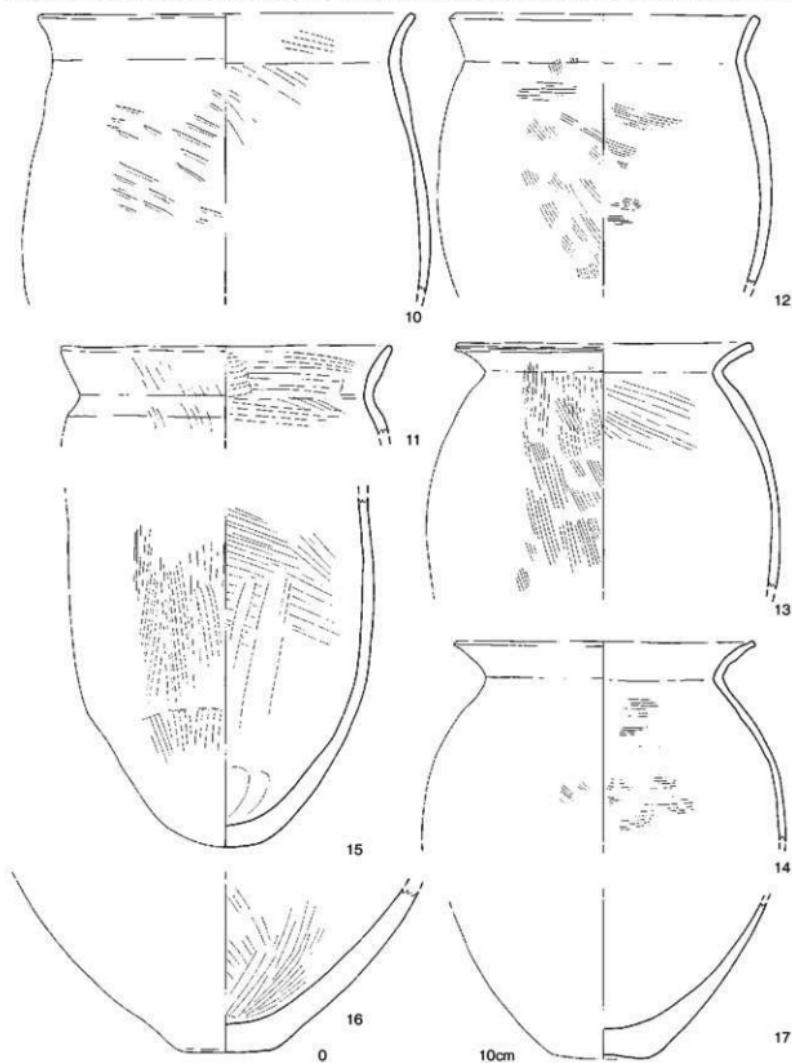
土器（図版53・54、第105~111図） 1は1/4が残存する二重口縁壺の口縁部上半である。外面は意図的なものか黒色化し、縦位の暗文が見える。内面は荒れているが箝磨きで仕上げるようである。2は一見二重口縁壺の屈曲部以上が剥離したものであるが、これで完結している。頸部の1/2が残存、胎土は比較的良好で、器表が荒れるが外面に細かい刷毛目が見え、内面では1cmあるいは2cmの間隔で粘土紐接合痕が残る。3~6はわずかに外傾しつつ直立する短い口縁部をもつものである。壺とする意見もあると思われるが、ここで壺として扱う。3は口縁部の1/2が残存、体部は張りが強く、器表が荒れているが体部内外面に刷毛目が見える。4もほぼ同形同大となり、ここでは体部内面に粘土紐接合痕が残り、その最小幅は2cmほどである。5は口縁部の2/3が残存、これも体部の仕上げは先の2点に共通するが、頸部の締まりが甘く、口端部を丸く収める点でやや異なる。6は3・4に近い。

7・8は球形の体部をもつていて、壺・壺いずれとも呼んでよいような器形である。7は頸部以下がほぼ完存し、体部外面に刷毛目が見える。く字形に外反する口縁部はわずかに肥厚し、外面に指頭痕が連続する。8は肉厚となり、底部付近は完周、口縁部の1/2が残存する。これも器表が荒れるが、底部付近の内面には刷毛目原体の痕跡が残り、2.5~3cmほどの間隔で粘土紐接合痕が残る。9は体部片なので傾きや復元径に不安があるが、頸部がよく締まることから壺に近い形状のものであろう。胎土粗く、器表も荒れるが叩き痕が見える。

10~21は口縁部がく字形に外反する壺を示した。10~13はいずれも小さく外擣氣味に延びる口端部に面をもつ。10は体部内外面に刷毛目が残る。11は頸部内面の稜が比較的シャープになっていて、体部内面に残る工具痕と併せて考えると箠削りで仕上げたものと思われるが、明瞭な痕跡は認められない。12は小片のため、復元口径に不安がある。13は11に似る小片で、口縁部長が1cmほど異なっているが、あるいは同一個体であるかも知れない。14も小片で、これは外面全体に浅く疊らな叩き痕がからうじて観察できる。15は図示部がほぼ完周する。これも頸部内面の稜がしっかりしているが、箠削りの痕跡は確認できない。16は口縁部の1/3が残存する。口縁部を外側へ

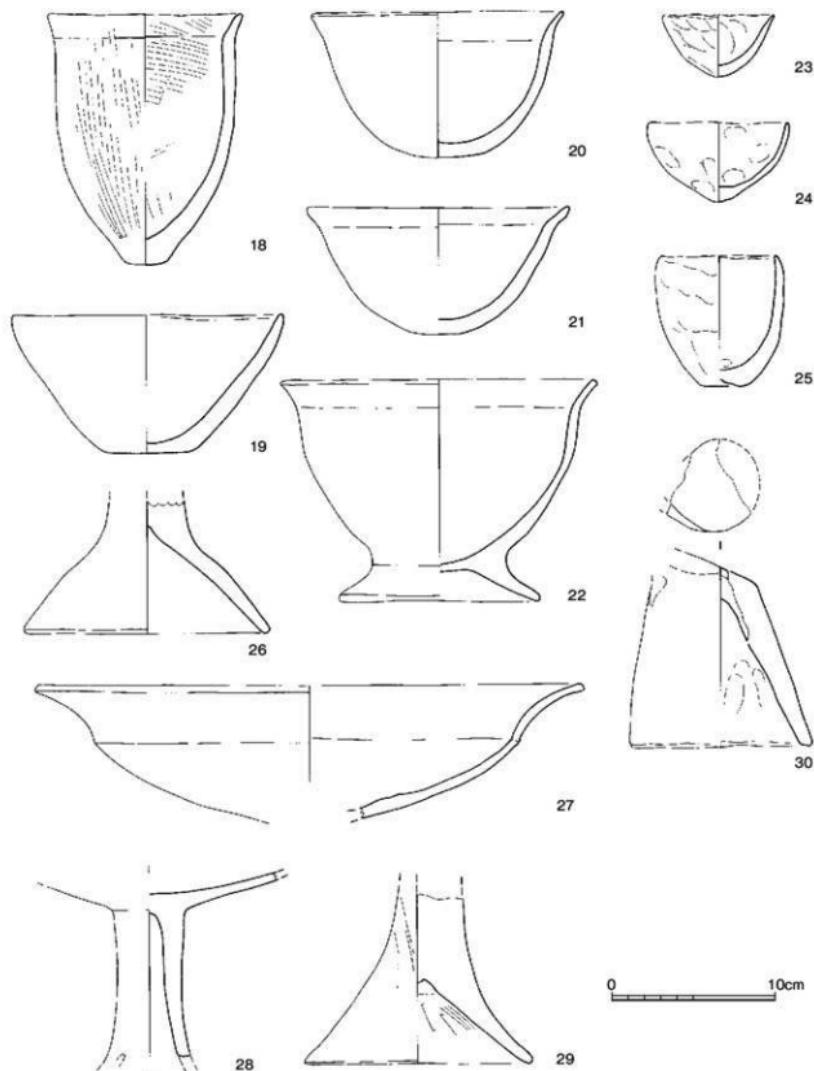
折り返して肥厚させる珍しい器形であるが、胎土等に特異な点は見られない。全体を細かい刷毛目で仕上げ、広く赤変する。17は口縁部の1/2ほどが残存。口端部に面をもち、外面全体に平行叩きを残す体部内面は疎らな浅い刷毛目で仕上げる。なお、頸部付近に粘土紐の接合痕が残る。

18~23は体部の張りが弱い一群。18は口縁部の1/4ほどが残存。体部内面に縦位の、頸部付近に横位の工具痕が残る。後述する20のような刷毛目調整の結果であろう。これは赤く焼き上がる

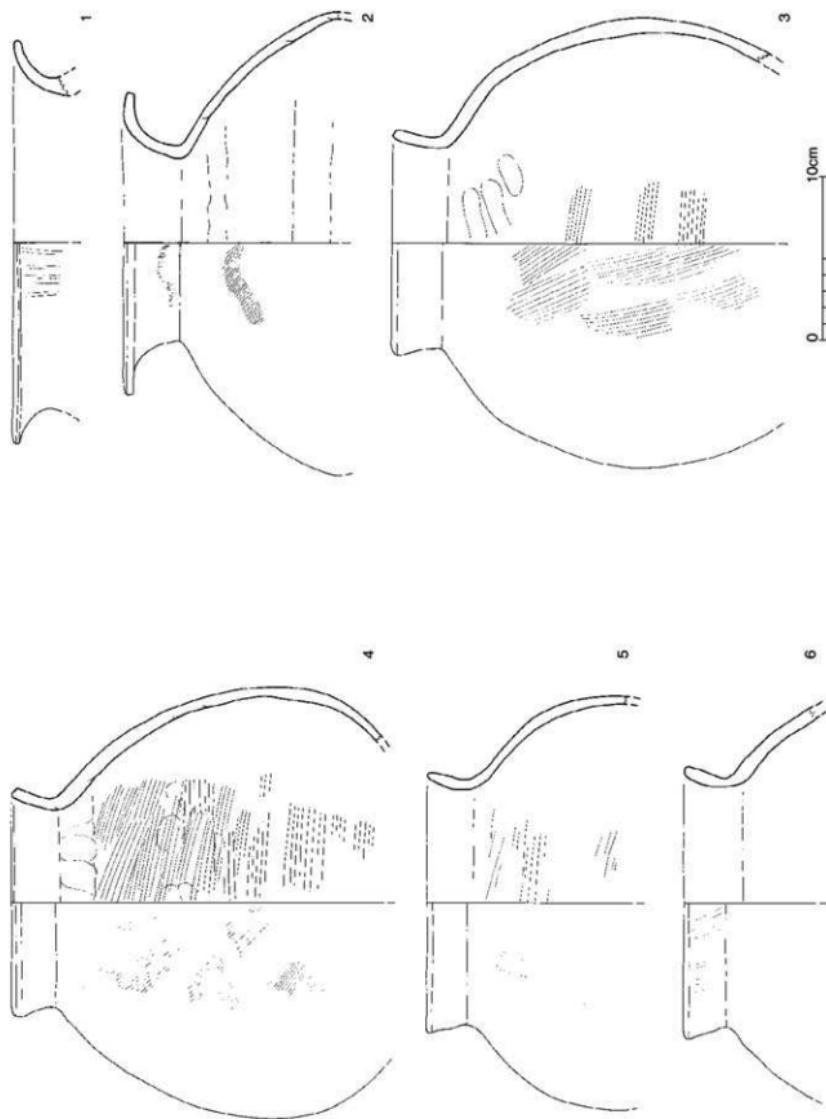


第103図 1号溝2区上層出土土器実測図3 (1/3)

ようである。19は頸部下の体部内面及びその5cmほど下位の外面に粘土紐接合痕が見える。器表の劣化により現れたものであろう。20は口縁部の2/3が残存し、体部内外面を刷毛目で仕上げる。特に外面では横位の凹凸があつて雑な作りとなる。口縁部の一部が赤変。21は頸部の1/3が残存。これも体部内面にはほほ5cm間隔で継ぎ目が残り、外面でも頸部下に右上がりの粘土紐の継ぎ目が見え



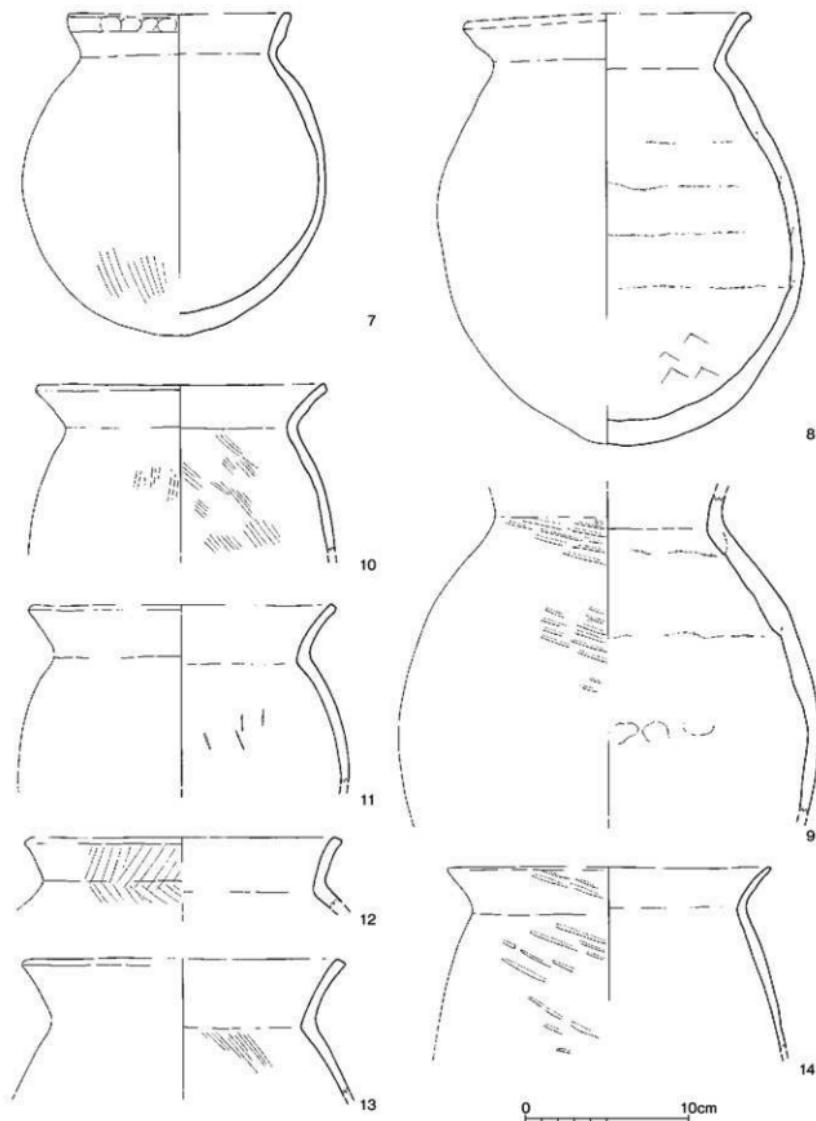
第104図 1号溝2区上層出土土器実測図4 (1/3)



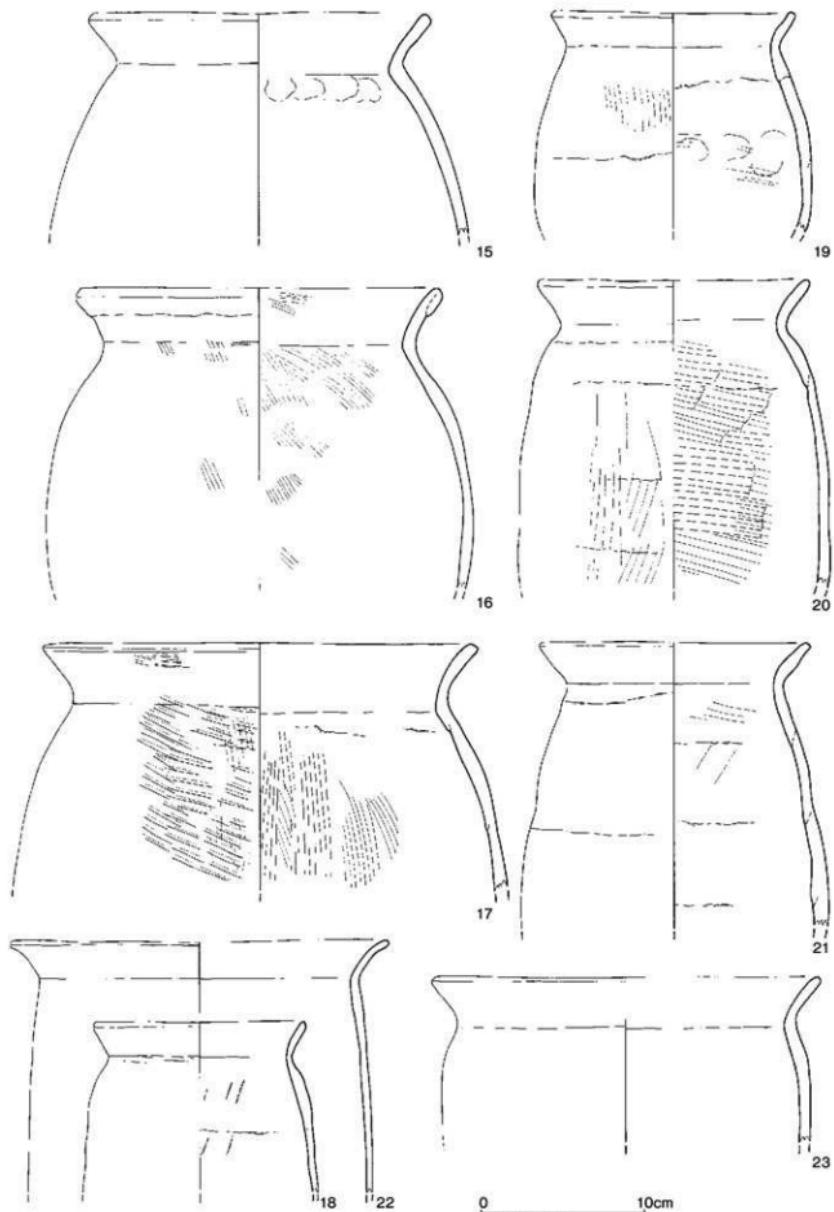
第105圖 1號溝2區下層出土器物圖 1 (1/3)

る。20に似て体部外面の平滑化が難である。22は器表が荒れる小片で、復元口径に不安がある。23は1/4の口縁部片。火熱を受けて灰白色～褐色となり、大きく弾けた部分がある。

24～27は口縁部の外反が弱いもの、頸部がC字形となる壺である。24は底部・体部・頸部・口



第106図 1号溝2区下層出土土器実測図2 (1/3)

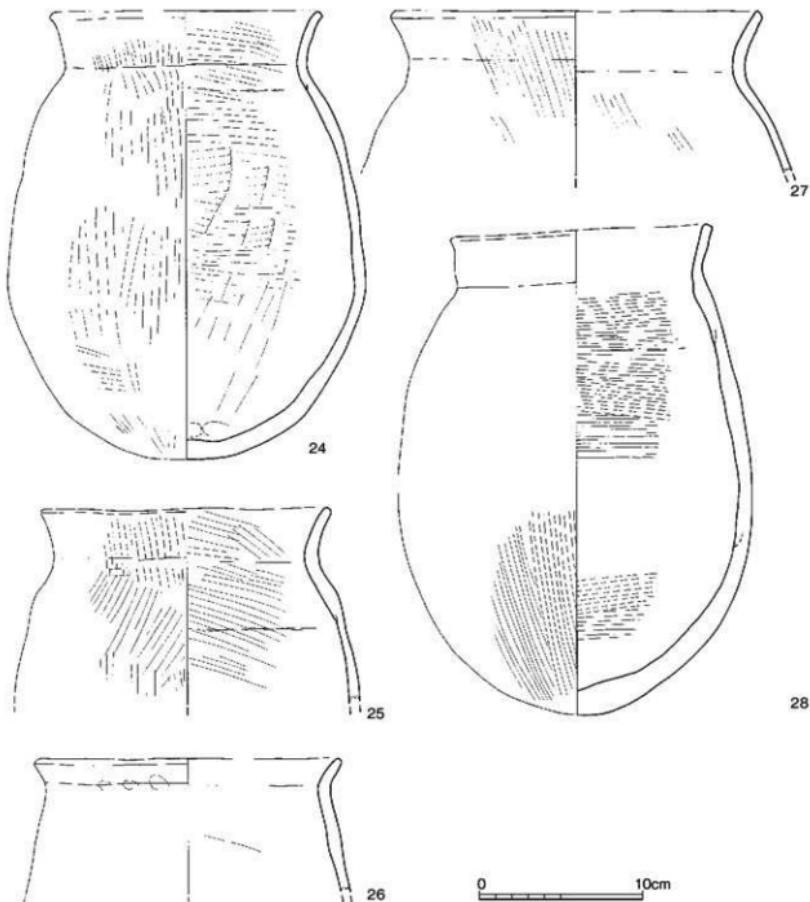


第107図 1号溝2区下層出土土器実測図3 (1/3)

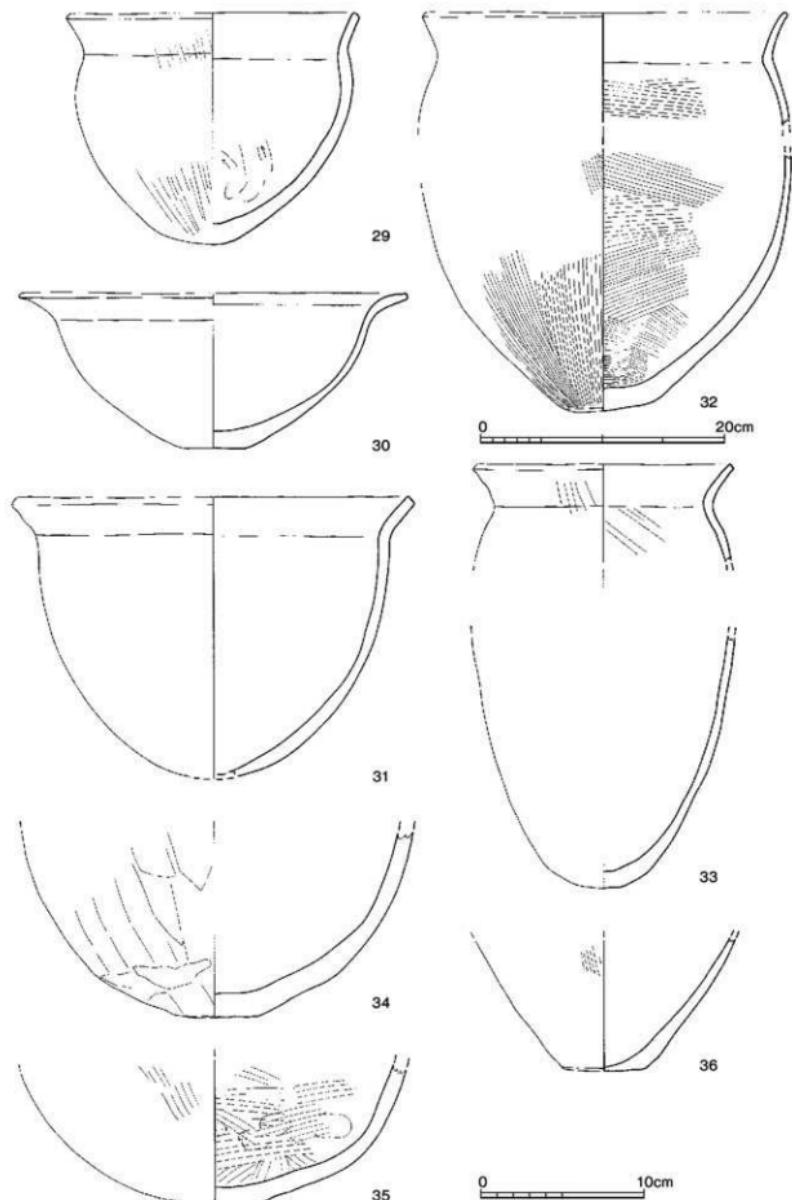
縁部がそれぞれ接合せず図上復元したもので、かつ口縁部が小片であるために復元径に不安がある。全体に主として疎らで浅い刷毛目で調整する。25も同様の器形・調整法を用いる。口縁部内外面が赤変し、体部内面は灰黒色、外面は灰黄褐色となる。1/2の残片。26は口縁部が小振りとなる土器で、残片の半分は器表が荒れていて、半分は遺存状態がよいが調整痕は見えない。27は小片のために口径に不安がある。体部外面の一部で器表が弾けている。

28は頸部以下がほぼ完存、口縁部は小片である。体部外面下半に煤が付着する。壺とした2~6に似た口縁部をもち、体部の張りが弱いことから壺として扱うが、概してこの時期は単純口縁をもつ土器は壺・甕の区別が曖昧である。

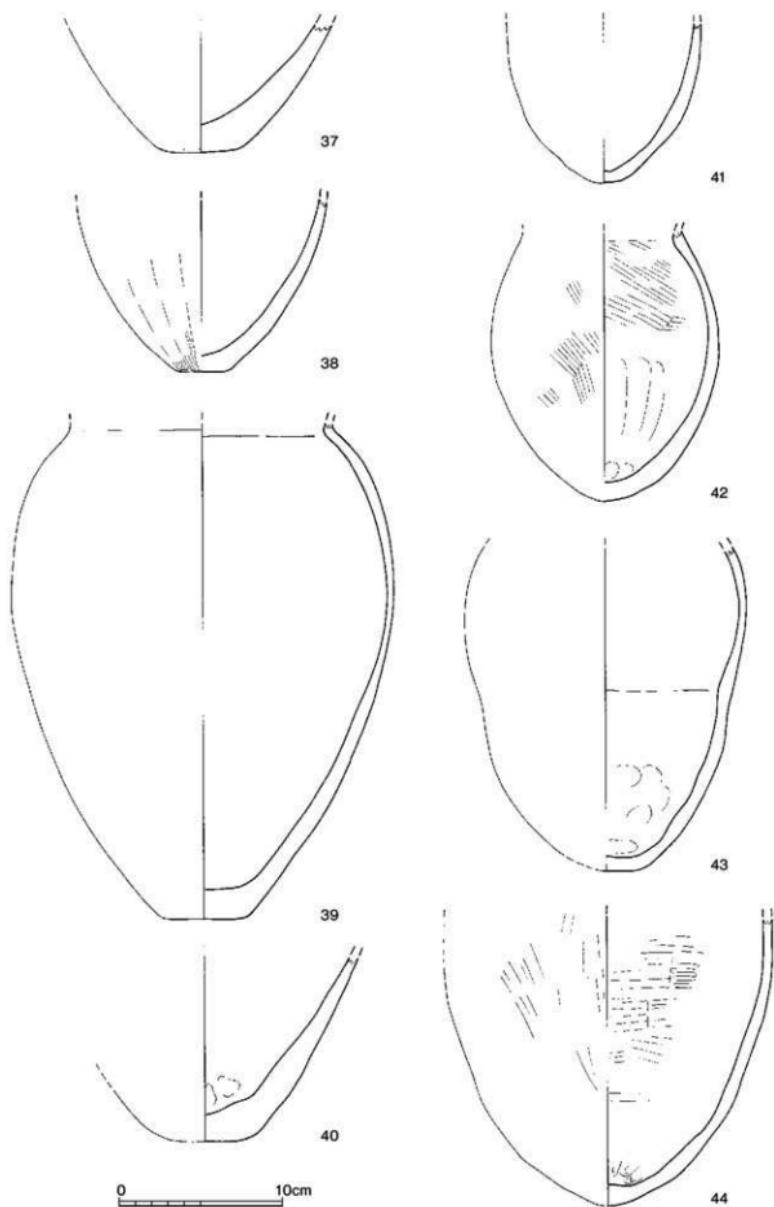
29~31は鉢。29は頸部以下はほぼ完存する。丸底となる底部から急角度で内傾して立ち上がる体部、外縁気味に短く外反する口縁部をもつ。外面は疎らな刷毛、内面は丁寧な箝削りで仕上げ、



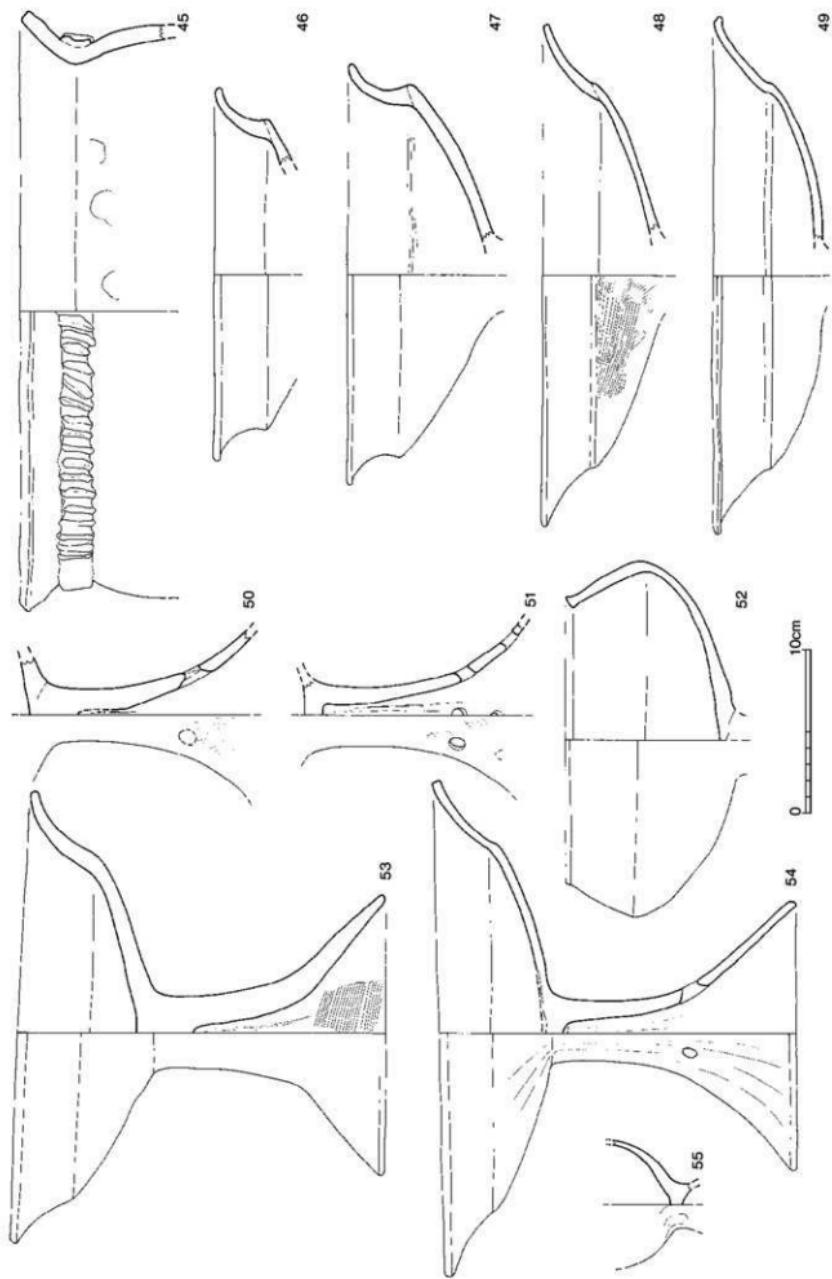
第108図 1号溝2区下層出土土器実測図4 (1/3)



第109図 1号溝2区下層出土土器実測図5 (32・33は1/4、他は1/3)



第110図 1号溝2区下層出土土器実測図6 (1/3)



第111図 1号溝2区下層出土土器実測図7 (1/3)

内面全体が赤変する。30は平底の底部から浅く大きく内側して立ち上がる体部、やはり浅く大きく開く口縁部をもつ。外面は焼けて赤変し、器表が荒れるとともに随所で小さく器表が弾けている。31は底部を欠くが頸部の1/4が残存する。外面底部付近が灰褐色、その上位3cmほどの間が帶状に焼けている、さらに上方は赤変が著しい。

32は器高・口径のバランスから鉢あるいは甕いすれとも呼べそうな器形である。底部から体部にかけてはほぼ完周、口縁部は小片である。器表は荒れているが、内外面に刷毛目が見える。33は長胴丸底の甕である。口縁部はく字形に外反し、端部に面をもつ。器表が荒れているが、頸部下は叩きで調整されたように見える。内面は刷毛目で仕上げる。体部下半は底部付近が灰褐色となり、それ以上は赤変する。なお、この土器は黒曜石を胎土に含む。この遺跡出土の土器にはよく見られるが、今まで多くの遺跡を調査・報告してきたが初めてのことである。

34~44は底部片。34は3/4ほどの残片であり、傾きや復元径に不安があるが、図のように復元できれば体部の開きが大きいために平底が目立たない。調整痕は判然としないが、外面には原体幅が確認できる箇所が多い。内面は箇所磨きか。35は完周する丸底の底部片で、作りが粗雑である。

36は非常に薄手となる完周する底部で、底部外縁はシャープである。焼けて器表が荒れている。37は肉厚・平底となる底部の1/2の残片で、胎土は比較的良好。38も小さな平底をもつ底部。胎土良好で丁寧に作られた土器である。39は厚い平底をもつ体部片で、外面は焼け、内面は丁寧な箇所磨きで仕上げる。40は外縁が丸みをもつ平底底部で、全体が非常に焼けて器表が荒れる。41は尖底気味の底部片で、復元形状に不安がある。42は体部下半が完周する。体部内面下半は縦位の撫である。43は図示部がほぼ完存する体部であるが、中位や下方のくびれは同一形状で完周せずに強弱があるため意図的なものか判然としない。これも器表が荒れている。44も尖底気味の底部で、これは完周する。刷毛目を主体として調整している、外面は非常に赤変、内面は灰黒色となる。

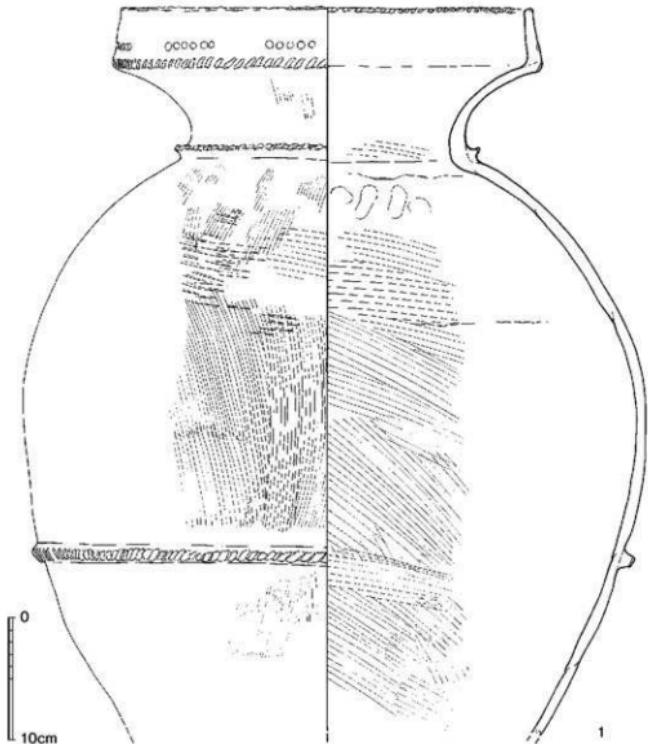
45は頸部に刻目突窓を付す甕で、1/4が残存。胎土は比較的良好、焼けて赤変する。46は口縁部が高く強く外側する高杯片で、杯屈曲部の1/4が残存する。これも焼けて赤変、器表が荒れるが内面は箇所磨きで仕上げるようである。47は46に似た器形の高杯片で、これは口縁部の1/2が残存。内面は箇所磨き、屈曲部以下の外面は箇所磨きの後に箇所磨きで終わるようである。48は口縁部が大きく浅く開く形の高杯で、内面で見ると屈曲部を境として上下の高さはほぼ等しい。全体に器表が荒れているのだが、屈曲部以下の外面だけよく刷毛目が残っている。49は同じく口縁部が浅く大きく開く形の高杯であるが、これは口端部に外側する面を付す。同じく屈曲部を境にして上方がより高くなっている。器表は荒れる。50・60は高杯脚部の残片。50は残存する孔の位置から3方向に穿孔されたと思われるが、孔の断面形状が内面で大きくなり、かつ面が荒れていることから焼成後に穿孔した可能性が高い。焼けて赤変するが、外面に箇所磨きと思われる痕跡が見える。51は縦位に2段、3方向に焼成前穿孔を行うもので、これは外面に刷毛目が見える。52は楕円形の杯部をもつ高杯で、口縁部の1/4が残存する。最大径部が中位のやや上方に位置し、口端部にしっかりと面を付す。器表は荒れている。53は全体が窓える資料で、非常に厚手で重い。杯屈曲部の稜線は甘く、脚部の穿孔も見られない。胎土に径5mm前後のチャートやクサリ跡を多く含む。54は杯部の3/4、脚部の1/2が残存する。杯口縁部は浅く大きく開き、内面で見て屈曲部の上下の高さはほぼ等しい。脚部の穿孔は3方孔で、これも焼成後に外側から開けられた様を呈する。器表が荒れていて、杯部内底面は弾けている。55は脚付の鉢であろうか。胎土良好で、手捏ね土器ではない。

3区上層

鉄製品（図版60、第98図1） 切先をわずかに欠き、素環頭となる柄尻の多くを欠く。残存長35.9cm、柄の残存長9.9cm、刀身の残存長は25.5cmを測る。闊の幅2.6cm、闊から柄にかけての脊の厚さは現状で1.0~1.1cmとなるが、部分的に剥離とは思えない凹んだ部分があって、鞘が銹びていている可能性も考えられる。また、素環が欠落した側の柄尻端部がわずかに突出していて、素環が閉じていたことを思わせる。

石製品（図版61、第149図17） 通常の膨らんだ鉢は全くない。全体が銹びて硬化する。全体に滑らかとなる安山岩で、明瞭な使用痕といったものは見えない。

土器（図版53~55、第112~121図） 1は底部を欠くが残存高60cmほどの大型二重口縁壺で、図示部はほぼ完周する。口縁部は小さく内傾するとはいはば直立し、口端面・屈曲部に刻みを付す。頸部にも刻目突帯を付して、張りの強い体部へ続き、最大径付近の下位にもやはり刻目突帯を巡らせている。体部内面には粘土紐接合痕が残り、全体に横位の刷毛目で、外面は縦位の刷毛目で仕上げる。なお、肩部付近のみ左上がりの平行叩きが刷毛目の下に見える。また口縁屈曲部の上に連続する11単位の円形刺突がある。1単位全てを確認できるものでは刺突6個が4単位、5個が1単位あって、全てを確認できない単位も6個で構成されていたようである。この土器には正面があつ



第112図 1号溝3区上層出土土器実測図1 (1/4)

たのであらうか2は頸部以下がほぼ完存する壺で、強く外反する口縁部は端部に変化を加えずに終わる。胎土・作りともに良好であるが、器表が荒れて外面の調整痕は不明。3は口頸部が大きくC字形を描く広口壺あるいは長頸壺で、これも口端部に変化を加えない。これは胎土が粗く、器表も荒れているが、体部内面に横方向の原体幅が観察できる。弱い刷毛目であろう。4は口端部付近が一層強く外反する広口壺で、これも胎土粗く赤変する。

5～13は二重口縁壺。5・6は口縁部がほぼ直立に近く、屈曲部が突出しないもの。5は図示部がほぼ完周、口端部に幅広い面を作り出し、頸部に刻みを付す。6は特段の変化を加えない。両者ともに器表が荒れているが、6では全体に刷毛目が観察できる。7・8は頸部が小さく突出するもので、7は口縁部が外傾、8は内傾する。9～13は強弱があるが頸部が籠状となるもの。9は焼けて赤変する1/4の残片で、胎土は粗い。10も1/4の残片。11は突帯付近以上が完周し、胎土・作りともに良好な土器。器表は荒れる。12は頸部の1/2が残存、口縁部が内傾外擧する。13は頸部の突出が小さいが、断面が矩形となる。これは小片。

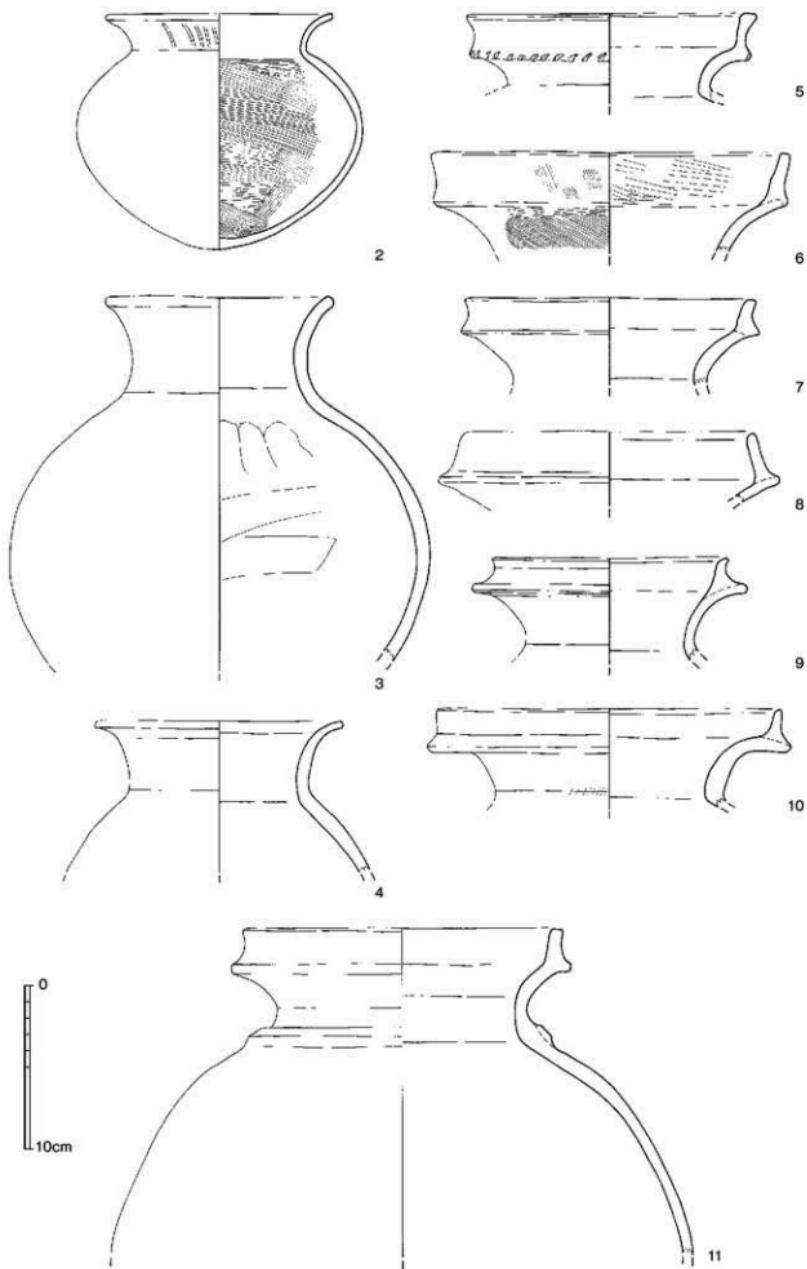
14は刻目突帯を巡らせる体部下半で、これも復元径には不安がある。15は体部最大径付近に突出する刻目突帯を付す残片で、これも器表が荒れる。外面では突帯を境に上方が茶褐色、下方が赤味を帯びる灰黄褐色となって色相が全く異なるが、内面では全体に赤味帯びる灰黄褐色となっている。偶然に生じた変色であろうか。

16は小さな平底から丸く体部へ移行し、張りのある体部は縮まった頸部へ、そしてやや長く外反する口縁部へ続くほぼ完存する壺。器表の荒れがひどいが、体部内面で横方向に原体の幅を認めることができ、これは刷毛目の痕跡であろう。17は体部最大径部が下方に下がるが、頸部の形状から壺としておこう。体部最大径付近のやや下位以下は器表が荒れているといつても上方ほどではない。上方では赤変するとともに、最大径付近に大きな弾けがあり、その上方ではほとんど器表が剥落している。調整痕として、かろうじて叩き痕が観察できる。18は16に似た器形であるが口縁部がやや短くなる。図示部がほぼ完周するが、器表が荒れている。19～21も頸部が縮まることからここでは壺としておく。19は体部の張りが弱く、口縁部も18に比して弱々しい。完周する底部は外縁が丸みをもつ平底で、体部内面では底部から10cmほどまでが黒色化、以上は茶褐色となる。内面は対応するように下端から15cmほどまでの体部外面は真っ赤となるがまだ器表は比較的遺存していて、それ以上では剥落がひどくなる。20は接合できない上半部と下半部である。頸部は2/3ほどが残存するが、これも器表が荒れる。底部は完周、ここも器表が荒れて調整痕はほとんど見えないが、下端付近に縱方向の痕跡が微かに見え、箇削りであろうとの印象を得た。21は口縁部の2/3が残存。これは器表の残りがよく、全体に刷毛目を主体として調整している。

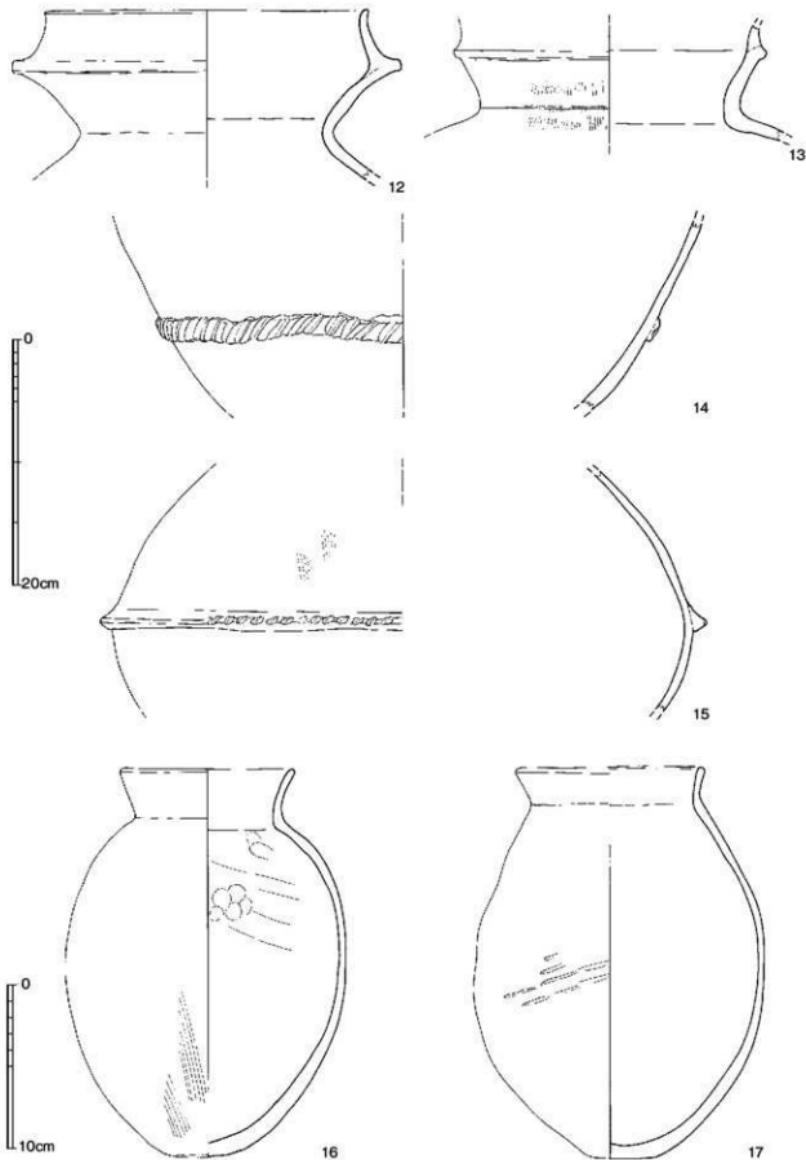
22・23は頸部に刻目突帯を付す壺。22は幅広い突帯を巡らせて、上方は籠状工具でシャープに刻むが、下方は指頭で押されたような甘い不明瞭なものとなる。23は籠状工具による刻みだけからなるが、両者ともに1/4ほどの残片で、被熱赤変していてあるいは同一個体の可能性もある。

24～38は口縁部がく字形に外反する壺。24・25は口端部を方形とする壺で、いずれも器表が荒れて調整痕は見えない。26は内外面に刷毛目が見え、特に内面の全体が赤変する。

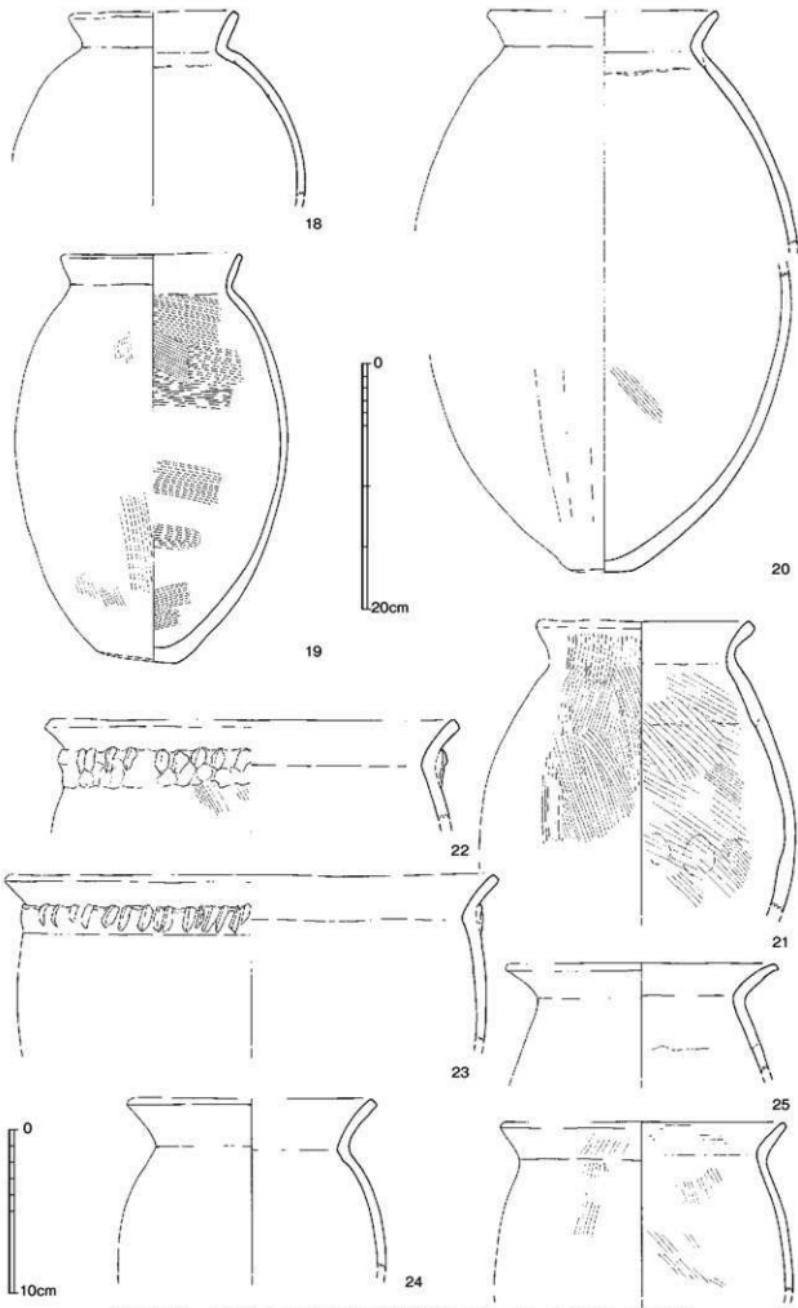
27は頸部の1/2が残存、底部付近は完周する平底の壺。内外面とともに刷毛目を主体として仕上げ、外面は赤変する部分が多い。28は肩部以上がほぼ完周するが、剥落が著しい。29は小片のため、復元口径に不安がある。30は2片で1/2ほどが残存、口端部に面を付す。31は刷毛目で調整された器表がよく残る。体部最大径付近から下位は被熱のために灰褐色となり、残存部下端付近は器



第113図 1号溝3区上層出土土器実測図2 (1/3)



第114図 1号溝3区上層出土土器実測図3 (14・15は1/4、他は1/3)



第115図 1号溝3区上層出土土器実測図4 (18・19・20は1/4、他は1/3)

表の剥けが多く見られる。上半は本来の黒色となる。32は器表が荒れているが、外面に細かな刷毛目がわずかに見える。33も器表が荒れる。34・35は胎土が比較的良好、器表は荒れている。36は器壁が薄いが、胎土に径5mm前後のチャートなどが多く混ざっている。37・38も器表が荒れるが、刷毛目を確認できる。

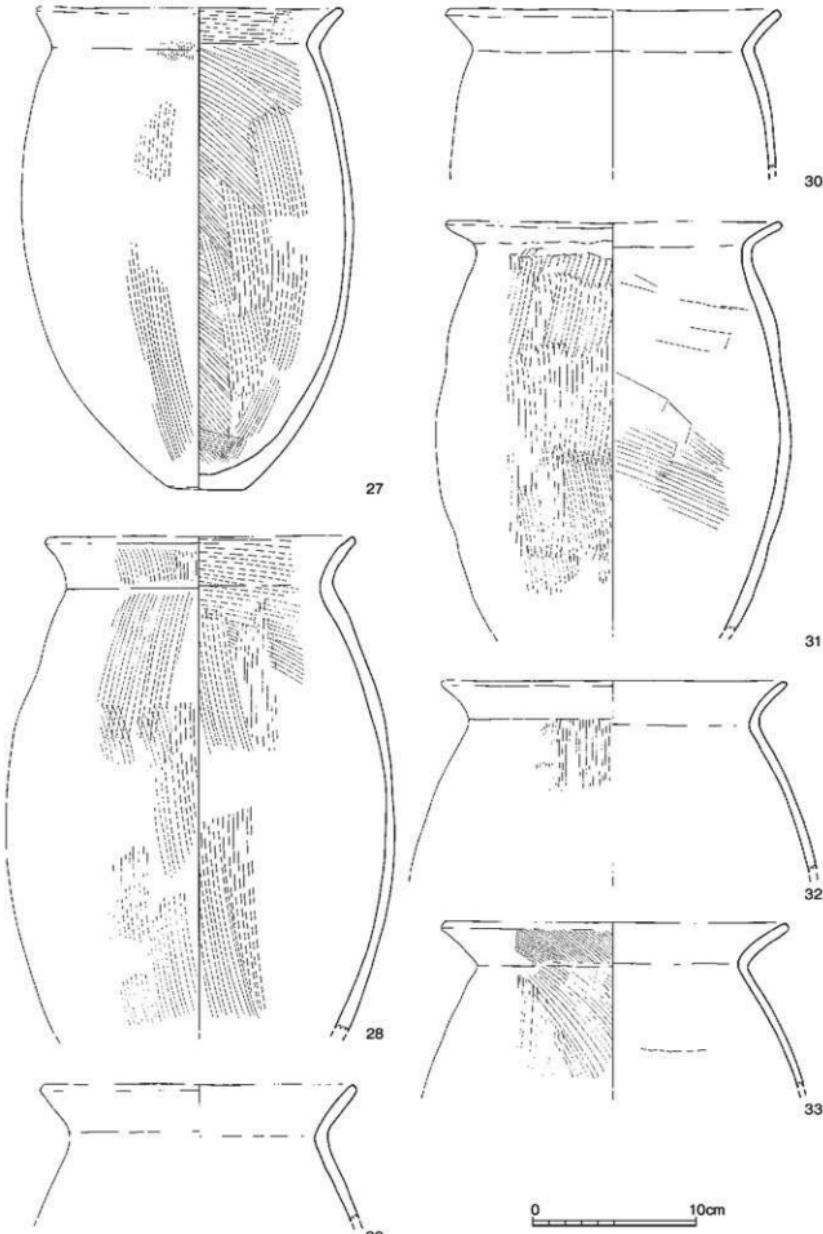
39~52は口縁部の屈曲が弱く、頸部から口縁部にかけてC字形を描く土器を示した。39は体部最大径部以上がほぼ完周、体部内面に刷毛目は見えず、指撫で痕が顕著である。40は内外面に刷毛目を残すが、内面中位以下では指撫によって部分的に消されている。41は小片。42は図示部がほぼ完周する。外面は火熱によって黒色・赤色化するが刷毛目を確認できる。43は口縁部が強く強く外彎するもので、胎土は比較的良好。器表が荒れるが部分的に刷毛目が見える。44は器表が剥落する。体部外面は下端付近が真っ赤となり、そこから肩部付近までは煤が付着、内面は真っ赤となる部分のやや上方から下位に焦げ付き痕が見られる。45も器表が荒れて、わずかに工具痕が見えるがこれも刷毛目であろう。46は頸部以下がほぼ完存する。肉厚の土器で、器表が荒れているが全体に刷毛目を観察できる。特に底部付近の荒れが甚だしい。

47は小片、口頸部外面に煤が付着したようで灰黒色となる。48は張りの弱い体部と小さな平底をもつ全体が窓える土器である。体部内外面は疎らな浅い刷毛目を主体とするが、特に外面は充分平滑化せず、皺や小さな粘土瘤などが見られる。底部付近はほぼ1/2が真っ赤となる。49は残存部下端付近の外面が真っ赤となる。器表が荒れているがこれも内外面を刷毛目で仕上げるようである。50・51は口縁部が短い。52は壺とすべきであるかも知れない。これは体部内面を箆削りで仕上げているようである。

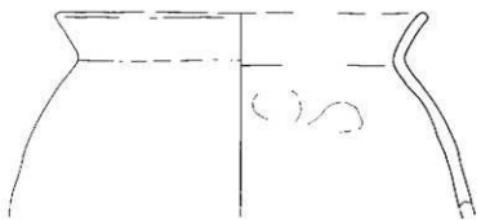
53は弥生前期の如意形口縁となる壺で、器表が荒れる。内面にシャープな刷毛目状の痕跡があるが、非常に鋭利なものでいわゆる調整痕ではなかろう。54は同上底部である。底部外縁から側縁にかけてが特に赤変する。55は小さく突出する平底の底部であるが、後期のものであろう。

56は器肉が厚い土器の平底となる底部で完周する。57は肉薄の完周する底部で、内面は赤変、外面は赤変、黒変する部分が半々ほどとなる。底部外面は黒色である。外面の調整痕は刷毛目であろう。58は外縁が丸みをもつ平底の底部片で、これも器壁が厚い。器表が荒れるが、内外面に刷毛目が見える。59は平底の小振りな底部から、体部が直線的に急角度で立ち上がる。外面下端は箆削りのようである。60は外縁が丸みをもつ平底の底部片であるが、図示した体部の傾きに不安がある。内面は指撫でのよう、外面ではごく微かに叩き痕が見える。61は小さな平底をもち、体部が内彎しつつ高く立ち上がる。非常な火熱を受けたようである。62は小さな平底の底部をもち、体部が丸みをもって立ち上がる。体部外面に工具痕が見えるが、これも刷毛目の痕跡であろう。63はやや丸みをもつ底部。胎土粗く器表が荒れる。64は平底、体部最大径が中位にある壺の体部で、全体に赤味をもって焼き上がるようである。器表が荒れるが、体部外面は箆磨きで調整するようである。肩部に箆描と思われる刺突が刻まれる。

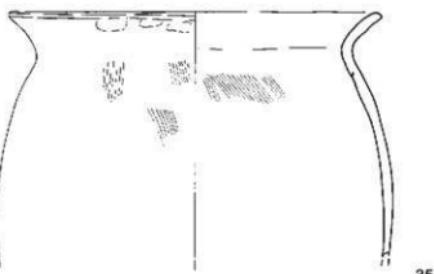
65~74は鉢を示したが、65は壺とすべきか。66は砲弾形の体部に直線的に開く口縁部を付す。ほぼ完存するが、器表が剥落して細部は不明。67は底部付近を欠き、口縁部の1/4ほどが残存。外面は全体に赤変し、内面も中位以下が鮮やかな赤色となる。以上は黄白色~灰黄色である。68は平底の底部から直線的に体部が開き、口縁部に変化を加えないそのまま終わる。胎土は比較的良好で、赤く焼き上げるようである。69~74は体部が内彎する。69~75は椀と呼ぶべきか。69はほぼ完存し、外面は削り状の調整を行なうなお手捏土器のように皺が多く残る。器表に径5mm以下の白色ブロックが見られる点で特徴的である。70は外面に工具痕は見えないが、内面には横位の



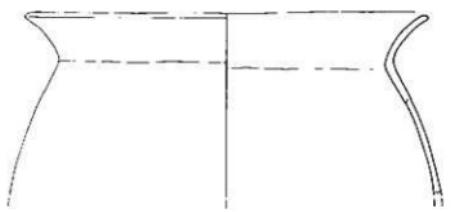
第116図 1号溝3区上層出土土器実測図5 (1/3)



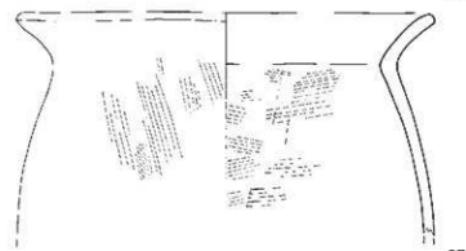
34



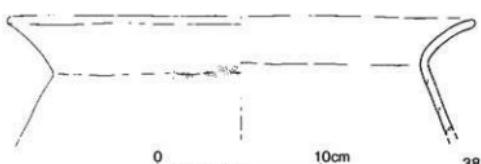
35



36

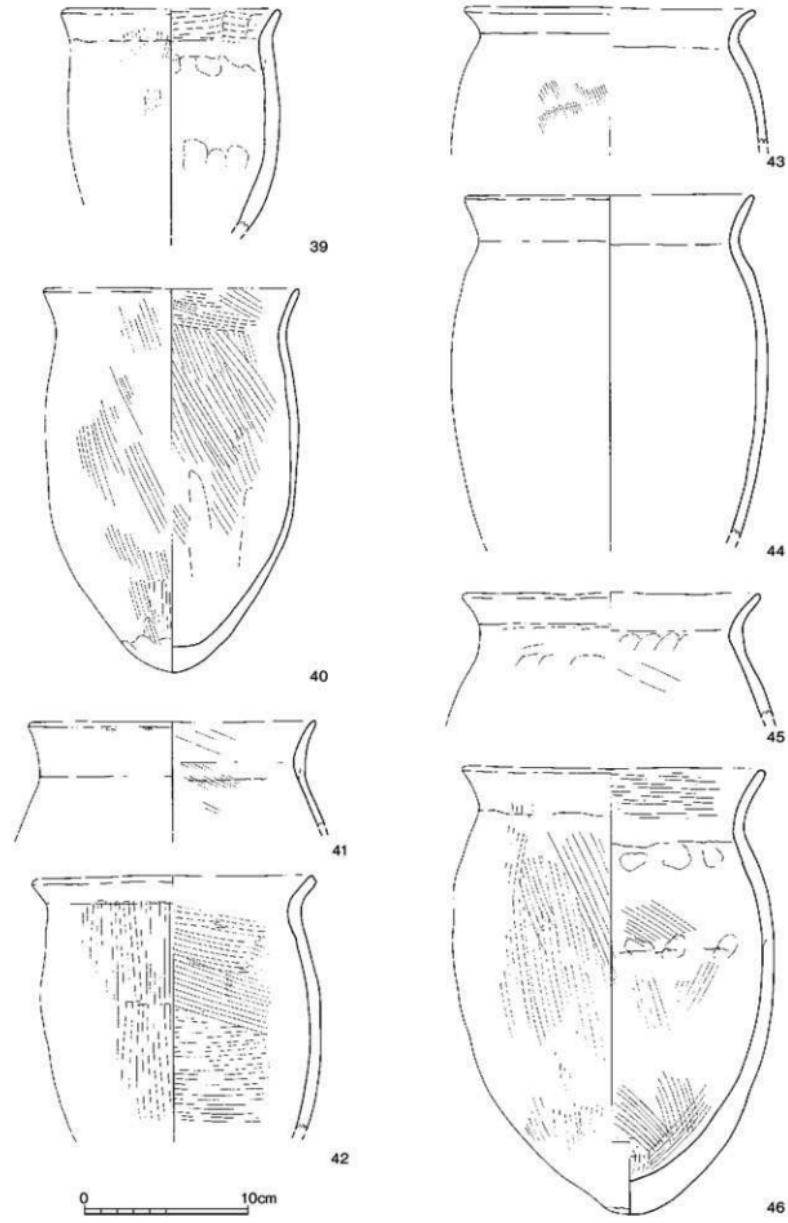


37

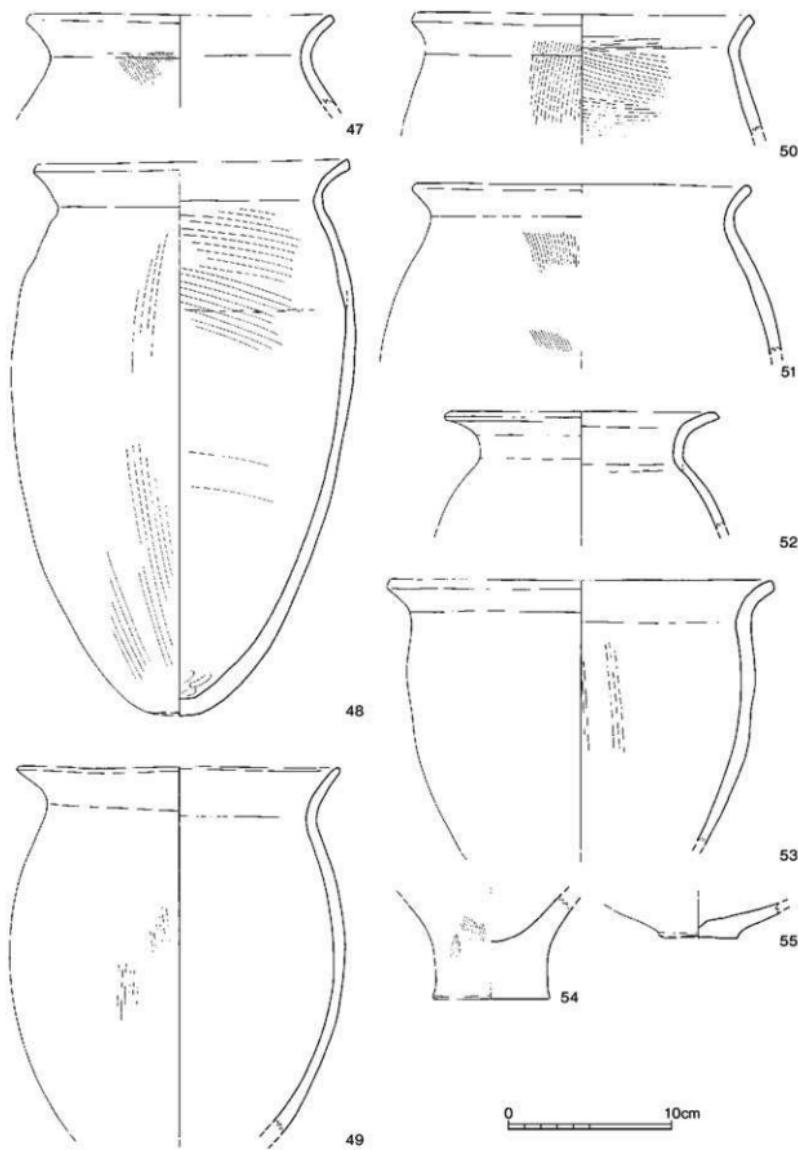


38

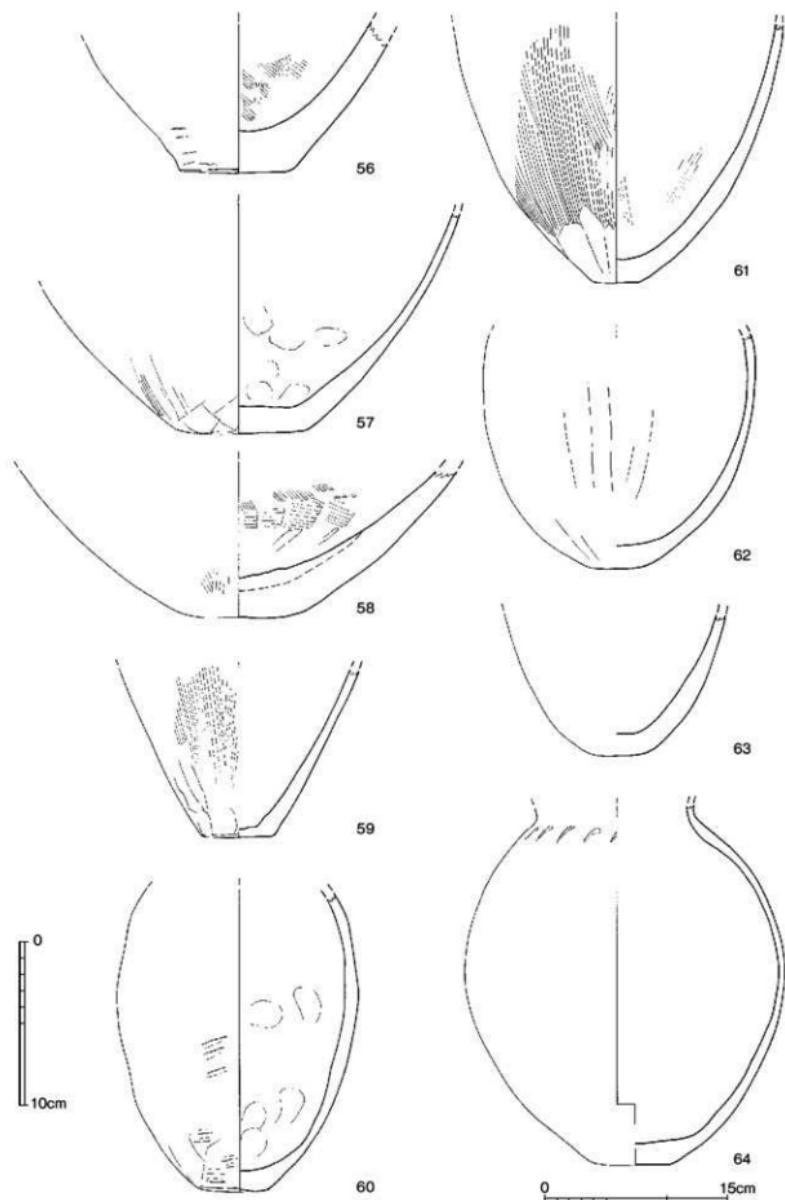
第117図 1号溝3区上層出土土器実測図6 (1/3)



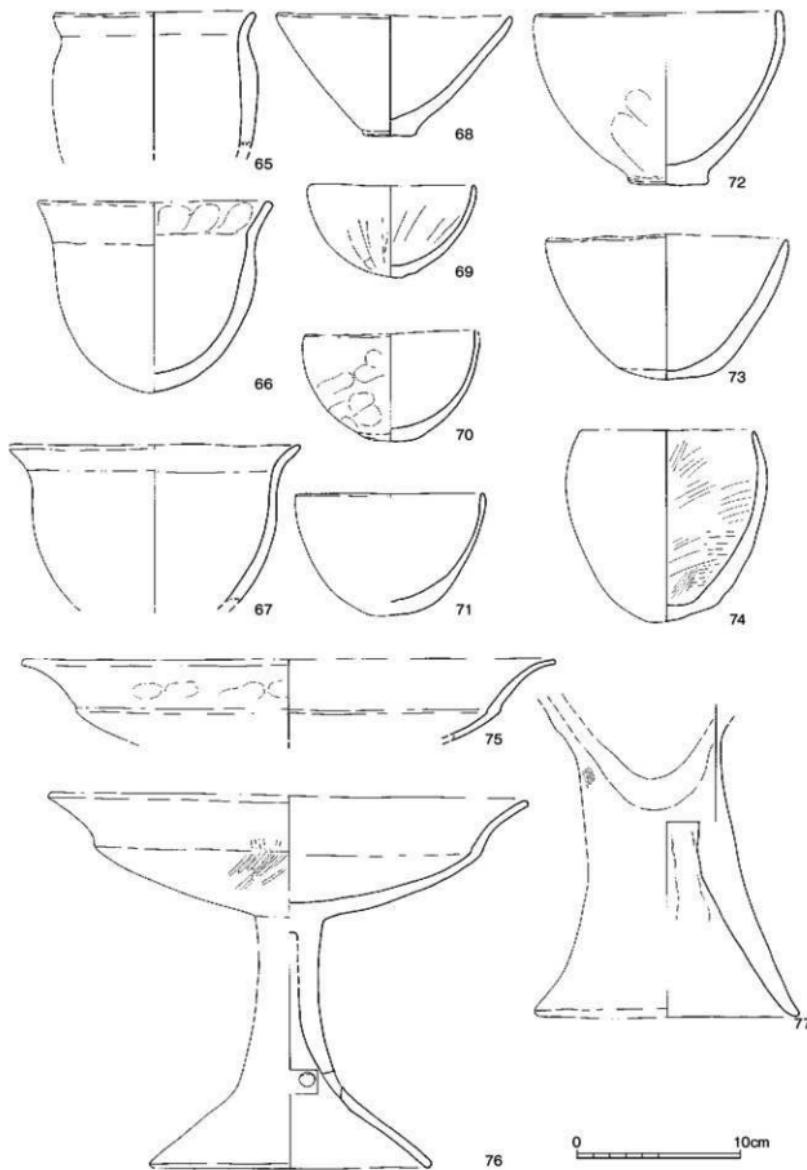
第118図 1号溝3区上層出土土器実測図7 (1/3)



第119図 1号溝3区上層出土土器実測図8 (1/3)



第120図 1号溝3区上層出土土器実測図9 (64は1/4、他は1/3)



第121図 1号溝3区上層出土土器実測図10 (1/3)

痕跡が微かに残る。横刷毛を施したものであろう、器面が平滑化している。71はほぼ完存する。なお小さな平底を残し、体部が深い。72もほぼ完存する。底部はしっかりとした平底となり、高く立ち上がる体部はそのまま変化を加えずに口縁部へ続く。底部周辺の外面は赤変、内面では口縁部付近が部分的に灰黄褐色となるが、大部分が灰黒色となる。73もほぼ完存する。これはレンズ状に小さく膨らむ底部をもち、体部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。内面はほとんど黒色、外側は赤色・黒色に変色する。74は底部が完周する砲弾形の深い鉢で、口縁部はほとんどを欠くが本来大きな変化を加えていなかったようである。

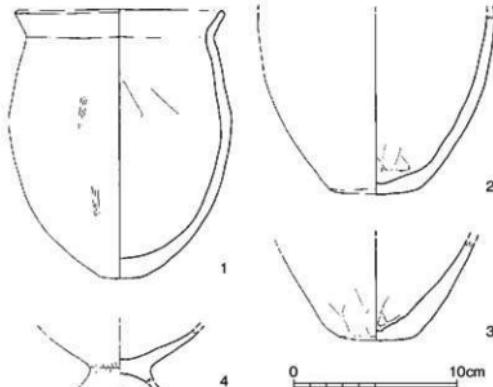
75は胎土良好で丁寧に作られた高杯口縁部の1/4ほどの残片。器表が荒れる。76は杯屈曲部以下が完存する。杯部内面で見ると屈曲部以上がより高くなっている。また、透孔は3方であるが、その配置が上から見て二等辺三角形の位置にあるために図では4方向のような表現となっている。器表が荒れるが、微かに刷毛目、箠磨きの痕跡が残る。77は抉入りの器台で、抉りが入った部分の下位外側がより赤く変色する。抉りの背面は黒変する部分が多く、内面は全体に荒れている。赤変部を重視すれば、抉りが入った部分を下にして使用したと思われる。

3区下層

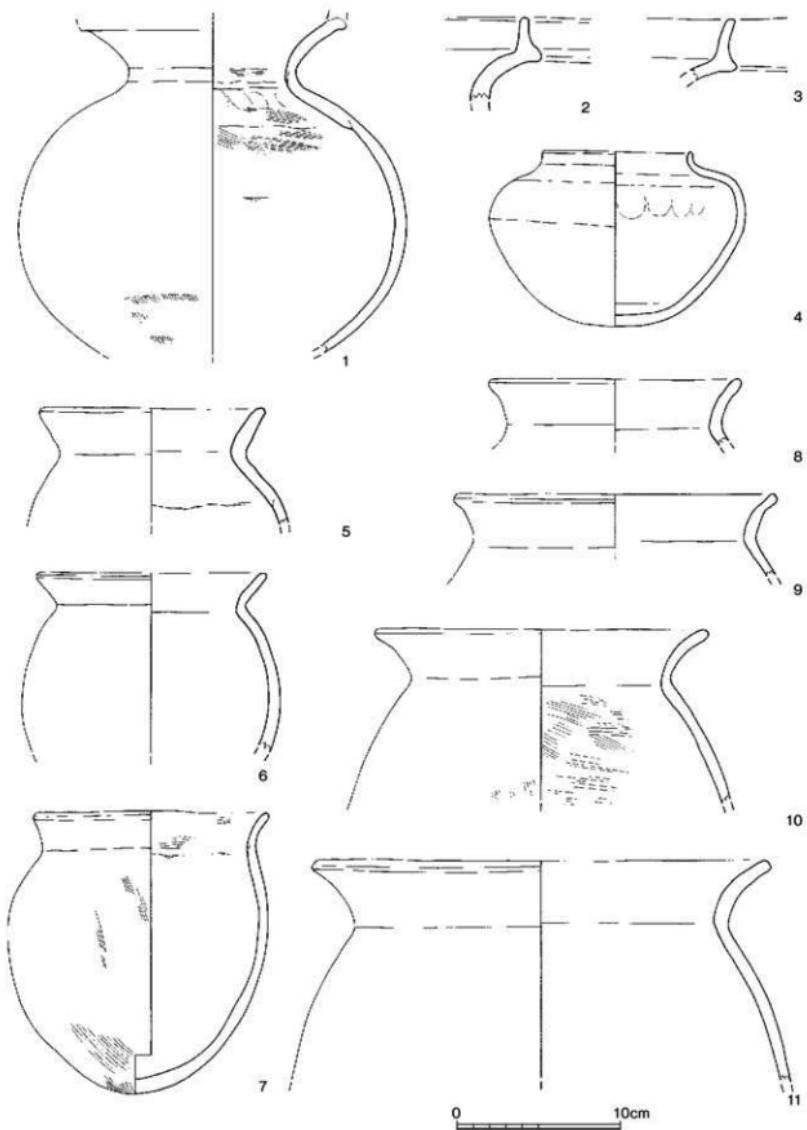
土器（第122図） 1は底部付近が完周、口縁部は小片となる壺で、小さな平底をもつ。胎土は良好といってよいが、器表は荒れる。外面を刷毛目で調整したようである。2も底部付近がほぼ完周する体部片で、これも胎土は比較的良好。調整痕は見えない。3も完周する平底に近い底部。4は脚付きの土器である。

4区上層

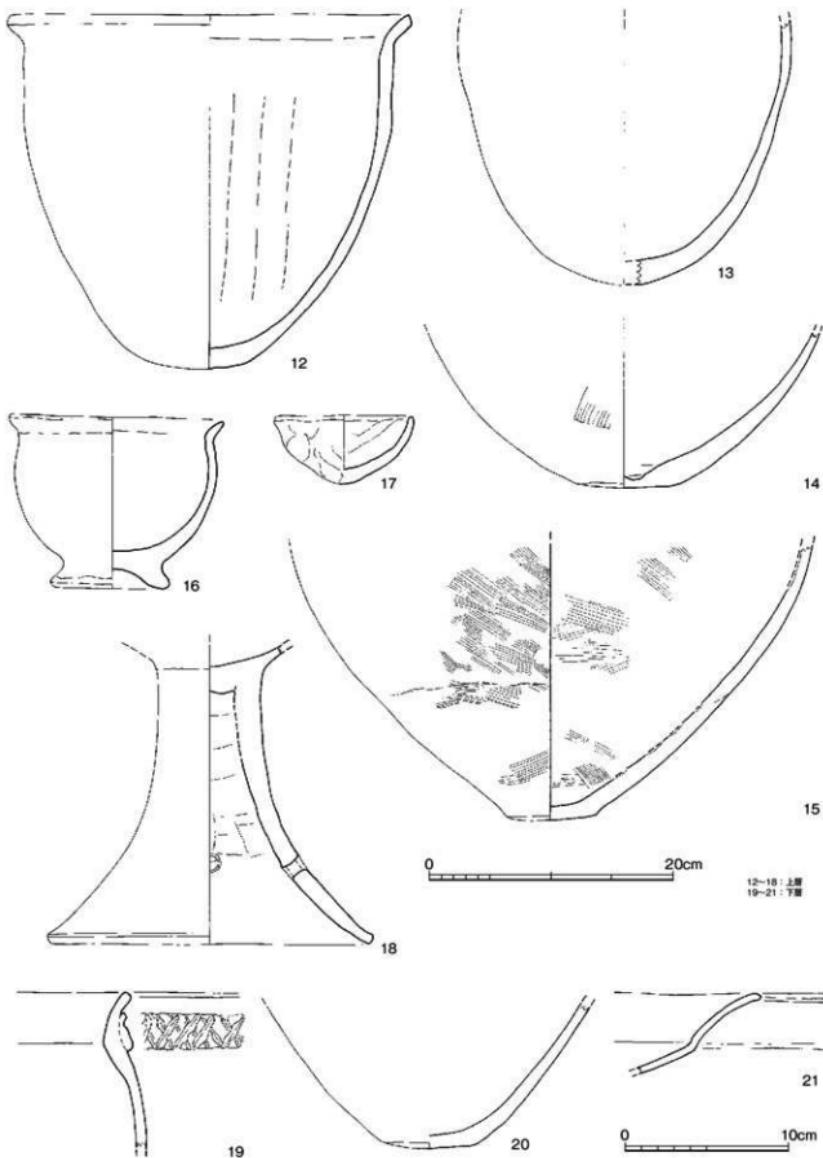
石製品（図版61、第149図10・13） 10は砂岩製石庖丁で、背は丸く、刃部は鎌をもって鋭く研磨されている。全体に丁寧に研磨されるがなお及ばない部分が若干存する。穿孔方法は判断に苦慮するが、深い角度でなされる。13はいわゆる立岩産石庖丁で完存する。図示した面では特に左端近くに大きく研磨が及ばない部分があり、刃部付近や右端近くにも数カ所の研磨の及ばない凹部が見える。図背面では両孔と刃部の間が大きく剥離しているが、そのまま使用している。剥離がど



第122図 1号溝3区下層出土土器実測図 (1/3)



第123図 1号溝4区上層出土土器実測図 (1/3)



第124図 1号溝4区上層出土土器実測図2・下層出土土器実測図 (15は1/4、他は1/3)

の段階で生じたか判断できないが、剥離部は刃部のわずかな部分が研磨されるだけである。背にも沈線状に本来の凹みが大きく残されている。穿孔は両面から浅い角度でなされ、孔径は2mmに満たない小さなものである。

土器（図版56、第123図～第124図18） 1は口縁部屈曲部以上が剥離した二重口縁壺で、張りの強い体部をもつ。全体に赤変。2・3は二重口縁壺小片。4はほぼ完存する無頸壺で、胎土良好、器表が荒れて調整痕は見えない。

5～11は壺で、多くはく字形の口縁部をもつが、7は外反が弱くC字形となる口頸部をもつ。いずれも器表が荒れているが、確認できる調整痕は刷毛目である。

12は深鉢状の土器で、底部はわずかに丸みをもつ。口縁部は短く、端部に面をもっている。これは体部内面を丁寧に箆削りで調整するようである。13は丸底の底部片で、傾きに不安がある。図示していないが外面は叩きのようである。14は小さな平底となる底部で、内底面が小さく凹んでいる。外面は赤変する。15はレンズ状に小さく膨らむ底部片で、内外面を刷毛目で仕上げるが、外面に粘土紐の継ぎ目が見える。

16は脚付鉢で、ほぼ完存する。球形の体部に肉厚で短い脚を付す。17は手捏ねのミニチュアであるが、胎土は良好、丁寧に作られた感がある。18は肉厚となる高杯脚部で4孔が残る。柱状となる部分の内面に粘土紐の継ぎ目とも箆削りの痕跡とも決しがたい痕跡がある。器肉は黒色、器表は灰黄褐色となる。

4区下層

土器（第124図19～21） 19は頸部に刻目突帯を付す壺小片で、胎土良好、丁寧に作られる。20は小さく膨らむ底部片で、器表が剥落して外面が赤変する。21は高杯小片。

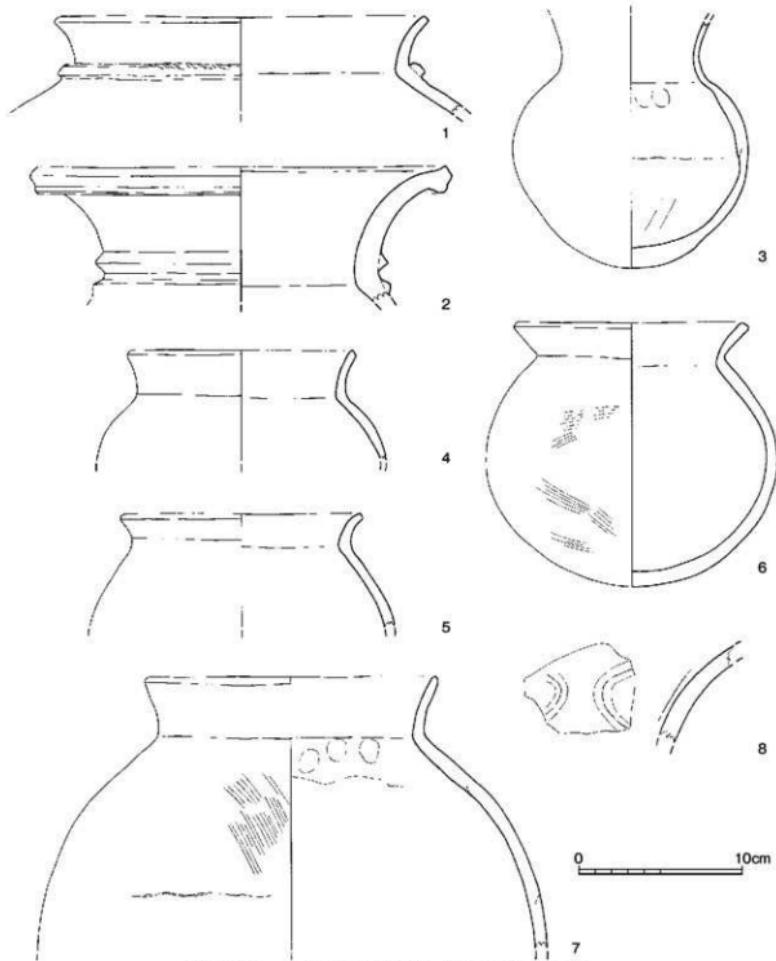
5区上層

土器（図版56・57、第125～127図） 1は口縁部が短く外彎外反し、端部に面を付す。頸部に高い突帯を巡らせ、その上端を押圧するようである。2は口縁部が大きく開き、口端部を上方へ摘むとともに下端に断面三角突帯を付す。頸部にも同様の突帯を2条巡らせているが、これは小片。3は直口壺あるいは広口壺であろう。球形の体部をもつ。器表が荒れて外面調整は見えないが、内面では上半に指撫で痕、以下に弱い刷毛目と思われる痕跡が見える。体部上半が完周、下半の1/2が残存する。4・5は小片だが、頸部が縮まることから壺としておく。6は球形の体部にく字形に直行する口縁部が付く。体部下半が完周、上半は1/2が残存する。7は短頸壺で、外面に粘土紐接合痕が見える。8は口縁部内面に突帯を貼り付ける弥生前期末の壺片である。

9・10は口縁部が強く外反するよく似た壺で、いずれも外面に叩き痕を残す。11は平底から張りの弱い体部、弱く外彎する口縁部へと続く小型壺で、底部付近は完周する。胎土に大粒の砂粒を含むとはいえ、概ね胎土良好といえる。12はやはり口縁部が大きくC字形に外彎するもので、頸部下にわずかに叩き痕が残る。

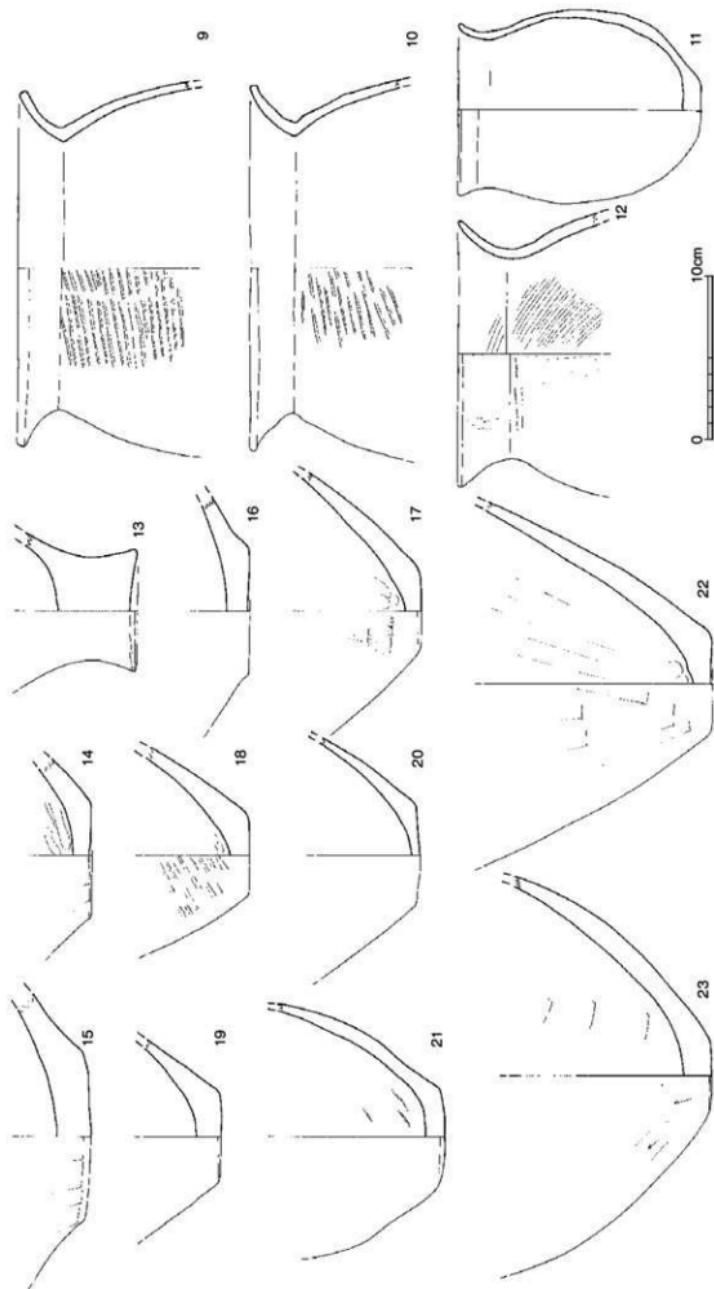
13は厚底となる弥生中期初めの壺底部で、残存する外面全体が赤変する。14・15は大きく浅く開く底部で、14は内面を箆磨きで仕上げる。15は調整痕がはっきりしないが、印象として前期～中期初めの土器のようである。16も大きく浅く開く底部であるが、これは後期の土器との感触である。17～20は平底であるが、外縁が丸みをもつ。18は外面全体が赤変、叩き痕がわずかに残る。20は底部外面が赤変、19～21は器表が荒れる。22は内外面に原体の幅が見える

が、刷毛目であろう。23は体部下端を鉈削りするようであるが、内面は刷毛目としてよかろう。24~26はわずかに膨らむ底部をもつもので、26は特に肉厚となり、外面が赤変、器表が彈けている。27は底部付近が完周するが、底部の中心がはっきりしないために復元図に不安がある。ただ、作りが雑で、特に内面では器面が充分に平滑化していない。28は丸底の底部をもつ土器で、胎土良好、内外面に刷毛目が観察できる。体部外面下端にいくつか工具による面が見えるが、砂粒の移動は認められない。29は手捏ねの鉢で、胎土・作りは良好である。30は身が深い半球形の椀で、器表が荒れる。31は平底の鉢で、底部は完周、口縁部は小片である。これも器表が荒れる。32は口縁部が短く強く外彎する高杯片。33は口縁部が32に比べて長く直線的に延びる小片。34

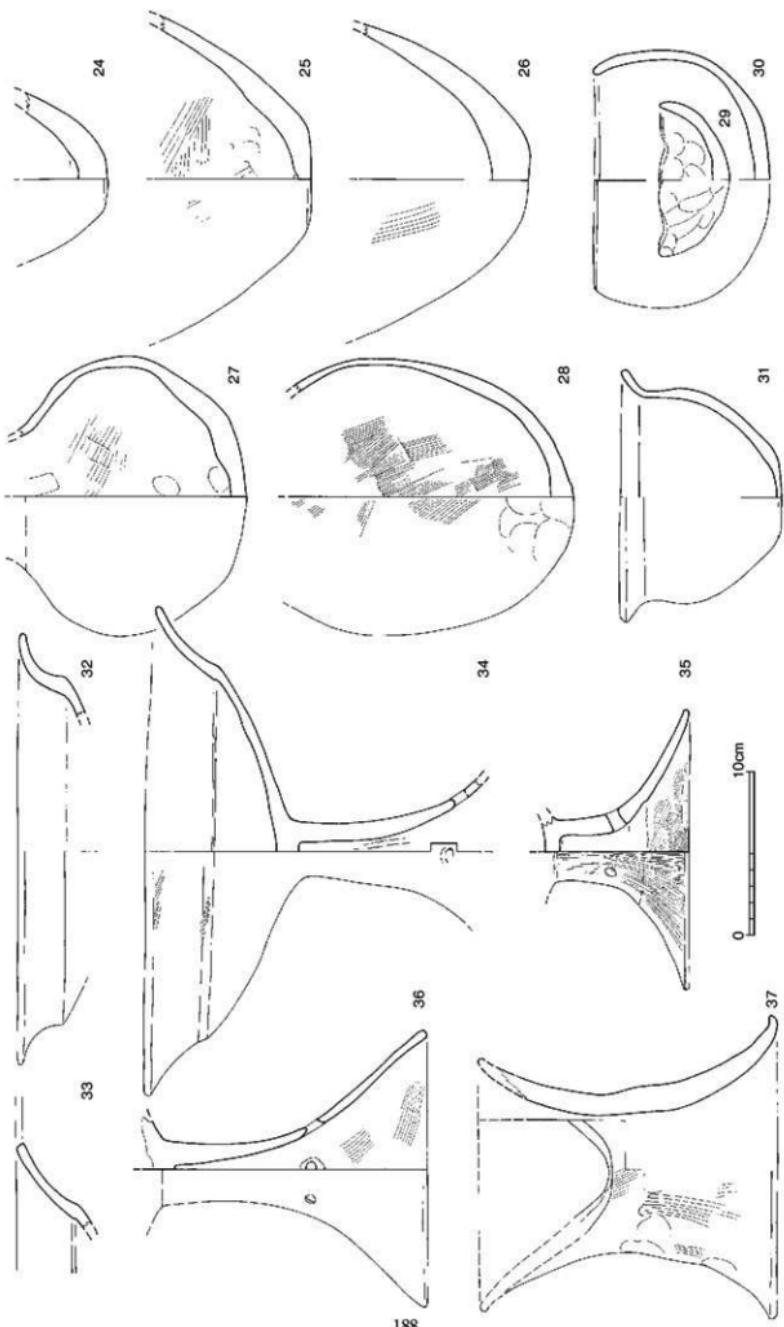


第125図 1号溝5区上層出土土器実測図1 (1/3)

第126圖 1號溝5區上層出土器物測量圖2 (1/3)



第127圖 1號溝5區上層出土器物圖3 (1/3)

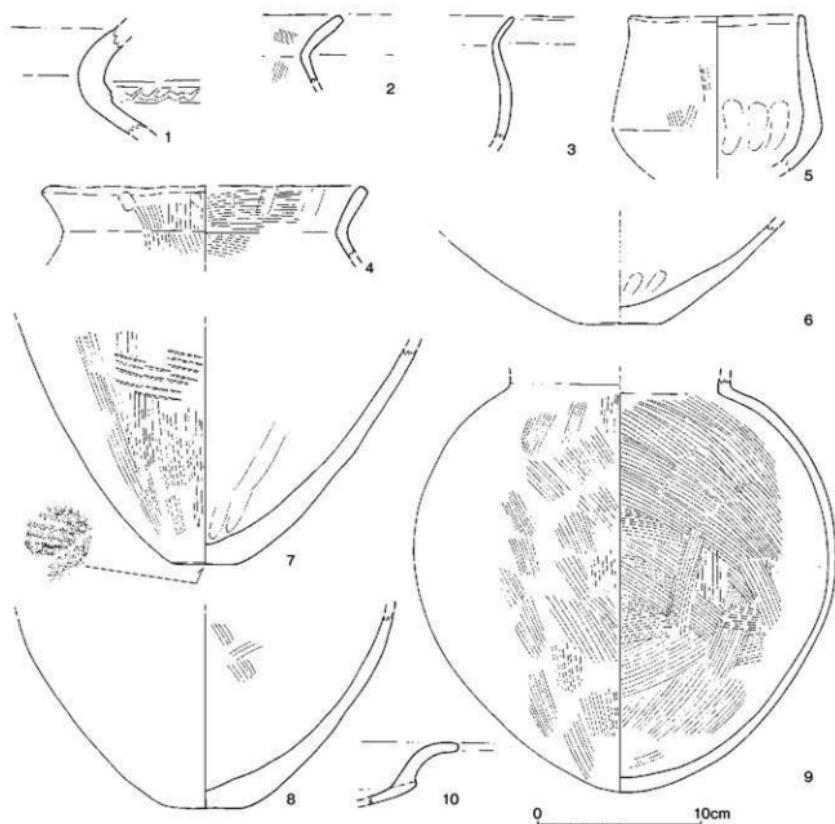


は杯部の2/3が残存。透孔は3方であるが、これも配置が等間でなく図のようになる。器表が荒れている。35は短脚で脚裾が大きく聞く非在地系の高杯。外面では細かく施された刷毛目が部分的に化粧土に覆われて隠れている。また、内面では孔の下の表面が1cmあまりの幅で帯状に剥離し、その下位では刷毛目の原体を変えている。36は長脚の高杯片で、円孔は3方であるがこれも等間に配置していない。また、孔は焼成後に穿つようである。胎土良好で、全体に赤く焼き上がる。

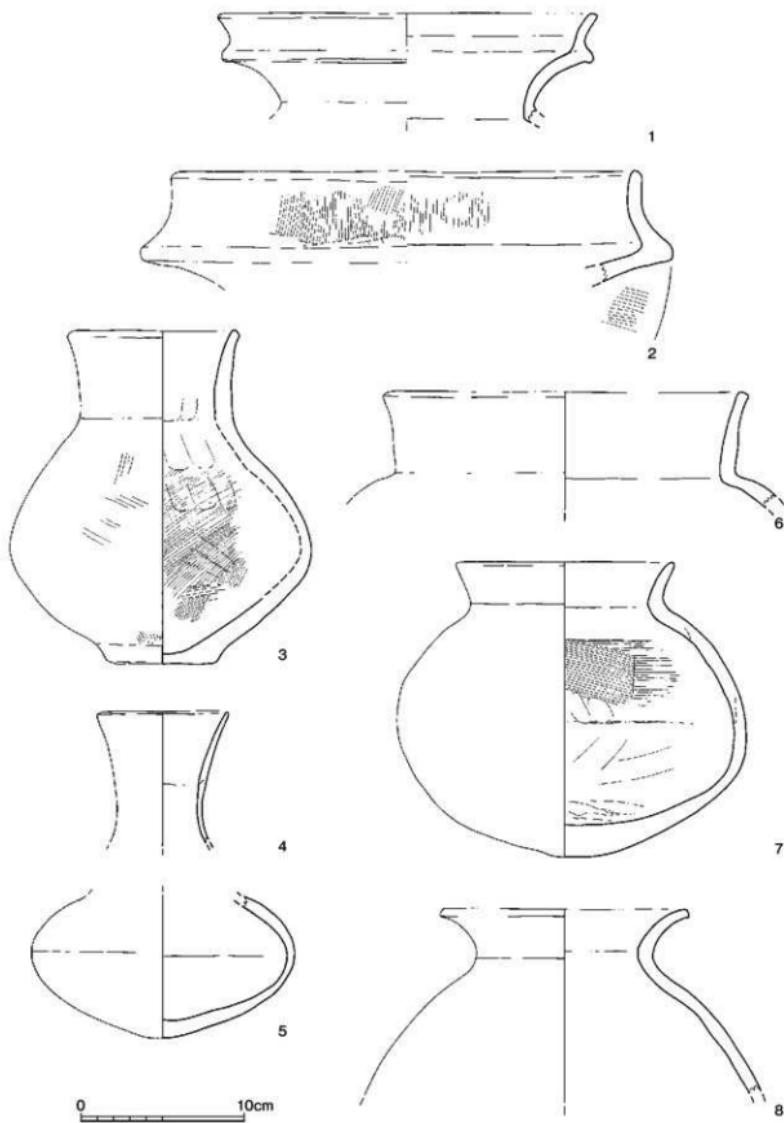
37は抉入りの器台。外面で赤く変色する部位は抉った部分の下端付近、その反対側の裾部を除く下半部及び同上半部である。抉っている部分の反対側の内面及び外面下半は煤けて黒色化する。

5区下層

土器 (第128図) 1は頸部に刻目突帯をもつ壺小片で、刻み目は摩滅するが本来的にX字形に付していたようである。2・3は壺小片。4は口端部を断面方形とする壺片で、これは1/4が残存す

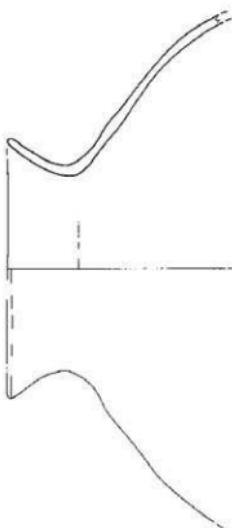


第128図 1号溝5区下層出土土器実測図 (1/3)

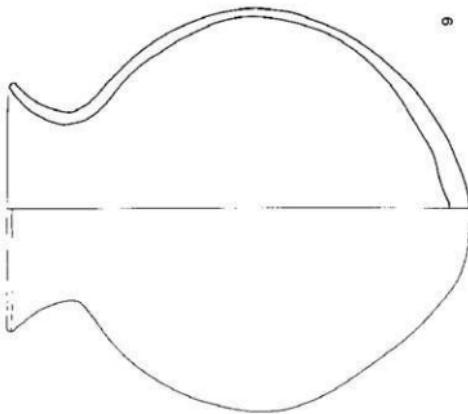


第129図 1号溝6区上層出土土器実測図1 (1/3)

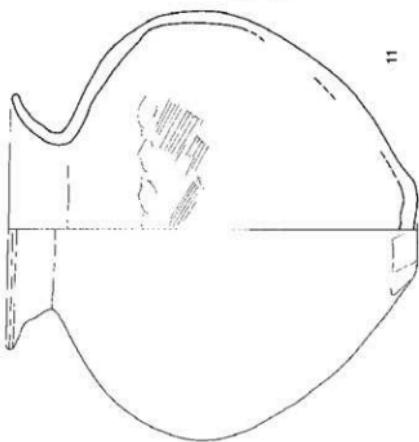
10



9



11

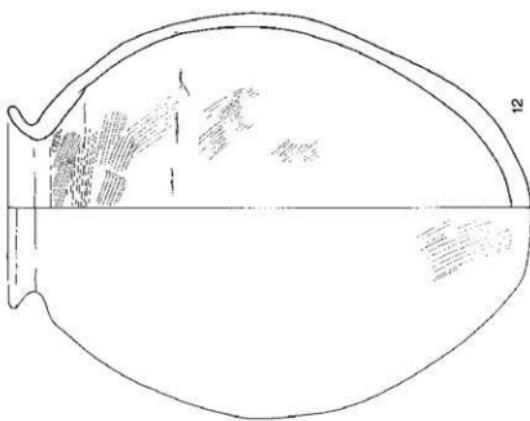


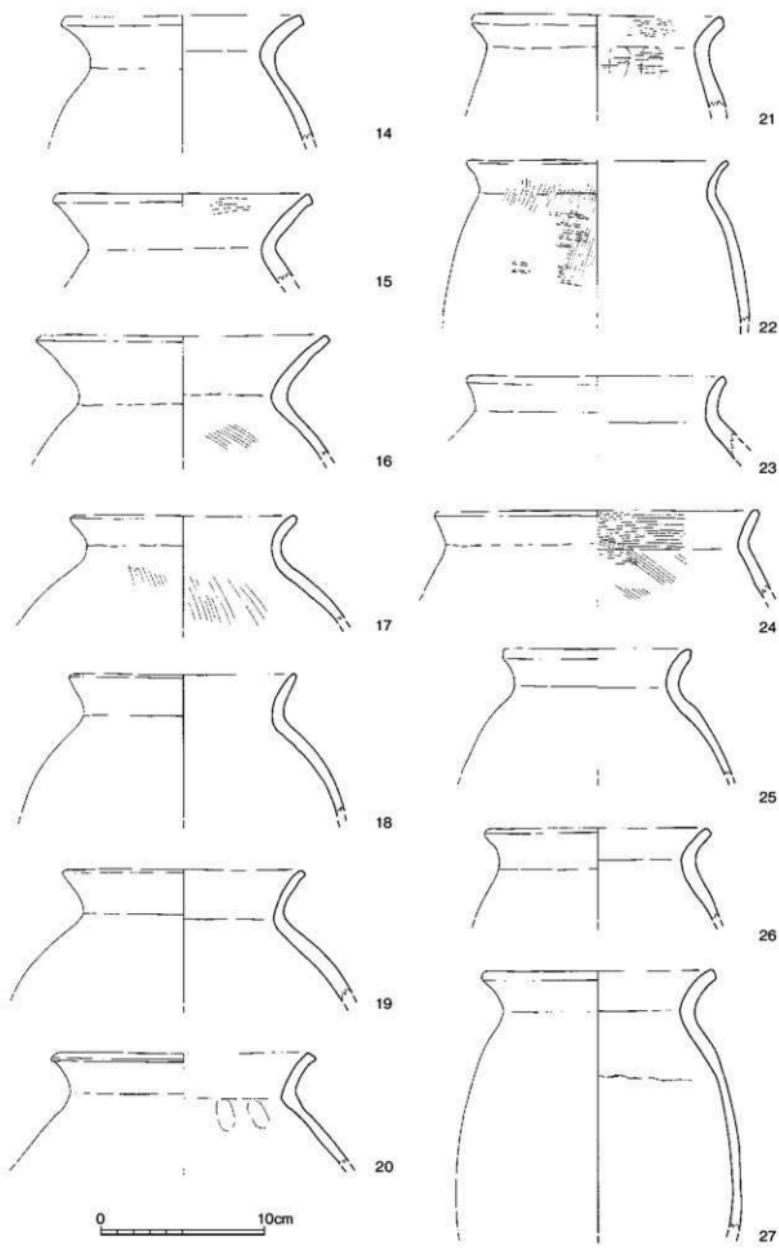
0 10cm



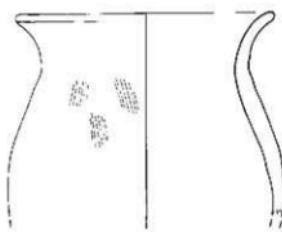
0 20cm

第130圖 1號溝6區上層出土土器素面圖 2 (13號1/4、他號1/3)

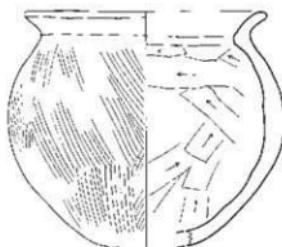




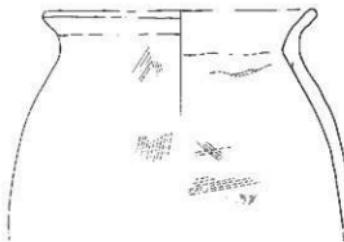
第131図 1号溝6区上層出土土器実測図3 (1/3)



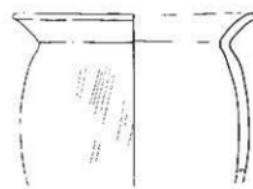
28



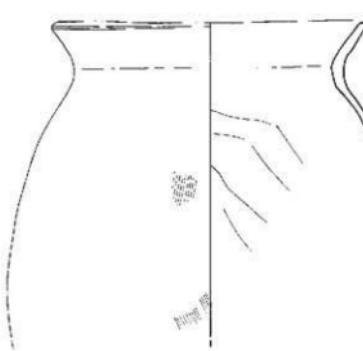
33



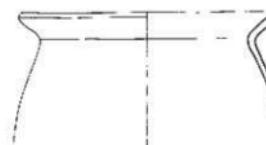
29



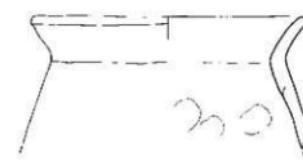
34



30



35



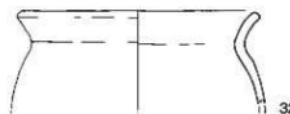
36



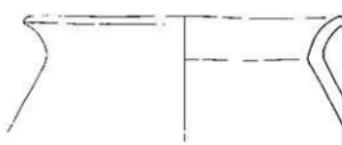
31



37



32



38



39

0 10cm

第132図 1号溝6区上層出土土器実測図4 (1/3)

る。5は体部下位が最大径をもちかつその部分が屈曲、口縁部に向かって内傾する巾着形の鉢で、外面には微かに刷毛目が見え、内面は指撫でで仕上げるようである。

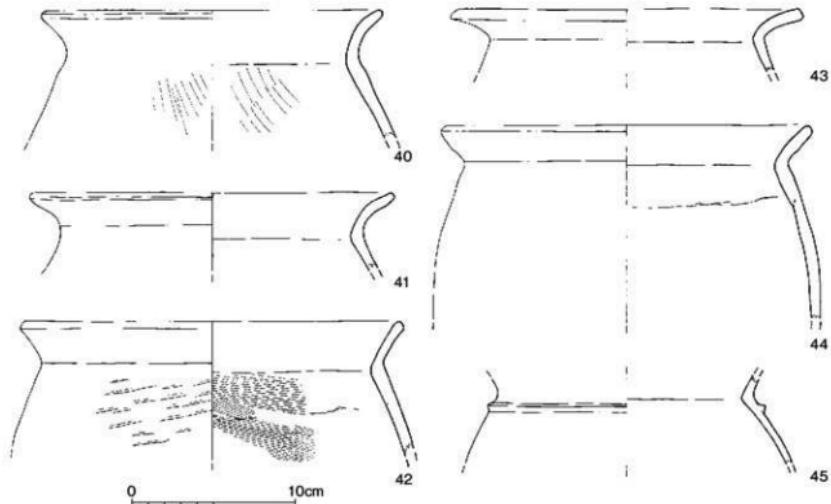
6は大きく開く体部をもつ平底の底部で器表は荒れる。7は小さな平底をもち、体部は急角度で立ち上がる。体部外面に微かに叩き目が残り、外底面にも叩き痕が残る。8も平底の底部で、内面底部付近は丁寧に指撫でを施すようである。その上方には微かに刷毛目が見える。9は丸底の壺体部で、全体に刷毛目が見える。

10は高杯小片、口縁部が短く強く外彎する。

6区上層

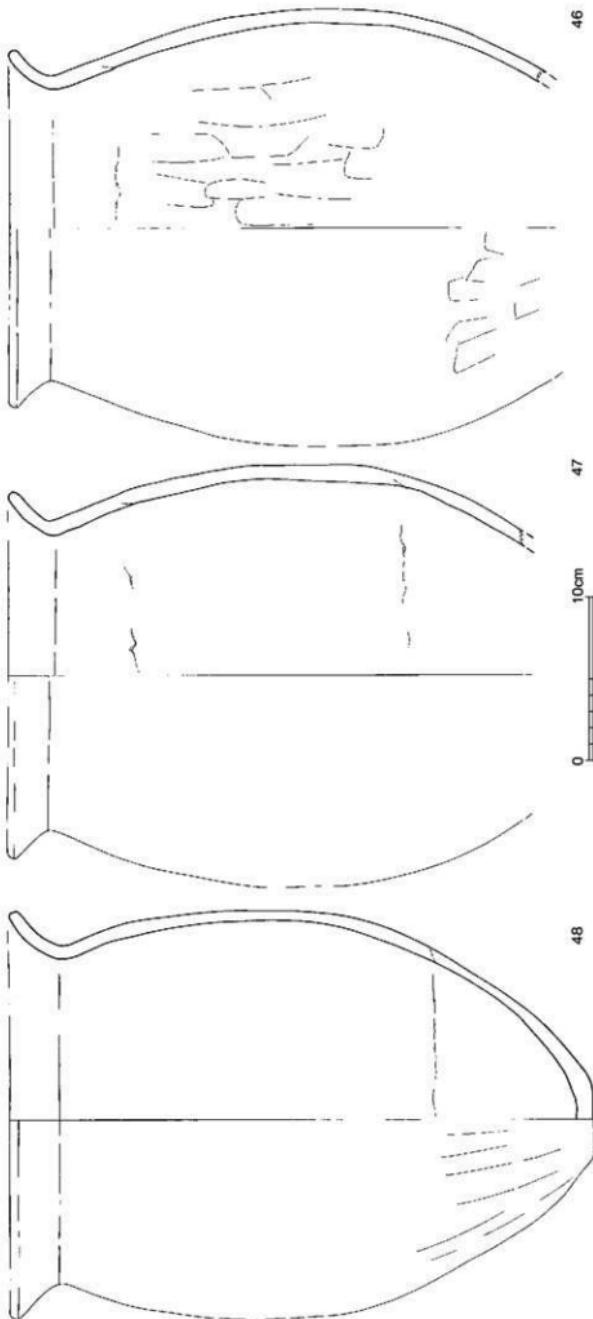
石製品（図版60、第149図14・16、150図21～23） 14は粗い炭斑岩製の砥石で、図表裏の2面を使用、非常に滑らかになっている。他の側面は未使用で、折損もないようである。16は全体が滑らかとなる安山岩で、明瞭な使用痕といったものは見えない。強いて挙げれば、図下端の左右両端が破損している点であろう。21～23は安山岩で、明らかな使用痕はないが破面を除く全体が滑らかとなっている。21は部分的に赤くあるいは褐色に変色していて、火を受けたために左右両端が剥離したものであるかも知れない。

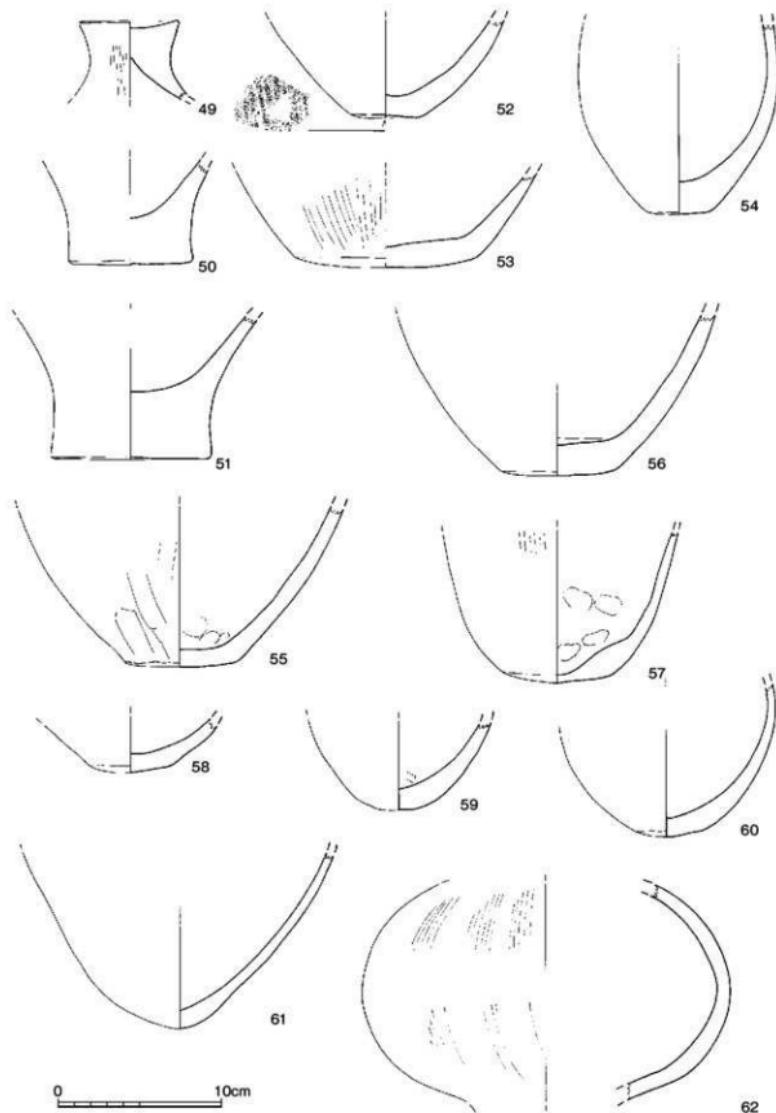
土器（図版57・58、第129～136図） 1・2は二重口縁壺片。1は頸部が小さく突出し、口縁部が外彎、端部に面をもつ。器表が荒れる。2は口縁部が内彎内彎し、これは内外面に刷毛目が残る。3は体部がほぼ完存、口縁部の一部が残存する長頸壺。口縁部はわずかに外傾するがほぼ直立に近く、長頸壺と呼ぶにはやや短い嫌いがある。体部最大径が低い位置にあって平底の底部となる。胎土は比較的良好。外面に微かに刷毛目が見える。4は肉薄の長頸壺口縁部で、中位内面に粘土紐の接合痕が見える。5は張りの強い偏球形の体部で小さな平底となる。この2点は同一個体であるかも知れない。6は短頸壺と呼ぶべきか。これもやや外彎するとはいへ直立に近い口縁部をもつ。7は完形に近い壺で、体部はやや偏球形となり、口縁部が短く外反する。外面の調整痕は見えないが、体部内面上半は明瞭な刷毛目、下半には原体の幅が見えるが明瞭な刷毛目や削り痕は見え



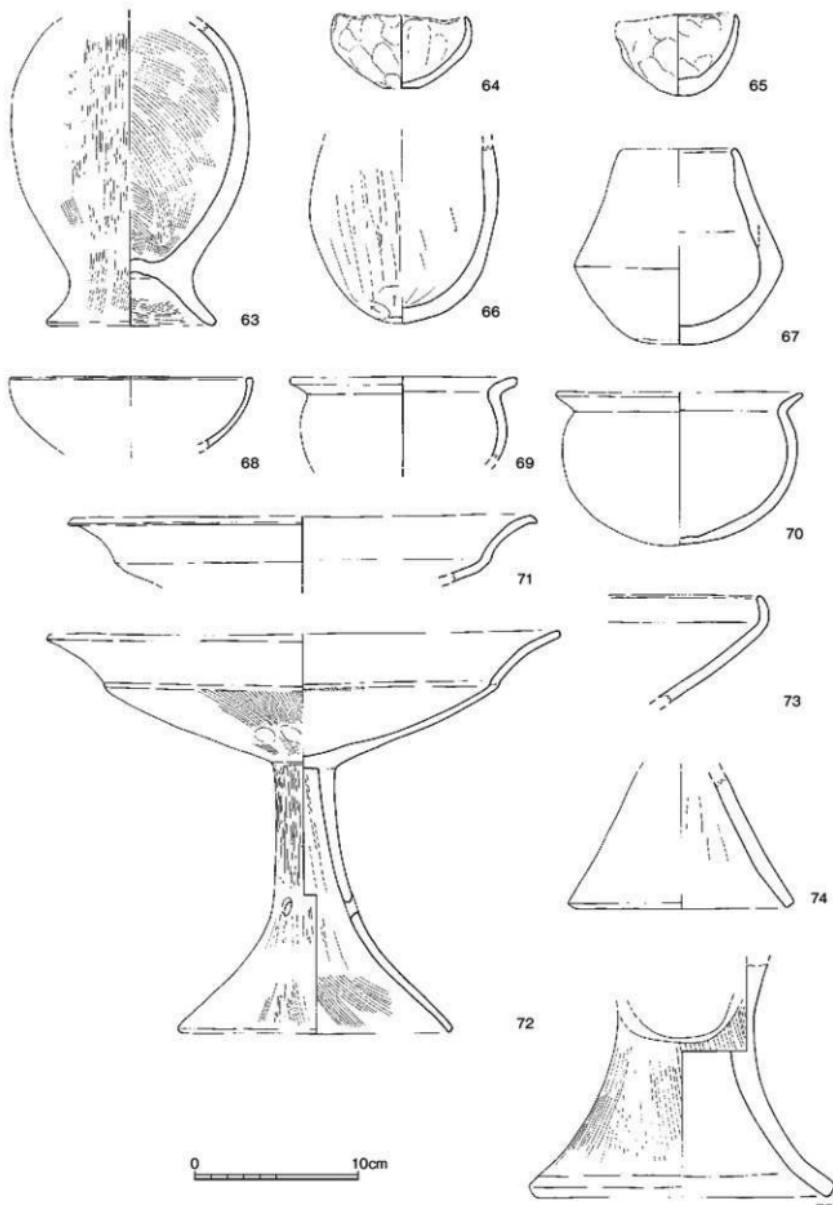
第133図 1号溝6区上層出土土器実測図5 (1/3)

第134圖 1號溝6區上層出土土器素描圖 6 (1/3)

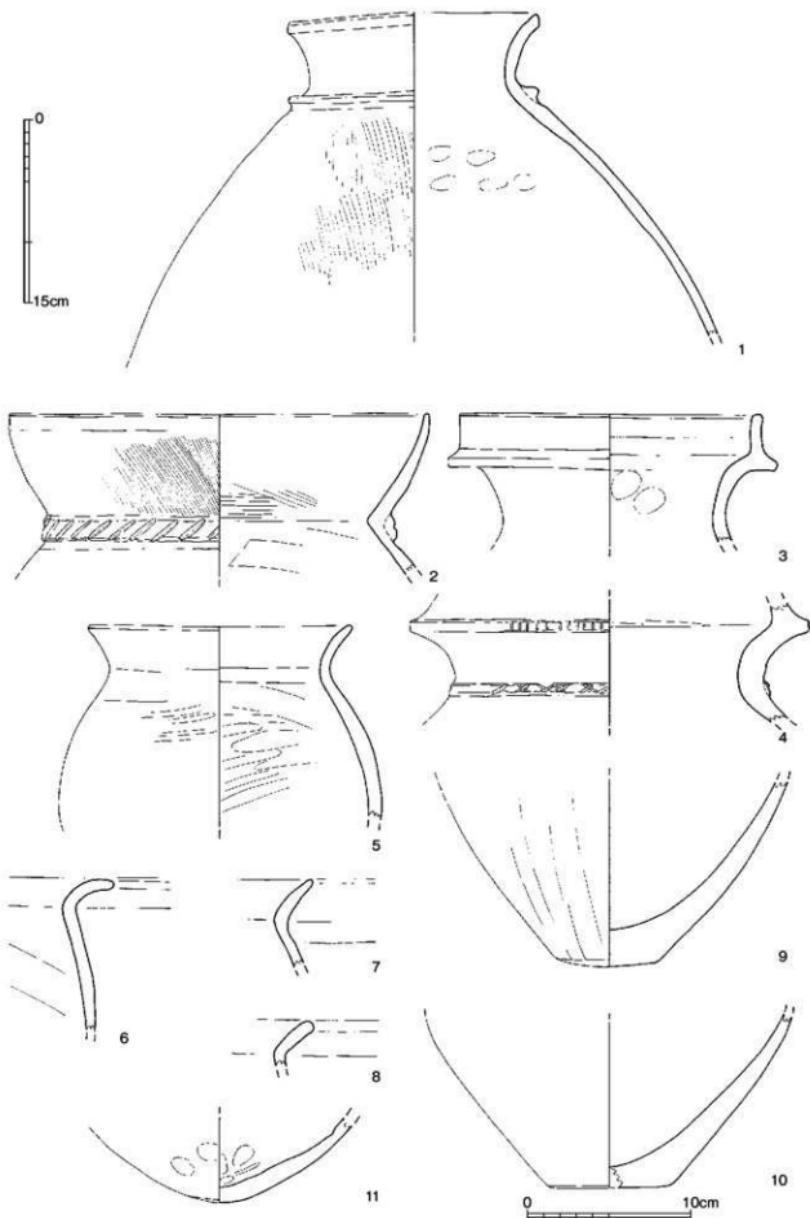




第135図 1号溝6区上層出土土器実測図7 (1/3)



第136図 1号溝6区上層出土土器実測図8 (1/3)



第137図 1号溝6区下層出土土器実測図 (1は1/4、他は1/3)

ない。弱い刷毛目といったところであろう。胎土は良好、全体に焼けて赤変する。8は7に比して口縁部がより強く外縁外反、やや長く伸びて端部に面を作る。調整痕は見えない。

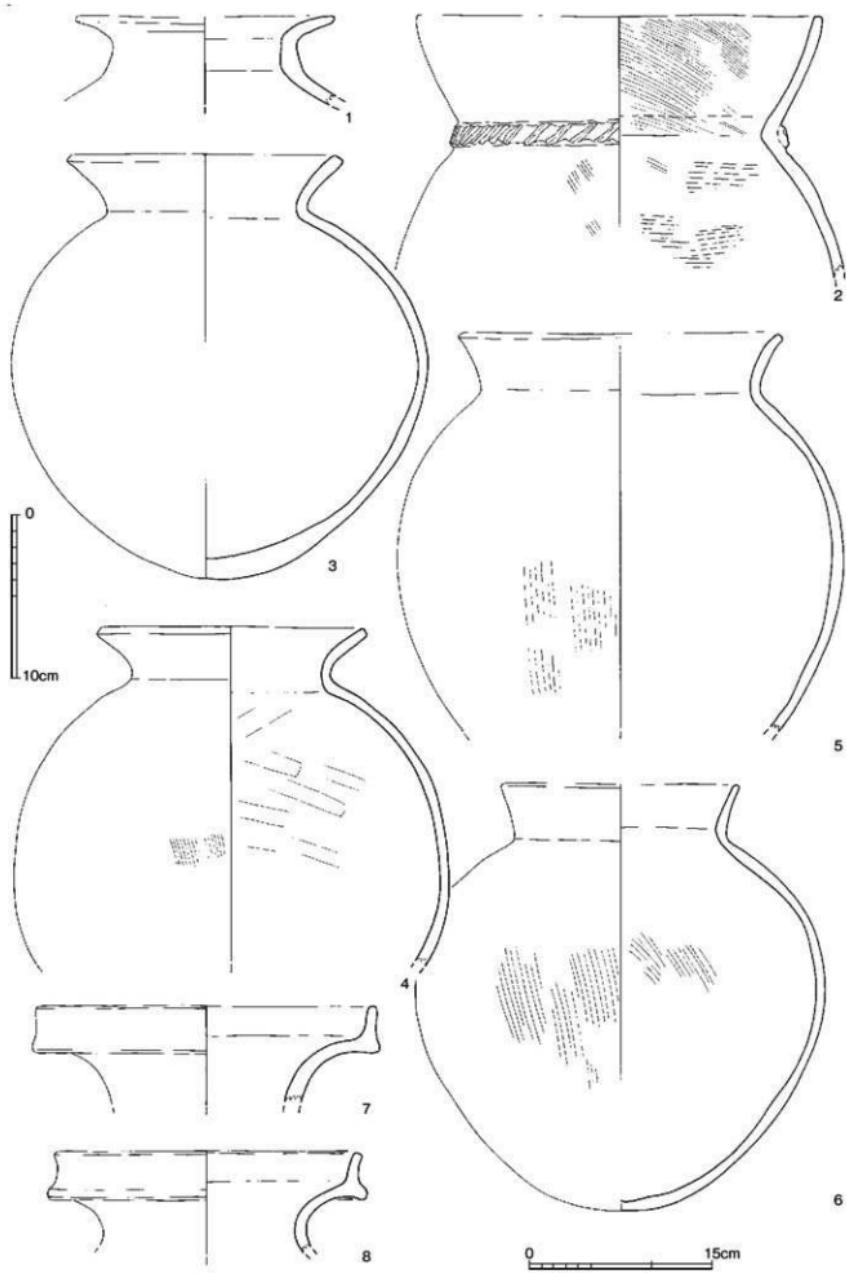
9~11は8に似るタイプ。9は体部の一部を欠く。丸底で球形に近い体部となり、口縁部がやや高く伸びる。全体に赤変し、器表の剥落がひどい。10は小片のため復元口径に不安があるが、8に似た器形である。11は小さな上げ底、張りの強い体部をもち口縁部の外反もより強い。頸部以下はほぼ完存、体部下端が大きく弾けている。12は長胴の体部に小さな口縁部を付すもので、ほぼ完存。器表が荒れるが、内外面に刷毛目が見える。13は低い扁平な刻目突帯を付す体部片で、刻みは刷毛目原体を使用する。

14~16はく字形に外反してやや長く伸びる口縁部をもち、端部に面を付す。17~20は頸部が縮まり、口縁部の形態はそれぞれ異なる。これらは壺と呼んでも違和感がないものである。21~24は口縁部が短く外傾する壺で、21・23は肉厚となり、22は体部外面に微妙に叩きが見える。25~30は口縁部がC字形を描く壺である。30の体部外面には細かい刷毛目が見え、内面も弱い刷毛目で仕上げたようである。31以下は口縁部がく字形に外反する壺。33は特に外反が強く、底部を欠くが体部が球形となるようである。体部外面は刷毛目、内面は箆削りで仕上げるが器壁を薄くする効果は上がっていない。31・32・34~40は小片のため復元口径、傾きに不安がある。

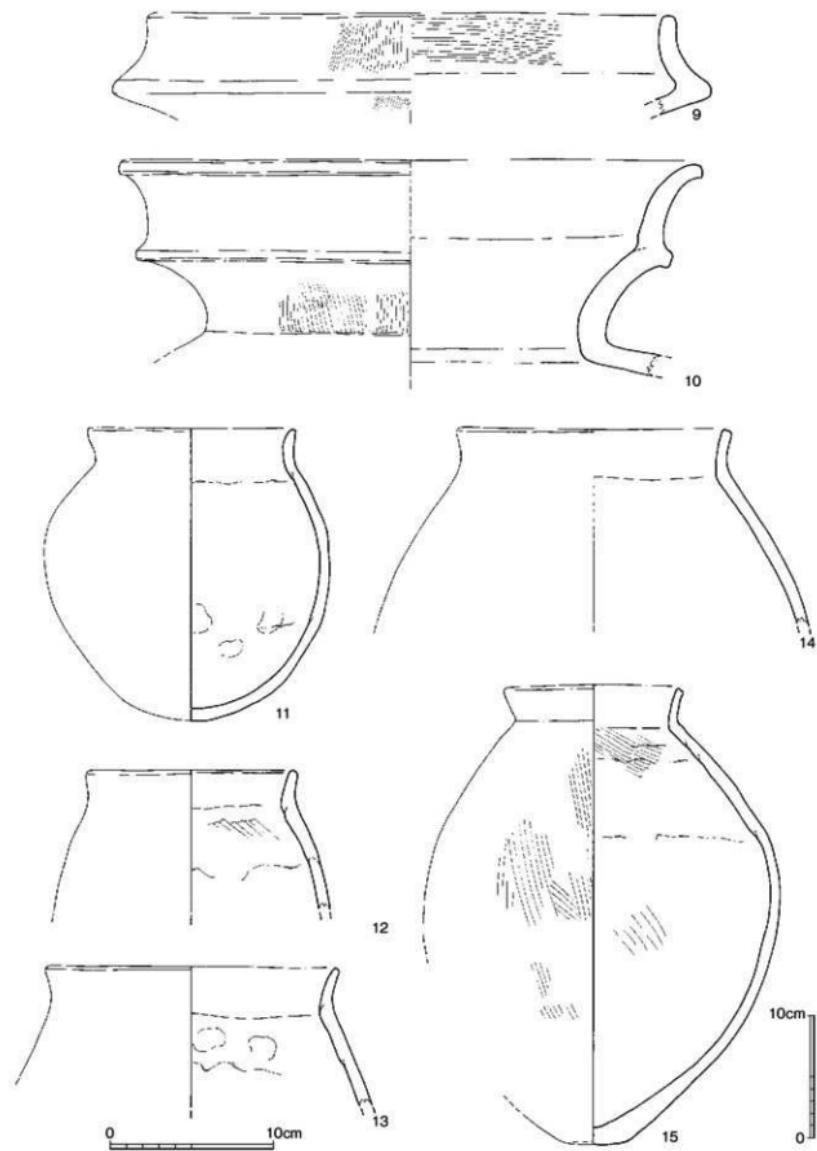
46~48はく字形に外反する口縁部をもち、撫で肩・長胴となる壺。46は体部下端付近の外面に箆削り痕が見え、内面は工具幅を示す弱い線が見えるが砂粒の移動ではなく、弱い刷毛目で仕上げたようである。47も器表が荒れているが体部外面は縦位の刷毛目のようなである。48は平底となり、口縁部・体部は接合しないが図上復元した。体部外面の調整は先の2点と同様である。

49は内面上端が一定の平坦面をもたないことから蓋としておく。胎土は良好といつてよい。50・51は壺底部で、いずれも底部外面から側縁にかけて赤変する。52は底部外面に叩き痕が残る平底の完周する底部。53はレンズ状に小さく膨らむ底部片で、内面は箆磨きのようである。54は赤変する平底の底部で、体部が急角度で立ち上がる。55・56も平底の底部で、55は体部外面下端に弱い刷毛目の痕跡が見える。57はレンズ状となる完周する底部で、体部下端付近以上が真っ赤となり、器表が大きく弾けている。58もレンズ状に膨らむ底部で、内面は丁寧に仕上げられる。59・60は尖り気味の丸底となる底部、61は尖底状の底部で、外面全体が赤変する。62は偏球形の体部片。

63は脚付の壺か。外面は概ね灰色、内面は黒色となり器表の残りがよい。64・65は手捏ねのミニチュアで、64は胎土良好で器壁が薄い。65も胎土精良といつてよい。66は砲弾形の深鉢で、口端部を欠く。胎土は良好といつてよく、内外面の工具痕は刷毛目の痕跡であろう。67は最大径部が屈曲する巾着状の土器で、外面は灰黄色、内面は暗灰色となる。調整痕は内底面付近の指撫での他は不明である。68は薄手の椀小片。69は70のような浅い鉢を想定している。70は頸部以下の3/4が残存するが、器表が荒れて調整痕は見えない。71は高杯口縁部の小片で、口端部に外傾する面をもつ。72は同一個体と思われる2点、脚部透孔付近で図上復元したものである。73は口縁部が強く小さく内縫するタイプの高杯小片。74は器台あるいは支脚の脚部で、脚裾外面が赤変する。75は抉入りの器台で、抉りを正面に配置した場合の前面、抉りの下位が全体に赤変、背面には変色が見られない。また、抉りの反対側の内面下半が黒変する。



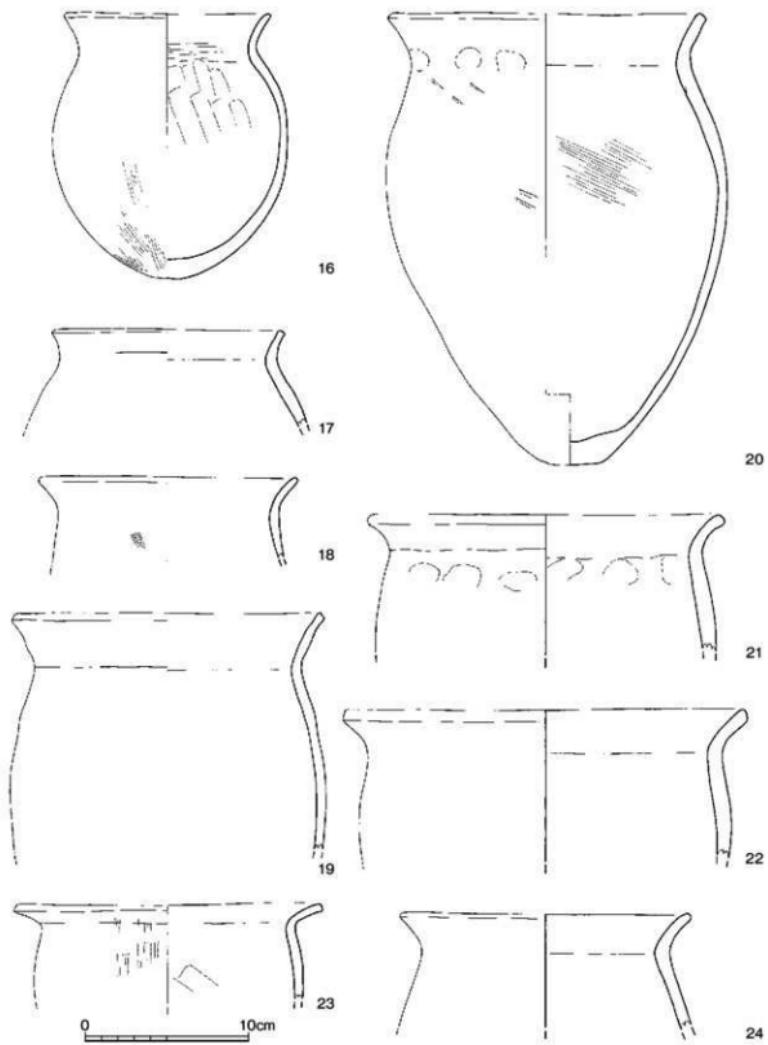
第138図 1号溝7区上層出土土器実測図1 (6は1/4、他は1/3)



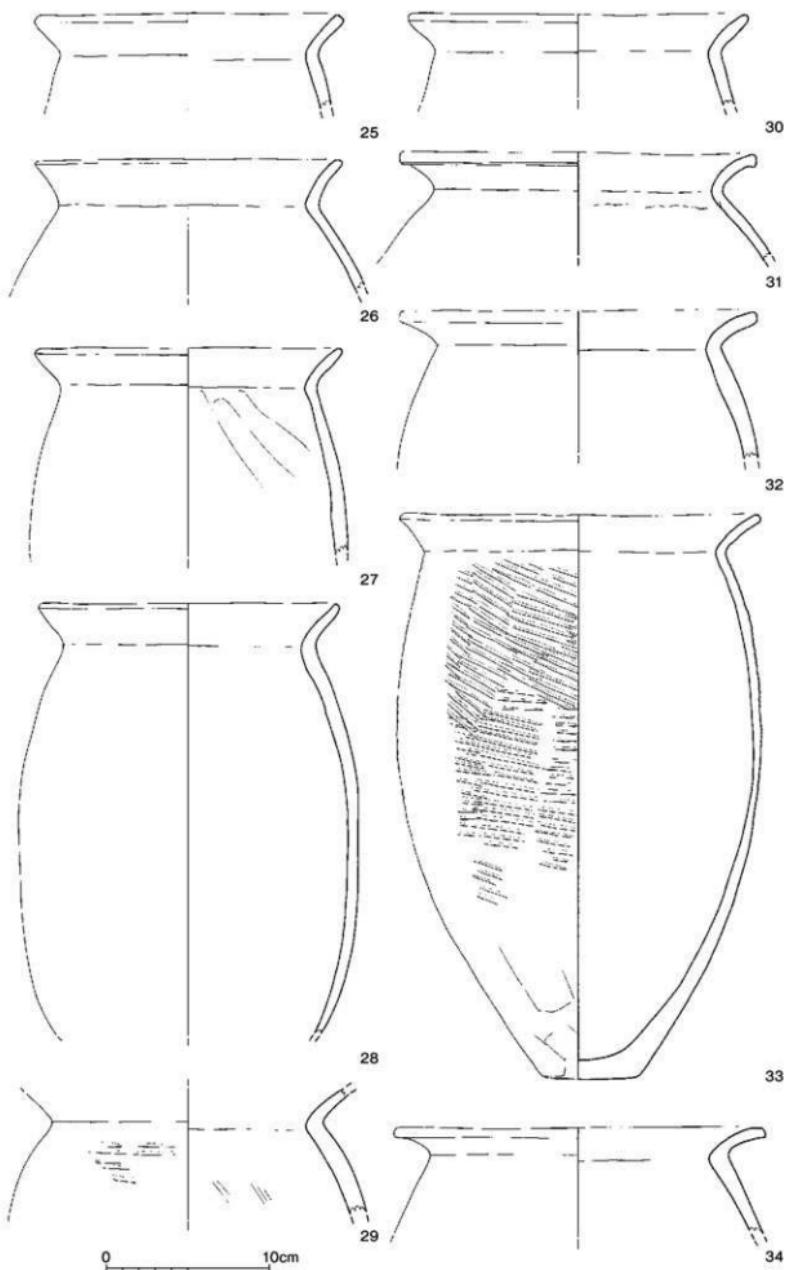
第139図 1号溝7区上層出土土器実測図2 (15は1/4、他は1/3)

石製品（図版61、第149図9） 暗灰色粘板岩製石庖丁片で、身の厚さは5mmほどで薄い。研磨は丁寧になされるが、なお及ばない部分がある。刃は鋭く、弱く鏽も見える。孔のごく一部が残存していて、片面穿孔のようである。

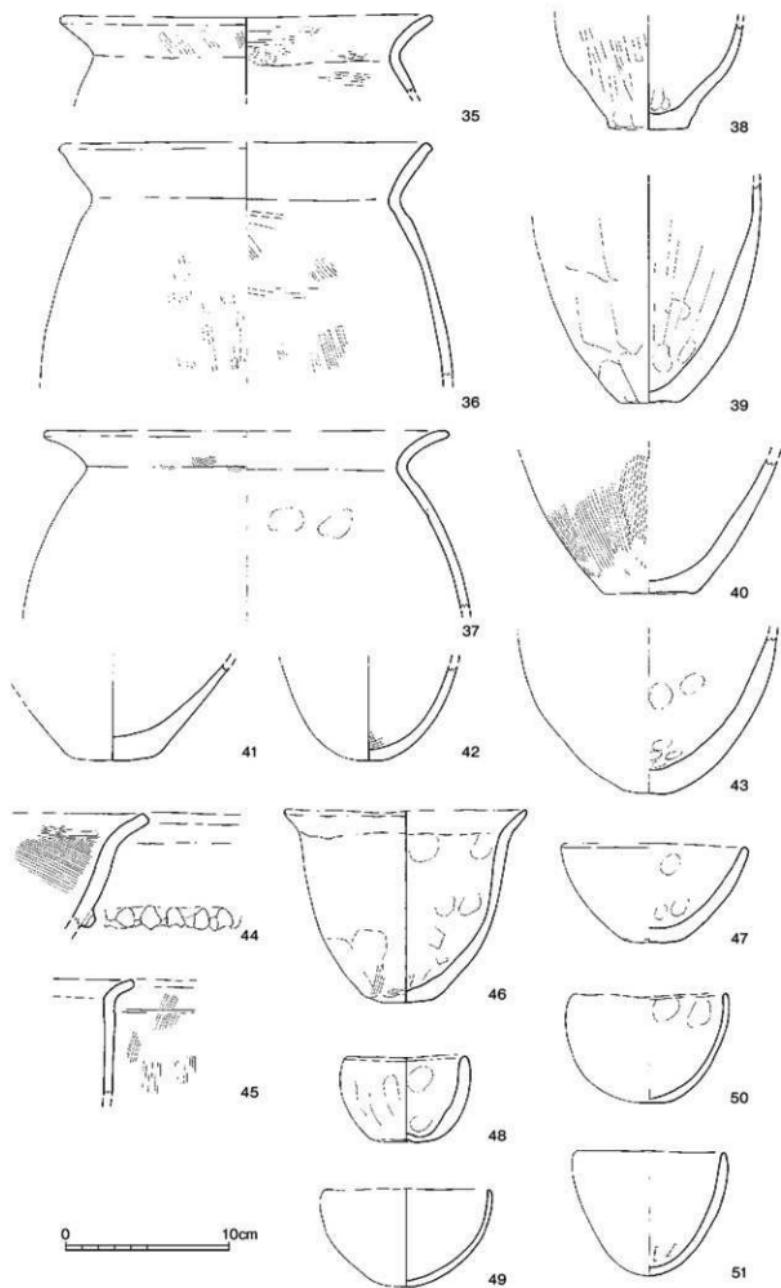
土器（図版58、第137図） 1は短く外傾する口縁部が完周する壺で、頸部下端に断面三角突帯を巡らせる。体部内面の調整法ははっきりしない。2は口縁部が長く外傾内彎する特異な土器で、頸部に刷毛目原体を用いた刻みを付す突帯を巡らせる。口縁部内外面、体部内面を刷毛目で仕上げ



第140図 1号溝7区上層出土土器実測図3 (1/3)



第141図 1号溝7区上層出土土器実測図4 (1/3)



第142図 1号溝7区上層出土土器実測図5 (1/3)

る。なお、小片のため復元口径には不安がある。3は頸部が瘤状に突出し、口縁部が直立する二重口縁壺変で、図示部はほぼ完周。4は口縁部を欠く二重口縁壺片で、頸部に刻みを、頸部にX字形の刻みを付す突帯を巡らせる。外面は赤味をもって焼き上がり、内面は灰黒色となる。

5は緩く外反外彎する口縁部をもち、体部外面は範磨きで仕上げるように見える。同内面は撫であろう。体部が赤変する。壺とすべきであろうか。6～8は壺の口縁部小片。

9は底部がわずかに膨らむもので外面は弱い刷毛目のようにある。10は平底の底部。11は尖底気味の底部で、図示部が完周。内面底部に圧痕が見えるが、指頭というより棒状の工具で押圧したようである。

7区上層

鉄製品（図版60、第98図2） 鉄鎌片である。茎の先端と鎌身の大部分を欠く。

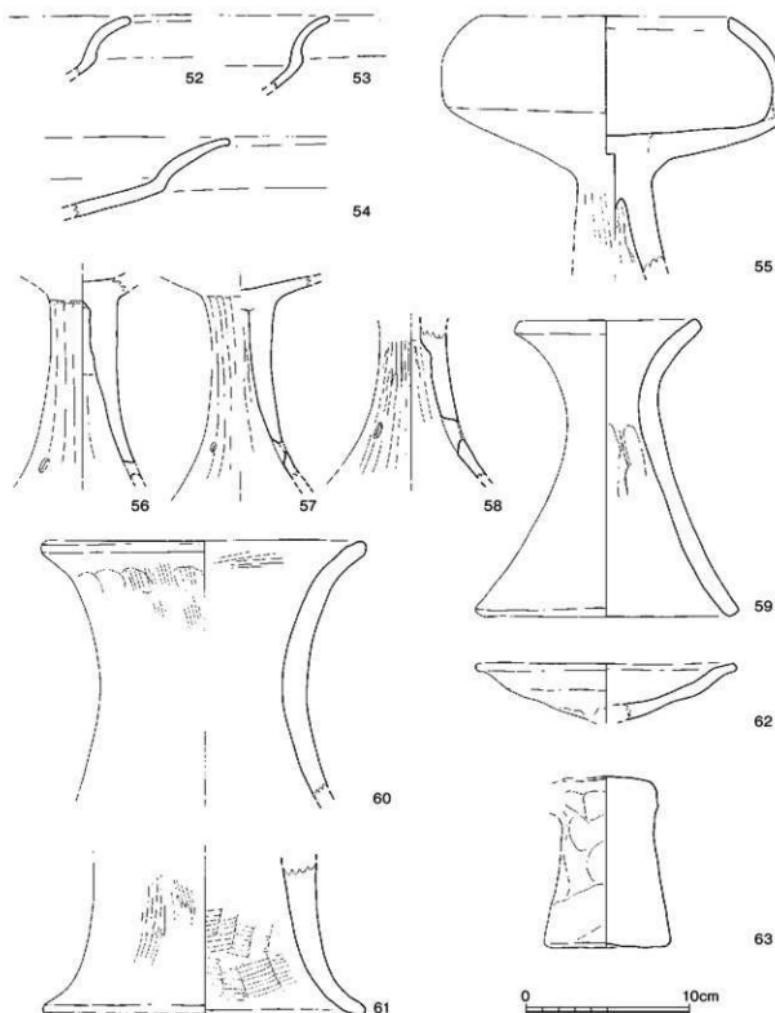
石製品（図版61、第149図1、第150図18、第151図24～26） 第149図1は姫島産黒曜石の剥片を使用して、図右の縁辺に両面から小さな剥離を加えて刃部とする。第150図18は安山岩で、図示した面が滑らかという表現以上につるつるとしていてかつ中央部がわずかに凹面となる。砥石として使用されたようである。また、図上端部は叩き石として使用したようである。第151図24は大型の砥石で部分的に真っ赤となる。図示した面では右半分がよく使用されるが、左半分はほとんど擦る用途には供されていない。右側面及び図背面が最も使用されていて、左側面も滑らかではあるがそれほど使用されていない感がある。25はやはり明瞭な使用痕を看取できないが全体に滑らかとなる安山岩の大型石材。26は「7区下層」の注記があるが、土器にはそのような取り上げが見られないことから、誤記の可能性があるとしてここで紹介する。他の安山岩と異なって中央部が凹むものであるが、やはり明瞭な使用痕は認められない。

土器（図版58・59、第138～143図） 1は頸部が直立、口縁部が水平に近く外反する東部瀬戸内系の壺。胎土精良で搬入された土器であろう。頸部内面の器表が弾けている。2は第137図2と同一個体であろう。3～6は球形に近い体部に短く外反する口縁部を付すもので、口縁部の形態にはそれぞれ小さな差異がある。3は口縁部が直線的に伸びて端部に面をもつ。4は頸部がC字形に外彎する。体部外面は黒斑部で微妙に刷毛目が観察でき、内面では工具の幅が見える。刷毛目の痕跡であろう。5は口縁部の外反が弱く、口端部付近をさらに小さく屈曲させる。体部が部分的に赤変する。6も口縁部の外反が弱く、これは体部内外面で刷毛目を確認できる。7・8は口縁部が直立する二重口縁壺である。9は口縁部が内傾する、10は外傾する二重口縁壺で、前者は第129図2と同一であろう。

11～14は口縁部が短く直立しないしわざかに外反する土器。11はほぼ完存するが、器表が荒れて調整痕は余り見えない。雑な作りといえる。12は被熱したように見えず、体部内面に微妙に刷毛目が観察できる。13は小片のため、復元口径や頸きに若干不安がある。14は器表が荒れる。15は頸部の屈曲がしっかりとしているが、14に近い形態である。同一個体と思われるほぼ平底の底部がある。16～22も先の土器に似て口頸部が緩く外彎外反して明瞭な屈曲をもたない土器である。16は壺と呼んでもよいような形態で、ほぼ完存する。体部内外面は主として刷毛目を用いて仕上げる。17・18は小片のため、復元口径や頸きに不安がある。19は口縁部が長くなる。20は体部下半が完周、上半部も多くが残存する。全体に赤変するが、特に底部付近が甚だしく変色する。それとともに器表も荒れているが、体部上半に微妙に叩き痕が見える。21・22も小片である。

23以下は口頸部が明瞭に屈曲するものである。23は一見弥生前期の如意形口縁壺を思わせる

が、口端部に面をもつことや、内面の刷毛目の痕跡、そして胎土の所見など積極的に如意形口縁甕とすることに躊躇を覚える。26は体部外面が赤変、27は口端部付近の内面から体部外面にかけて黒変、内面は赤変する。28は頸部の1/3が残存するが、やはり器表が荒れて調整痕は不明。29は口端部を欠く。体部外面に叩き痕が微かに見え、内面には刷毛目が確認できる。30は小片。31は口縁部の外反が強く、端部に面をもつ。32は31に比べて肉厚となる。33は平底となる底部付近が



第143図 1号溝7区上層出土土器実測図6 (1/3)

完周、それ以上の1/2ほどが残存する。これも器表が荒れるが、外面に広く叩き痕が見える。体部下端では叩き痕を箆削りで消すようである。35は全体に赤変、36は体部内外面に刷毛目が見える。37は小片である。

38は外面に疎らな刷毛目を残す平底の底部。39は体部下端付近が肉厚となり、その部分の器表が弾けている。外面は刷毛目、内面は丁寧に指撫で仕上げるようである。41も平底であるが、これは外縁が丸みをもつ。42・43は丸底の底部でいざれも図示した付近が完周する。

44は頸部からかなり下がった部分に突帯を巡らせるが、突帯には棒状の工具を押しつけたような刻みが付される。45は如意形口縁、頸部下に1条の箆描沈線を巡らせる弥生時代前期的な壺の小片。

46は底部がわずかに膨らむ平底傾向の鉢で、頸部以下がほぼ完存する。器表が荒れているが、内外面で刷毛目が観察できる。47はやはり平底傾向の小型鉢で、器肉が厚い。いわゆる手捏土器ではない。48は口縁部の一部を欠くほかは完存する円筒形に近い鉢。これも肉厚となり、器表が剥落する。49は薄手の鉢で、これは口端部のほとんどを欠くためにその形状に不安がある。丁寧に作られた感がある。50も薄手の丸底鉢で、これも口端部の形状に不安がある。胎土精良といつてよく、外面の一部に皺が残るが全体によく平滑化されている。51は尖底気味となる小型鉢で、これも皺は見えない。

53～55は高杯小片。53・54は口縁部が短く高く立ち上がるのに対し、55は浅く長く開く。55は杯部が椀形となるものであるが、内彎する部分が大きい。杯底面は黒色となり、口端部付近が焼け焦げたようにならんでいる。56～58は脚部片。57・58は円孔の断面形状が内側へ向かって大きくなり、面が荒れているように見える。焼成後に穿孔したものであろうか。

59はくびれが上位に位置する器台で、脚裾外面が真っ赤に変色する。60はくびれの弱い器台で、天地は不明。61は器台の脚裾であろう。62は小型器台の受け部であろうか。ただし、作りは粗雑である。63は頂部の一端を突出させる支脚で、突出部は失われている。中実で、胎土は粗い。

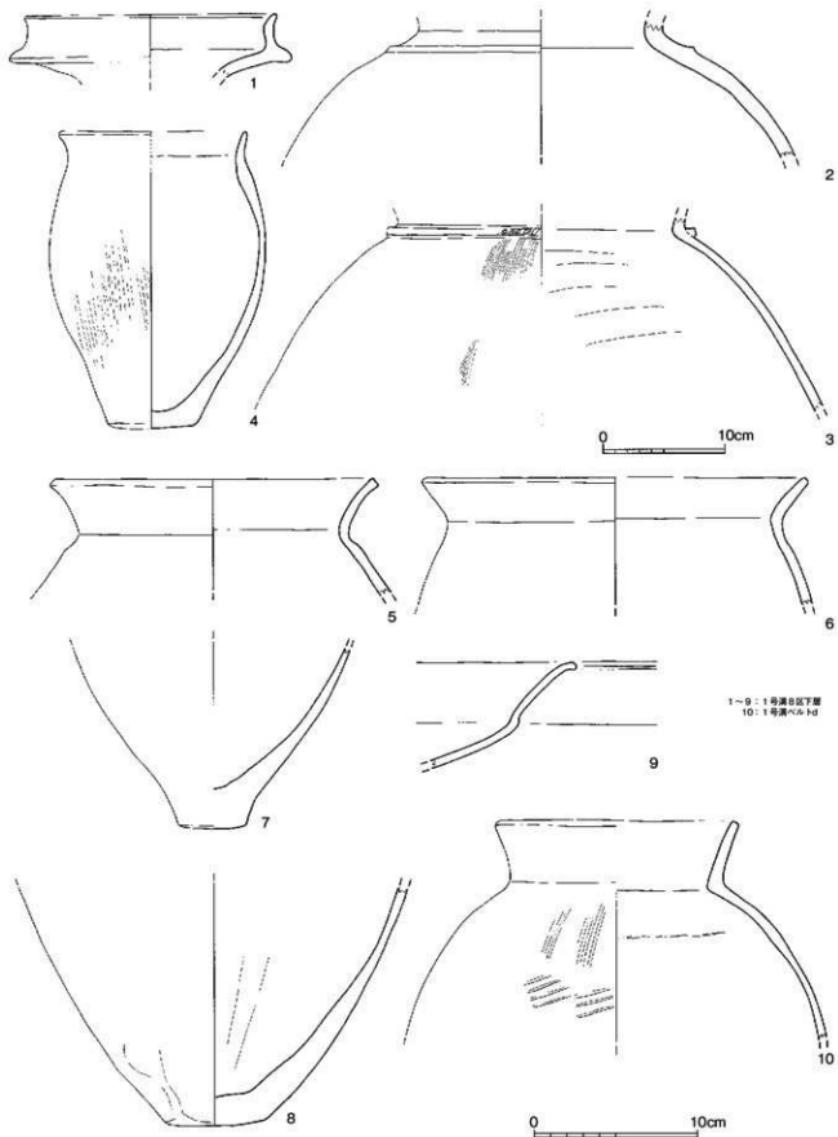
8区下層

土器（図版59、第144図1～9） 1は二重口縁壺片であろう。口縁部の1/2ほどが残存する。2は肩部に低い断面三角突帯を巡らせる体部片。3は頸部に断面方形に近い突帯を巡らせて、その頂部に箆状工具を用いて刻みを付す。内外面ともに弱い刷毛目で仕上げるようである。

4は全体がわかる壺で、口縁部はほぼ直立、体部の張りが弱く、平底の底部をもつ。5はく字形に外反外彎する口縁部で、端部に面をもつ。6も似た器形であるが、端部は丸く終わる。7は底部がわずかに膨らんでいて、底部外面及び側面が真っ赤となる。8も小さく膨らみ気味の底部で、全体に被熱赤変していて、体部下端には大きく弾けた部分がある。内面は刷毛目の痕跡であろう。9は高杯小片で、口端部がさらに外反する。

その他

土器（第144図10） 「dベルト下層」出土の壺片。口縁部はく字形に外反、直線的に短く伸びる。体部は張りが強く、外面には叩き痕・刷毛目が見えるが内面の調整は不明。ただ、頸部内面の稜がしっかりしているので、箆削りを用いた可能性がある。



第144図 1号溝8区下層他出土土器実測図（3は1/4、他は1/3）

(6) その他の遺構と遺物

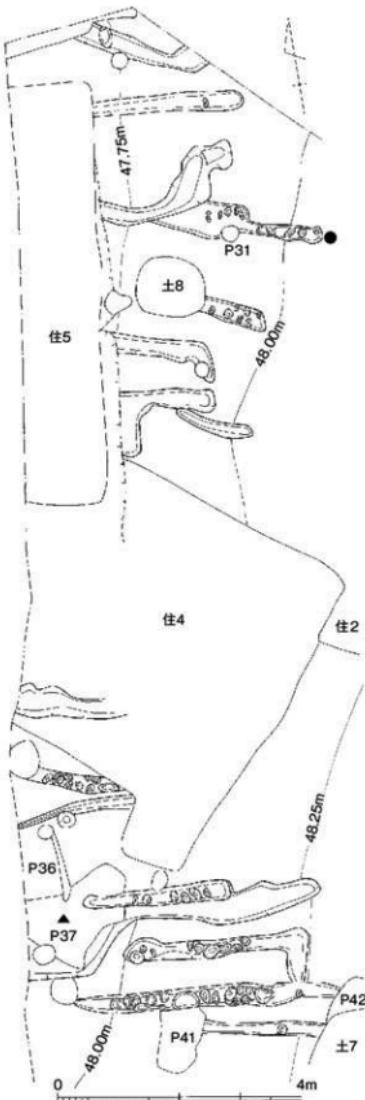
調査では、上記の主要な遺構のほかに、ピットや包含層などの遺構を検出し、これらからも遺物が出土した。最後に、これらについて触れたい。

小溝群（図版34、第145図）

I区の北西部で検出した。幅0.2~0.4mほど、深さ0.1m以下の溝群が、0.5~1.5mほどの間隔を開けて東西方向に並行しつつのびる。最も長いもので4.3mほどの延長を持つものが認められる。付近は西に下がる緩斜面で、溝底レベルは傾斜に沿って西に下がる。4・5号住居跡、8号土坑と切り合い関係を持ち、その全てに先行する。溝底には直径0.05~0.2m程度の浅い穴が左右交互に開けられており、多いものは小溝の底面全域に広がる。溝の分布は北側の5号住居跡東と南側の2号住居跡南の2箇所に大きなまとまりを見せ、相互の間隔は5mほど開くが、この間隔の開いた位置には4号住居跡があって付近を大きく破壊しており、本来は連続していた可能性もある。北側の群は溝間の距離が広く1.2~1.5mほどを測るのに対し、南側の群は0.5~0.6mと狭い。並行小溝同士での切り合い関係を持つものもあり、全てが同時併存というわけではない。

調査担当者はこれらの溝群について、畑の歯跡ではないかと想定しているが、付近、特に西寄りは削平をかなり深く受けているところで、2号住居跡の壁などは最大でも数cmほどしか残されておらず、少なくとも0.5m程度は削平を受けていると考えられることから、この溝も本来の深さは0.5m以上あり、本来の遺構面における幅は0.5~0.6m程度はあった可能性が高い。当然、溝間の距離も上記よりはかなり狭くなるはずである。畑の歯跡がこれほどまでに狭い間隔で深く掘られるものであるのか、疑問である。ただし、畑の歯跡遺構ではないとすると、ほかにどのような性格を想定すればいいのか、報告者にも思いつかない。

いくつかの小溝から土器片が数点出土してい



第145図 小溝群実測図 (1/80)

る。いずれも小片で、時期等を判断できるものは口縁部を逆L字形とする城ノ越式の甕小片だけである（図で●を付した遺構からの出土）。また、▲を付した遺構から出土した土器片中に弥生前期的な壺肩部片があり、これらを大きく評価すれば小溝群は中期初めの遺構である可能性が考えられる。ただいずれも小片であり、帰属時期については評価を控えておく。

P57（第146図）

II区の北端部で検出したPit57は、内部に多くの土器が詰まっていた。

出土状況を記録しており、詳述しておきたい。付近には上述のII区西部包含層が堆積しており、この包含層を人力で下げていったところ、ピットの輪郭が見えない段階から多量の土器が集中する状況が認められた。このため、土器ができるだけ原位置に残しながら包含層の掘り下げを行ったところ、地山が露出した段階でようやくピットの輪郭が現れたが、多量の土器は全てこのピットの輪郭線の内部に収まることが明らかとなった。このため、おそらくこのピットの本来の掘削面は包含層より上位にあり、埋土が類似していたために包含層の上層では遺構の認識ができなかったものと考えるに至った。残された深さは0.1m程度だが、本来は0.3m以上の深さがあったものと考えられる。底部には一段低い箇所が認められたが、土器はその内部にまでは入っていない。

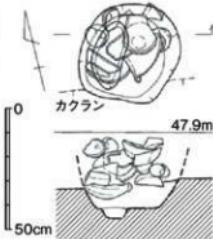
出土遺物

土器（図版59・60、第147図1～12） 1は口縁部が短く直立外彎する短頸壺と呼ぶべき形の土器で、張りの強い体部をもつ。全体に赤変し、器表が荒れる。2は平底、張りの弱い体部から緩く外傾外彎する口縁部へ続く甕で、体部以下の大半が残存する。口縁部はごく一部が残存するのみで、端部の形状に不安がある。3は口縁部がC字形に強く外反外彎し、体部の張りが大きい土器。全体に赤変し、体部内外面に微かに刷毛目が見える。4は口縁部がく字形に外反する土器で、これも微かに刷毛目が見える。5は底部外周が突出して小さな上げ底となる底部で、器表が荒れるが内面に指痕が目立つ。6も上げ底になるようである。体部内面上半には丁寧な施削りが観察できるが、下半の調整痕は見えない。7・8は平底の底部から体部が急角度で立ち上がる。7は赤変する。8は体部下端外面に叩き痕が見え、内面上半には刷毛目が良好に残存、下半は判然としないが砂粒の一部が動いているようで、施削りあるいは刷毛目であろう。9が小さな脚台が付く土器で、体部は張るが、頸部の縮まりが弱い。10は平底から緩く内彎して立ち上がる体部・口縁部をもつ鉢で、胎土良好で丁寧に作られている。11は上げ底となる手捏ねの鉢で、外面に無数の皺が残るが、内面は丁寧に仕上げている。また、底部付近の仕上げも丁寧である。12はわずかに膨らみ気味の底部をもつ鉢で完存する。口端部内外面及び体部外面下半が黄褐色、その間及び体部内面の大部分が灰黒色となる。

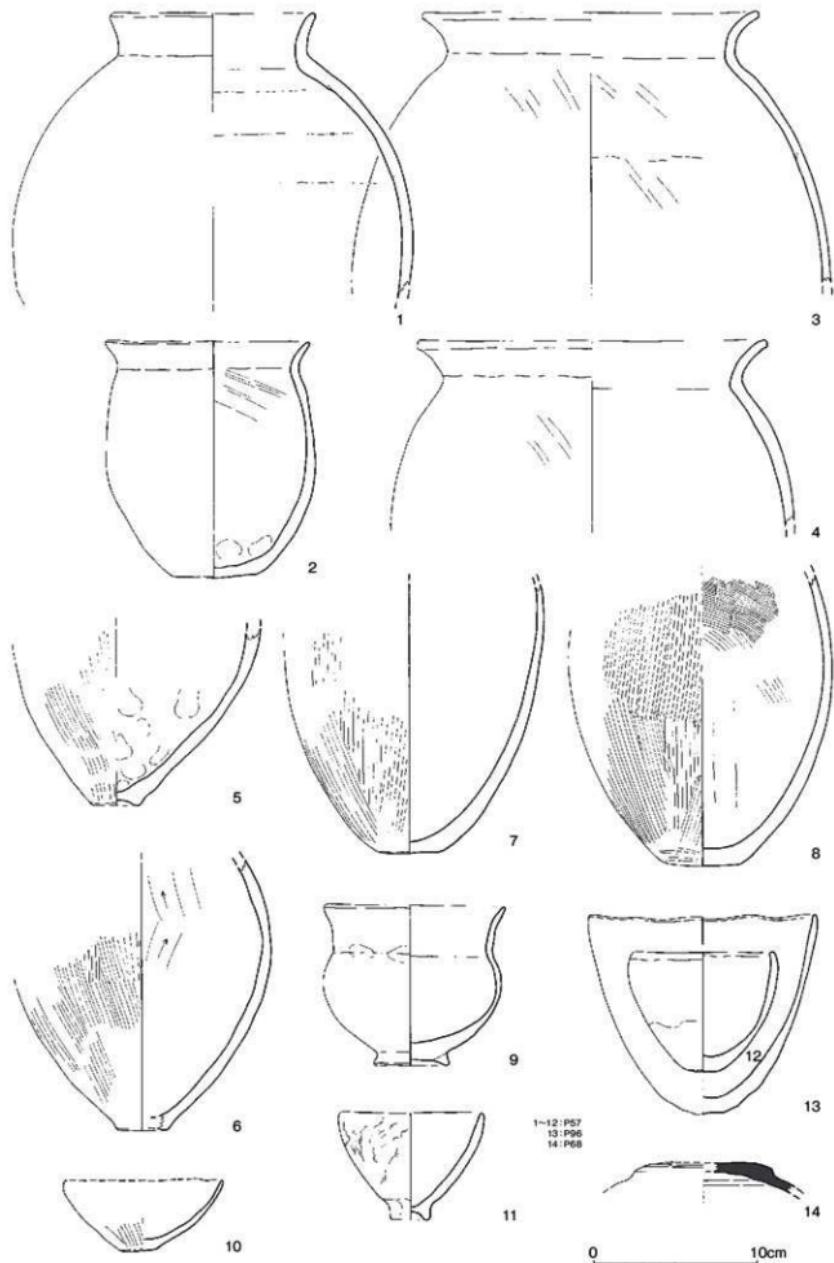
その他のピット出土遺物

調査区内からは、上記以外にも数多くのピットが出土した。これらのうち、ほかのピットなどと組み合わざって大きな遺構を形成しなかったものも多い。ここでは、そうした単独のピットから出土した遺物について報告していく。

P37（図版61、第149図12） 4号住居跡の南西辺に接して位置する柱穴。立岩産の石庵丁で



第146図 P57実測図
(1/20)



第147図 柱穴等出土土器実測図 (1/3)

両端を欠くがほぼ完存する。表裏ともに研磨が及ばない部分が多く、粗雑な作りといえようが、それでも背は全体に丸味をもって研磨し、刃部は鎌をもって鋭く作り出している。図示した面では孔の周辺が剥離していて、特に左側の孔の周辺が厚く剥がれ、残存する厚みは孔上端で1mmに満たないほどである。両面から穿孔がなされている。想像を逞しくすれば、左側の大きな孔を開けるに際して破損・剥離したものであろう。そのために、右側の孔は細心の注意を払い、小さくしたものと思われる。

P96 (第147図13) 11号土坑の南西、1号溝との間にある柱穴。周囲に搅乱が多く他の遺構との関係は不明。土器は粗雑な作りの鉢で、口縁部は不整、外底面の一部が弾けて剥落している。全体に赤変し、器表が荒れている。

P68 (第147図14) 11号住居跡内で検出した5基の柱穴のうち、中央に位置するものである。位置から見て直接建物跡に伴うものとは判断できない。14は作りの雑な須恵器小片。

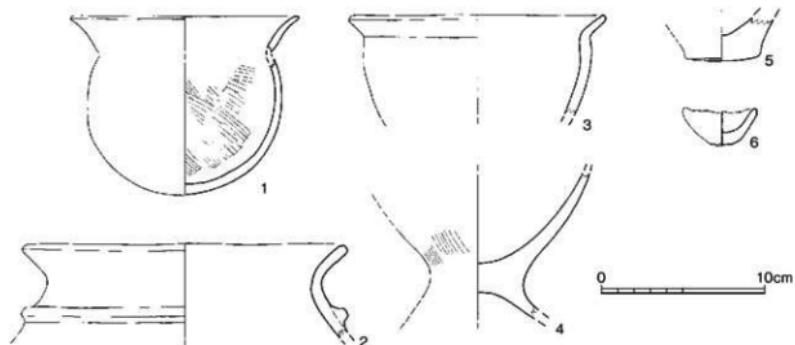
II区西側包含層（第148図）

II区の西側半分ほどに堆積していた弥生時代後期の包含層である。検出した広さは南北12m×東西8mほどである。6号住居跡と6号建物跡がこの包含層を切り込んでいることから、これらよりも古い形成であることは確実である。6号住居跡の西壁より約1m東側より堆積が始まり、西に行くにつれて層が厚くなって、最西端部では厚さ35cmほどを測る。堆積土は黒褐色の粘質土で、固く締まっていた。

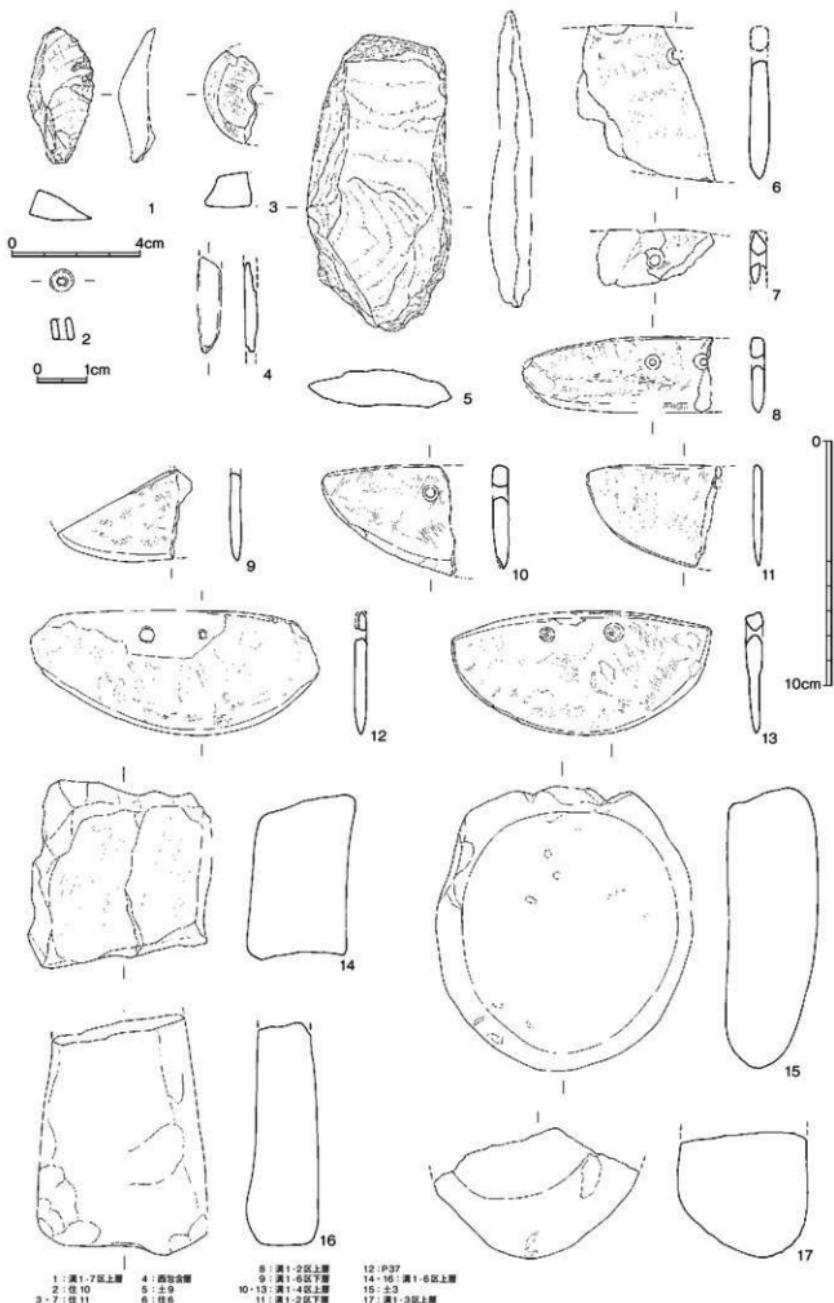
出土遺物

石製品（図版61、第149図5） 灰黄色頁岩製の小型柱状片刃石斧である。刃部が一部欠けるほか、図背面は全体に剥離しているように思えるが、擦っているように見え判然としない。現状の厚さ5mmでこのまままで使用に耐えるものか疑問である。

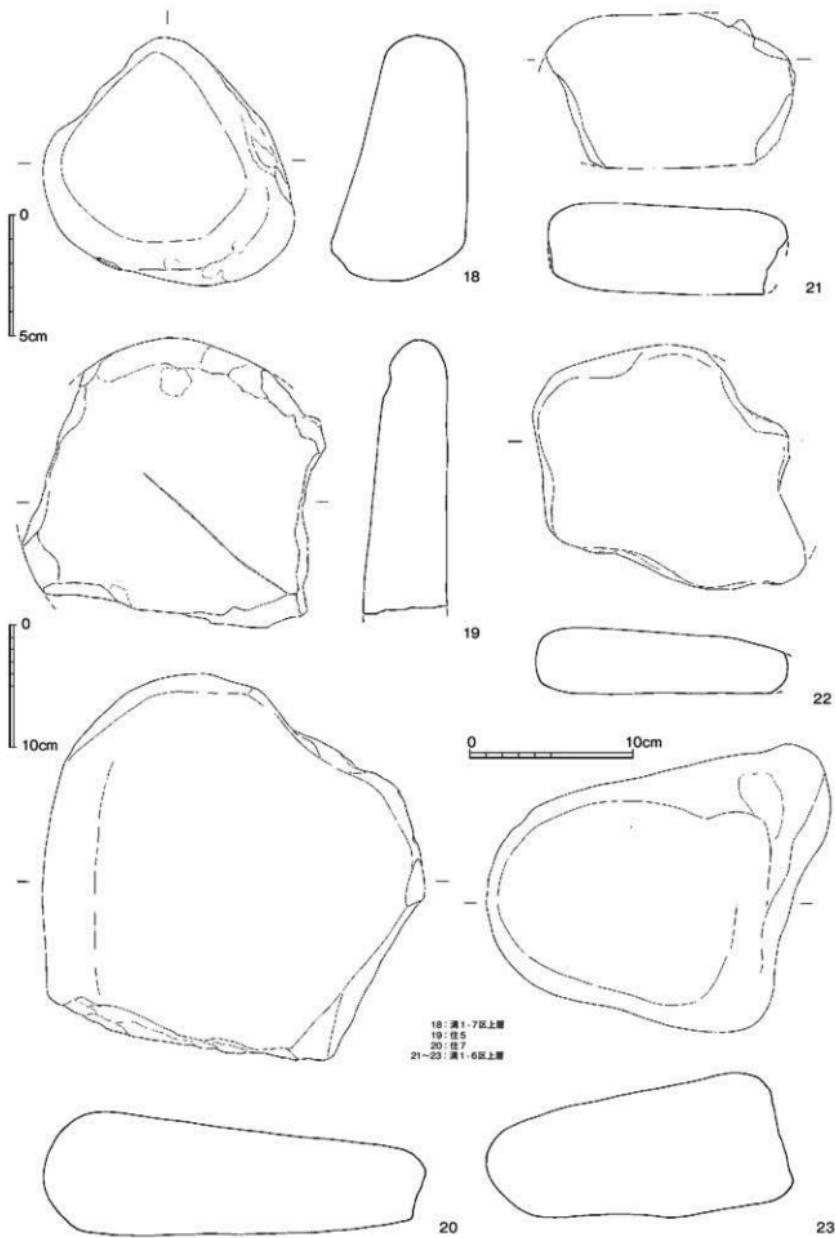
土器（第148図） 1は球形の体部と口縁部が接合しえないが同一個体であろう。胎土は比較的良好であるが器表が荒れる。2は頸部下に断面方形に近い突帯を巡らせる土器の小片。3も壺小片。4は脚付の土器である。5は平底となる底部。7は手捏ねミニチュア土器で、形状不整である。



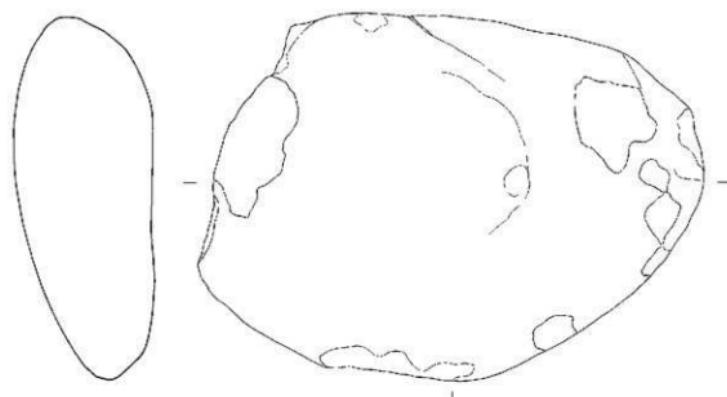
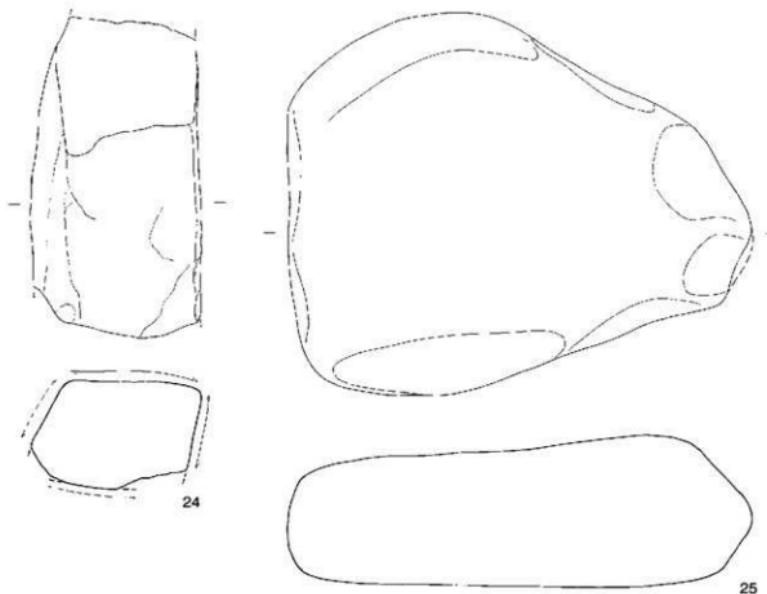
第148図 西側包含層出土土器実測図 (1/3)



第149図 大西遺跡出土石製品実測図1 (1は2/3、2は1/1、他は1/2)



第150図 大西遺跡出土石製品実測図2 (18は1/2、21~23は1/3.19・20は1/4)



24・25:溝1・7区上層
26:溝1・7区下層



26

第151図 大西遺跡出土石製品実測図3 (1/4)

V おわりに

以上が今回の調査の内容である。冒頭にも記したように、西ノ原遺跡・大西遺跡は現在の行政区（大字）が異なることから名称を分けているが、地形的にも内容的にも同一の遺跡、集落跡である。若干のまとめを行って終わりとする。なお、古墳時代後期の集落については隣接する塔田琵琶田遺跡の報告の中で触れられることになろう。

1 遺跡の変遷

この遺跡は、大きくみて弥生時代前期末～中期初頭、同後期後葉でも終末期に近い時期および古墳時代後期の3時期の集落からなる。出土した土器はほぼ上記の範囲に収まり、弥生前期中頃以前、古墳時代初めの布留式土器などといった上記時期以外の土器等の出土ではなく、短期間の盛衰を3度繰り返したようである。この西ノ原遺跡・大西遺跡の空白時期～古墳前期・中期～にも北東に隣接する塔田琵琶田遺跡は継続していて、両遺跡の関係は興味深い。

弥生時代前期末～中期初頭 円形堅穴住居跡6軒を想定でき、いわゆる袋状堅穴（貯蔵穴）20数基を確認した。住居跡は壁体を全て失っていてほぼ柱穴だけから想定したもので誤認や遺漏があることと思うが、柱穴が密集するといった状況ではないので大きな誤りはないであろう。円形住居跡は低丘陵の中央～尾根線付近に位置していて、袋状堅穴はどちらかと云うと東側斜面に多く営まれている。本来、当地の袋状堅穴は堅穴住居に比して遙かに深いものであることが多い。住居跡の壁体が失われていることから少なくとも0.5mほどは削平を受けているものと思われるが、それくらいの削平であれば通常の袋状堅穴であれば残存するはずである。したがって袋状堅穴の配置は本來的な在り方を見せているものと考えてよからう。集落の広がりがわからないが、袋状堅穴は集中的な在り方ではなく散在していることから、個別の住居跡に対応するものであろう。住居跡は三群に分かれ、そのうちの二群は重複するものであり、削平を考慮すれば少なくとも3軒以上が同時存在した可能性が考えられる。とはいっても、袋状堅穴は各時期の住居跡に伴うものであり、確認された6軒の住居跡に対して20数基の貯蔵穴では貯蔵穴が不足する感が否めない。まして、この遺跡の貯蔵穴は概して小型である。1×1間掘立柱建物跡のいくつかは該期に遡る可能性があろう。いずれにしても、遺構からみて集落の規模が小さく、存続期間が短かったことが推測される。

出土土器については如意形口縁をもつ、あるいは逆L字形となる口縁部をもつものがあって、弥生時代前期末から中期初頭の時期を示す。口縁部が大きく開く壺や、貝殻腹縁を用いた文様、無軸羽状文など、福岡県東部から山口県西部にかけての瀬戸内海西端地域に共通する内容である。ただ、全体に本遺跡出土の逆L字形口縁をもつ甕は口縁部に貼り付ける粘土帯が小さい。特に第43図1では口縁部上面は貼付部を含めて平坦とするものの側面や下位は丸味をもったままで終わり、朝鮮無文土器に見られる粘土帯土器に似た様相を見せる。単に粗雑な作りであるといえなくもないが、朝鮮無文土器に類似する土器は本遺跡の北方の行橋市周辺などでも少数出土していて初出のものではなく、本遺跡の南東1km程に位置する同時期の内容を含む鬼木四反田遺跡では玄界灘沿岸・佐賀平野以外ではきわめて珍しい朝鮮製小型仿製鏡・銅鑓なども出土している。彼地からの直接・間接の影響を全く排除することはできないであろう。

弥生時代後期 （長）方形の堅穴住居跡は多くが削平・掘削を受けていて遺存状況は必ずしも良



第152図 西ノ原道路・大西道路遺構変遷図 (1/600)

好ではないが、炉跡を伴う平面(長)方形の住居跡は弥生時代後期に属するものとしてよい。主柱穴は2本、4本のものがあり、屋内施設として出入口に伴うと考えられる屋内土坑が例外なく東辺あるいは東南辺に接して配置されている。また、ベッド状造構を伴うものも多い。

西ノ原遺跡では住居跡として番号を付した41軒の内(44軒の内、1・2・5号を除く)、上記の条件を確認できる造構は11軒である。環濠の内部に7軒(23・24・26・30・36・37・39号住居跡)、環濠の南外側に4軒(4・8・14・19号住居跡)を、大西遺跡では環濠内で1軒(1号住居跡)、環濠の西外側で6軒以上(3~7・14号住居跡、豊前市調査分2軒)を確認した。合わせると環濠内で8軒、環濠外で10軒以上となる。幾度か記したように調査対象地は大きく削平を受けていて、なおかつ環濠内で確認した住居跡はいずれも環濠に近い外縁部で検出したものであり、当然環濠内にはなお多数の住居跡などが存在したはずであるが、本来どの程度の住居跡が存在したものか推測は困難である。仮に、西ノ原遺跡調査南東部の7軒の住居跡の分布の在り方が標準的なものであるとすると、その占地面積は800m²ほどである。調査範囲で環濠は北西-南東軸で約136m、直角方向で60m以上の規模であることが確認されていて、調査範囲内で環濠内の面積は約7,800m²である。あえて単純化して調査地内の住居跡数を計算すると、

$$(7,800\text{m}^2 \div 800\text{m}^2) \times 7\text{軒} = 68.25\text{軒}$$

となる。

また、7軒の住居跡が2群に分かれてそれぞれに重複・近接することからそれを建て替えたと考えると、同時的には最大で2軒が並存した時期が考えられる。上記式の「7軒」を「2軒」に置き換えると総数は「19.5軒」となり、これは妥当な数字であるようにも思える。

1号(1×1間)・2号(1×2間)掘立柱建物跡は弥生後期の土器を出土したが、小片でありかつ良好な状態ではないため時期の確定は困難である。また、1×1間の掘立柱建物跡については、特に方形に近いものの中には削平されて壁体を失った堅穴住居跡である可能性も考えられる。ただ、明らかに長方形配置となる1×1間建物跡や1×2間以上の建物跡は掘立柱建物と認定してよいし、ほとんど全てで時期比定が困難であるとはいって、環濠西辺の内側に集中し、外側に若干が所在する。環濠内の建物跡は梁行長3~3.5m、桁行柱間距離2.5~5.0mを測り、一般に弥生時代の建物跡は柱間距離が長い傾向があることからこれら的一部は環濠に伴うと考えてよいのである。環濠外の5・6号建物跡はいずれも桁行の柱間距離が2m以下と小さく、環濠内の建物跡とは時期が異なり、これらは古墳時代後期に属するものであろう。ただ、環濠外にある2号建物跡は梁行長3m弱、桁行柱間距離2m強と両者の中間的な数字となる。

古墳時代後期 これも地形的に高位の部分では全く検出できず、弥生時代後期の造構が残存する下位の緩斜面で確認したのみである。この時期の住居跡は炉の欠如、カマドの設置と4本の主柱穴が標識となる。これを指標として見ると西ノ原遺跡では20軒、大西遺跡では5軒、合わせて25軒の概期の住居跡を確認できる。この中には、カマドそのものは不明ながら、西あるいは北に向いた辺の中央付近やや内側に被熱赤変したカマド火床の存在から推測したものも含んでいる。特に西ノ原遺跡の状況を見ると弥生時代後期の造構数の倍近い数字となり、これが全面に同様の分布をしていったとする場合には150軒近い住居跡が重複して営まれていたこととなる。

西ノ原遺跡11号住居跡出土土器の一部や第23図16に示した壺などは6世紀前半に遡る資料としてもよいが、残存状態が良好ではないために造構そのものの時期を引き上げることには躊躇を覚える。全体的には6世紀後半を中心とした短期間に営まれた集落といえよう。

2 弥生時代後期の環濠

環濠の規模 調査区内の環濠の略東西幅は最大で136m（内法）を測る。西辺は調査区中央付近の屈曲部が最も突出する部分と見てよいであろうが、東辺はさらに広がるようである。南北方向では、南辺から北へ約150mほどの地点で東側から県道近くまで入り込む略東西方向の大きな段があつて、この辺りまで続いている可能性が考えられる（第3図矢印部分）。その場合は、直径150mほどの円形に近い環濠集落であったこととなる。

環濠の残存規模は幅2m前後の部分が多く、西ノ原遺跡3次調査区東端で約3mと最も広くなっている。溝の断面形は逆台形で、溝底も広い平坦面となる部分が多い。溝底の標高は西ノ原遺跡で検出した陸橋部東で49.0m（深さ0.5m、以下同。）、3次調査区東端で47.5m（0.9m）、陸橋部西で49.8m（0.2m）、その西側の途切れる部分で50.36m（0.1m）である。また、豊前市教育委員会が調査を行った丘陵東裾のA区で検出した環濠と同一の遺構と思われる溝は最も低位の部分で土層観察を行っていて、その溝底の標高は46.4m（深さ0.3m）である。大西遺跡では南端で49.5m、中央付近の屈曲する地点で48.5m（0.4m）、その付近以北は深浅を繰り返し、北端で48.0（0.5m）である。大西遺跡（西辺）では地形に沿って南から北へ向かって溝底は低くなっている。西ノ原遺跡3次調査区の内、陸橋部以西はやはり本来の地形に沿って西側へ向かって高くなり、陸橋部以東も地形に沿って東へ向かって低くなる。つまり、溝底の標高はどの地点でも地形に従つていて最大4mの高低差を確認できることから、環濠の機能として湛水は全く考慮されていないと言える。ただ、南陸橋部西側の最高所に至るまでの間は自然排水する場所が無く湛水することとなるが、この点では尾根最高所を外して「陸橋部」を設置したことの意味が理解できない。

大西遺跡では巨視的に見て南から北へ向かって溝底は連続して低くなることから、雨水は北端に集中することとなり、排水のための何らかの工夫がなされているのであろう。他方、西ノ原遺跡では豊前市教委が調査した溝と陸橋東裾の溝底の比高差は最大で2.6mを測る。溝の北（東）端は未確認であるが市教委がB区とした地点は現在も市道に水路が付設されている小規模な谷底で、環濠はこの谷に向かって開いていた可能性が考えられる。北辺が掘削されていればその雨水もこの谷に放出されるようになっていたのであろう。この遺跡の「環濠」は湛水を考慮しない文字通り「環溝」と呼ぶべき性格を有していた。

また、深さに関しては先に壁体が失われた円形住居跡が存在することから0.5mほどの削平を受けているだろうと記したが、大西遺跡では壁体を失った円形住居跡の低位側となる西側30mの位置にある環濠の深さは0.5mほどである。仮に単純に0.5mを加えても1mに過ぎないし、高位が低位に比してより削平を受ける傾向があると考えるならばさらに浅いものとなる。行橋市の延永ヤヨミ園遺跡では弥生終末期の堅穴住居跡で1.2mの深さが残存する例があり、開墾等を考慮して本来は1.5mほどの深さを有したと推測されている。それを援用して漸く2mの深さとなる。西ノ原遺跡3次調査区の陸橋部東側では、やはり壁体を失った17号住居跡が近くにあることから、現状の深さは0.7mであるが、1.2~2.2mほどの深さであったと推測できる。

環濠出土の土器 両遺跡での環濠の埋土は非常に単純でかつ観察した土層11箇所ではほぼ同じ様相である。遺物は地山崩落土状の無遺物層を挟んで1・3層に集中していた。

出土した壺・甕類の底部に注目すれば大小の平底・尖底・丸底・折衷したものなど多様な形が混在している。甕は長胴の傾向が濃く、全体に外来系の要素は乏しい。

変化をつかみやすい高杯に注目してみよう。大西遺跡1号溝2区では上層・下層で各々比較的多

くの土器が出土したが、それぞれの高杯を比べると杯部は深さが若干異なるものの酷似している（第104図27、第111図53・54）。この時期の変化の方向性は杯部口縁部の開きが大きく、長くなり、屈曲部以下が浅く小さくなるのであるが、両遺跡の環濠から出土する高杯は大西遺跡1号溝2区のこのタイプがほとんどである。西ノ原遺跡1号溝5区3層18・19などは口縁部がさらに発達して後出的であるが、これも下層資料である。型式的に先行するものとして大西遺跡2区下層46・47があるが、変異はさほどでなく、量的にも少なく遺存状況も悪い。また、後出するものとして同遺跡3・9号住居跡の高杯などがある。大西遺跡1号溝2区上層・下層出土の高杯は弥生時代終末（北九州市小倉南区高島遺跡を標識とする高島式）に位置付けられるもので、高杯を通してみると、当遺跡の環濠から出土した土器群に明らかに先行する時期のものではなく、その出土状態から見ても環濠出土の土器群は少なくとも廃棄時は同時性をもっていたといえる。

環濠の埋没は出土土器によって弥生時代終末期（高島式）に位置付けられるが、その掘削の時期については手掛かりを欠く。まとまった弥生時代後期の土器を出土した遺構は西ノ原遺跡4号住居跡だけといってよい状況で、その一括廃棄された土器群の内容は環濠と同様である。西ノ原遺跡37号住居跡の平底やわずかに膨らみをもつレンズ状底、大西遺跡14号住居跡の小さな平底・わずかに膨らむレンズ状底などを従来の年代観に当てはめれば後期中頃まで遡る可能性があるが、環濠出土土器の内容を考えれば心許ない推測である。集落の終焉は口縁部が発達した高杯から見てその1、2型式のことであろう。

西ノ原・大西遺跡とその周辺 この西ノ原・大西遺跡の周辺でも、塔田堀畠田遺跡・鬼木四反田遺跡など弥生時代後期の集落を含む遺跡が調査されているが環濠を伴う集落はほかには見つかっていない。ただ、小石原泉遺跡では幅10~20mほどの自然流路が集落を区画していて、環濠の役割の一端を担っていたとも考えられる。

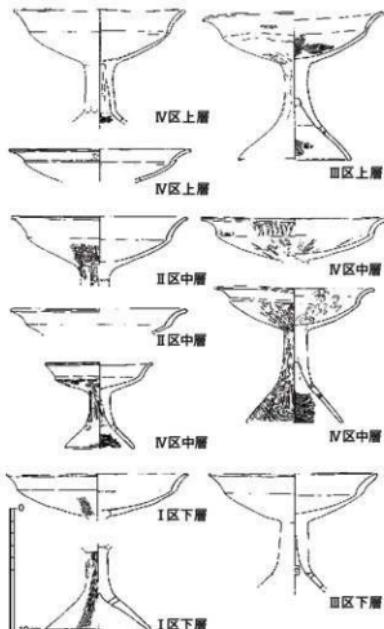
西ノ原・大西遺跡は遺跡中心部の削平によって多くの情報が失われているが、上記の遺跡との明らかな違いの一つは立地である。本遺跡は畠地あるいは宅地化された明瞭な低丘陵上に位置しており、その一画には明治3年に築城、同4年の廃藩置県に伴って廃城となった小倉新田藩の旭城とその城下が置かれたことからも窺えるように、地盤が安定し、災害に強い地勢と考えられていたのであろう。他の遺跡は微高地ではあっても現状で水田化された低平な場所に位置している。こうした立地条件と環濠を伴うという二重の要件で、集団内におけるこの集落の立ち位置を示しているのであろうが、残念ながら具体的な差異・格差は現段階では不明である。低丘陵の頂部に占地したことは逆に後世の破壊を最も深刻に受けることとなり、集落北半の調査が実現したとしても残存状況はさほど期待できないであろう。将来的にこれらの集落に伴う墓地が良好な状態で発見されることがあれば実相に迫ることができるかも知れない。

上毛町郷ヶ原遺跡との関係 1998年に報告された上毛町（旧大平村）郷ヶ原遺跡は京築地域で初めて発見された弥生後期の環濠集落である。その後、圃場整備事業に伴う周辺の調査によってこの遺跡が南北500m、東西700mほどの規模に復元できる大規模な環濠集落である可能性が高まっている。国道10号線バイパス建設に伴って調査された郷ヶ原遺跡を除いて詳細は未報告であるが、郷ヶ原遺跡との比較を試みてみよう。郷ヶ原遺跡の環濠（2号溝状遺構）は幅3.9~4.7m、溝底幅0.4m、深さ1.2~1.4mの規模であるが、現表土の標高を考慮して本来の深さは2mほどであったと考えられている。断面形状は上半部の勾配は緩やかであるが、下半では急角度で掘削されている。ここでは古い時期の断面逆台形の溝（5号溝状遺構）が確認されていて、出土土器から弥生後期前半に埋没したと考えられる。そして2号溝状遺構は弥生終末期に再掘削、一気に埋められたと想定さ

れている。そこから多くの土器が出土しているが、ここでは高杯を見てみよう。第153図に示しているが、西ノ原・大西両遺跡の環濠から出土する高杯と同一型式といつてよい。この土器が示す「弥生終末期」に当地で大きな社会変動があったのであろう。

環濠廃棄の意味 東九州自動車道建設に伴って調査した遺跡の中で行橋市延永ヤヨミ園遺跡は規模・内容ともに注目すべきものであった。集落の始まりはⅡ区30号住居跡やV区82・83号住居跡などから見て弥生後期中葉前後に開始されるようであるが、西ノ原遺跡等で問題とした型式の高杯はI区71号住居跡などで類似の形態が見られるものの出土例が乏しく、この時期までの住居跡はわずかである。住居跡が爆発的に増えるのは杯部口縁が大きく発達したより後出的な在地系高杯（杯部下半の形状

には浅い鉢形・椀形の二種がある）あるいは畿内系・瀬戸内系（庄内式～布留式相当）高杯が主力となる時期からである。福岡県糸島市三雲遺跡I-1地区1号住居跡では杯部口縁が杯部下半と同程度の長さとなり、かつ倍近い高さを有する在地系高杯が庄内式甕と併存することが畿内・北部九州の土器の併行関係を考える上で重要視されているが、そのことからすれば西ノ原・大西遺跡の環濠から出土した高杯はその直前の型式と言うことができる。2～3世紀に想定される「庄内式」が用いられた時代に列島内で土器の移動が広域化・活発化し、「大きな社会変動」が生じたと言われているが、その段階では北部九州においては多くの場合外来系土器は客体としての存在であった。「布留式」の時代には在地色がほぼ拭されて、列島各地で前方後円墳の構造が本格化するとされる。西ノ原遺跡の環濠は「大きな社会変動」のうねりの中で衰退し、その際に権威の象徴の一つであった素環頭大刀までも廃棄した。延永ヤヨミ園遺跡は海上交通の要衝としてそのうねりにのって大きく発展を遂げた遺跡といえる。



第153図 上毛町郷ヶ原遺跡2号溝状遺構出土高杯（1/8）

柳田康雄1982「三・四世紀の土器と鏡」『古文化論集』森貢次郎博士古記念論文集刊行会

武末純一・上田龍児2006「弥生土器の編年と地域間交流」『行橋市史 資料編 原始・古代』

福岡県教育委員会2014「延永ヤヨミ園遺跡II区2」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』11

延永ヤヨミ園遺跡は東九州自動車道、国道BP、県道BPに伴って調査され、2012～15年度にかけてそれぞれ4冊、4冊、2冊の報告書が刊行されている。

図 版

西ノ原遺跡



1 上空から調査地をのぞむ
(南東から)



2 上空から調査地をのぞむ
(南西から)



3 上空から調査地をのぞむ
(西から)



1 調査地上空から南を
のぞむ



2 調査地上空から東を
のぞむ

西ノ原遺跡



1 3・4次調査区全景
(合成、上が北)



2 3次調査区（上が北）



1 4号竪穴住居跡（南東から）



2 6号竪穴住居跡（南東から）



3 7号竪穴住居跡（南東から）

西ノ原遺跡



1 7号竪穴住居跡カマド
(南東から)



2 9~11・18号竪穴住居跡
(上が西)



3 10号竪穴住居跡カマド
(南東から)



1 11号竪穴住居跡カマド
(南東から)



2 14号竪穴住居跡
(南西から)



3 16号竪穴住居跡
(上が北)

西ノ原遺跡



1 16号竪穴住居跡
(南東から)



2 17号竪穴住居跡
(上が東)



3 18号竪穴住居跡
(東から)



1 20・21号竪穴住居跡
(南東から)



2 22~26・30号竪穴住居跡
(上が東)

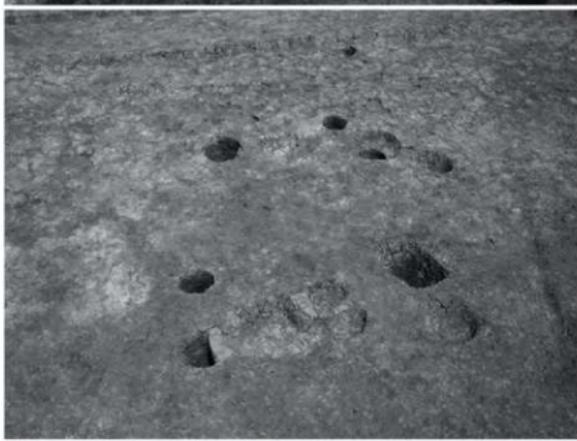


3 22号竪穴住居跡カマド
(南東から)

西ノ原遺跡



1 23・24号竪穴住居跡
(北東から)



2 27号竪穴住居跡
(南東から)



3 27号竪穴住居跡
(南東から)



1 29号竪穴住居跡
(南東から)



2 29号竪穴住居跡カマド
(南東から)



3 30号竪穴住居跡
(南西から)

西ノ原遺跡



1 31号竪穴住居跡
(南から)



2 31号竪穴住居跡カマド
(南東から)



3 32号竪穴住居跡
(北東から)



1 32号堅穴住居跡カマド
(北南から)



2 34号堅穴住居跡カマド
(北西から)



3 35号堅穴住居跡カマド
(南東から)

西ノ原遺跡



1 37号竪穴住居跡
(南東から)



2 1号土坑 (東から)



3 1号土坑土層 (北から)



1 2号土坑（南東から）



2 3号土坑（東から）

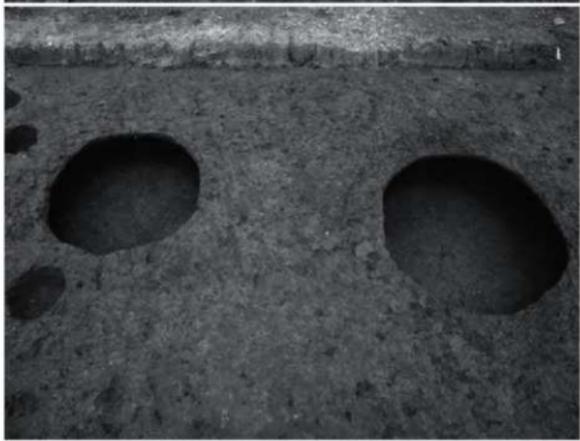


3 4号土坑（南西から）

西ノ原遺跡



1 5・6号土坑
(南東から)



2 7・8号土坑
(南西から)



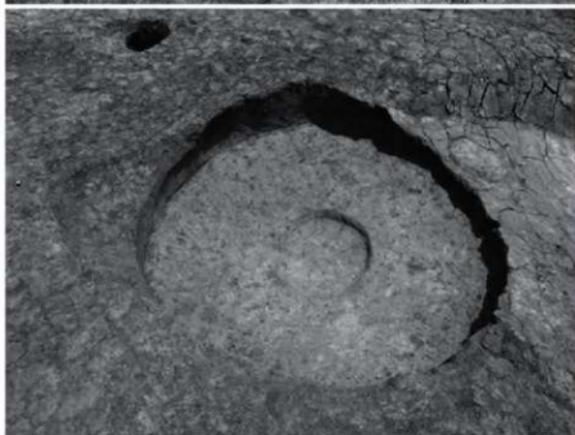
3 9号土坑 (南東から)



1 10号土坑（南東から）



2 11号土坑（南西から）



3 12号土坑（南西から）

西ノ原遺跡

1 13号土坑（南西から）



2 14号土坑（南東から）



3 15号土坑（南から）

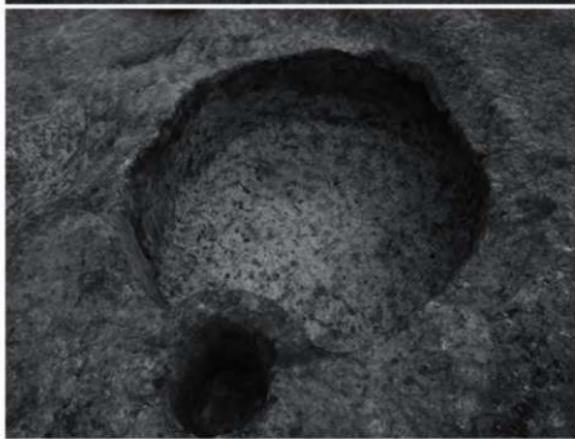




1 16号土坑（南から）



2 17号土坑（東から）



3 18号土坑（西から）

西ノ原遺跡



1 19号土坑（西から）



2 1号溝（環濠）上層遺物
出土状況（西から）



3 1号溝（環濠）土層
(北東から)



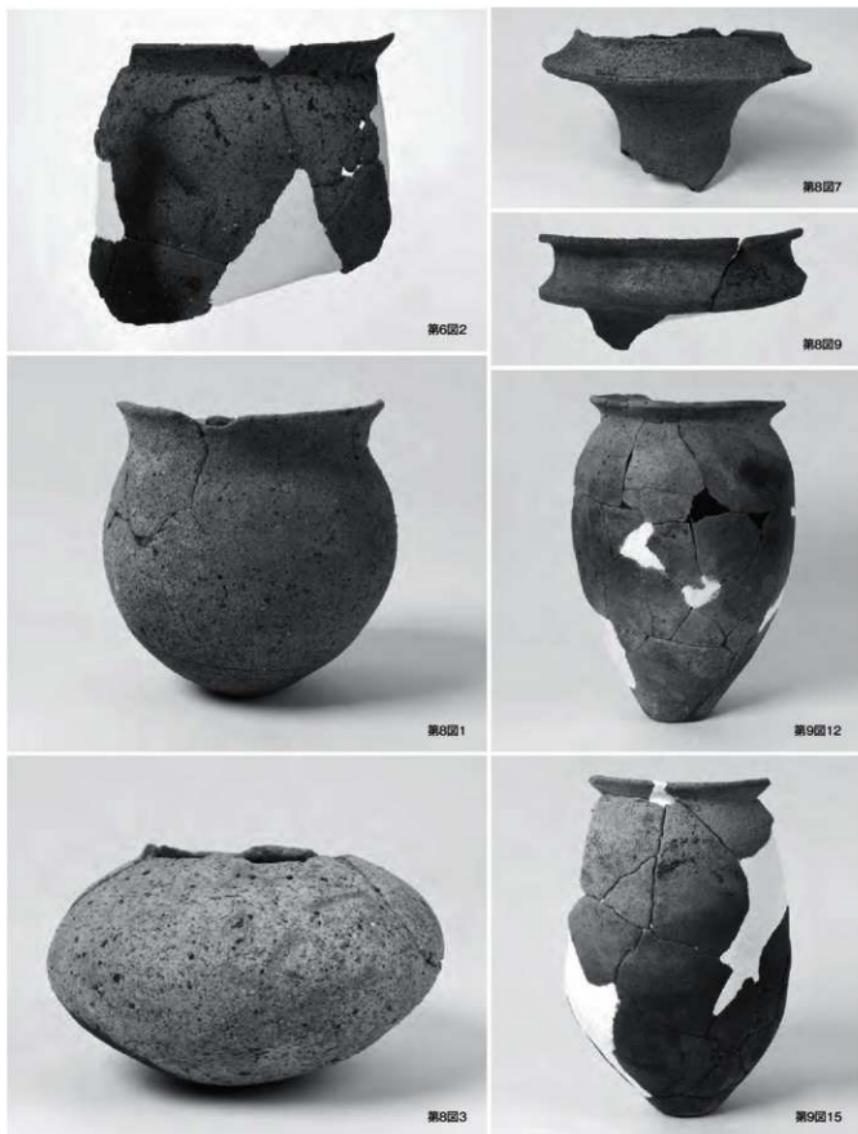
1 1号溝（環濠）完掘状況
(東から)



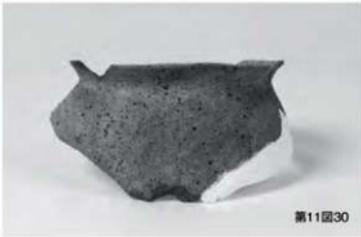
2 2号通路状遺構
(南から)



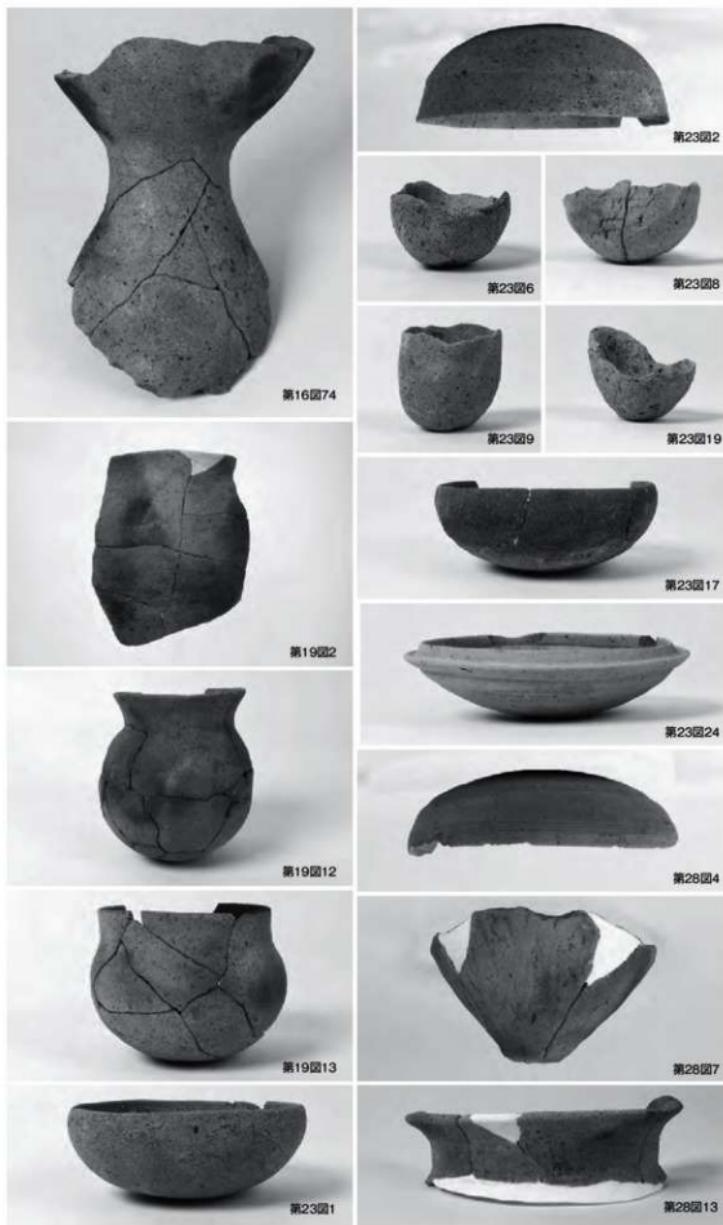
3 II区全景 (東から)



西ノ原遺跡出土遺物 1 (3・4号竪穴住居跡)





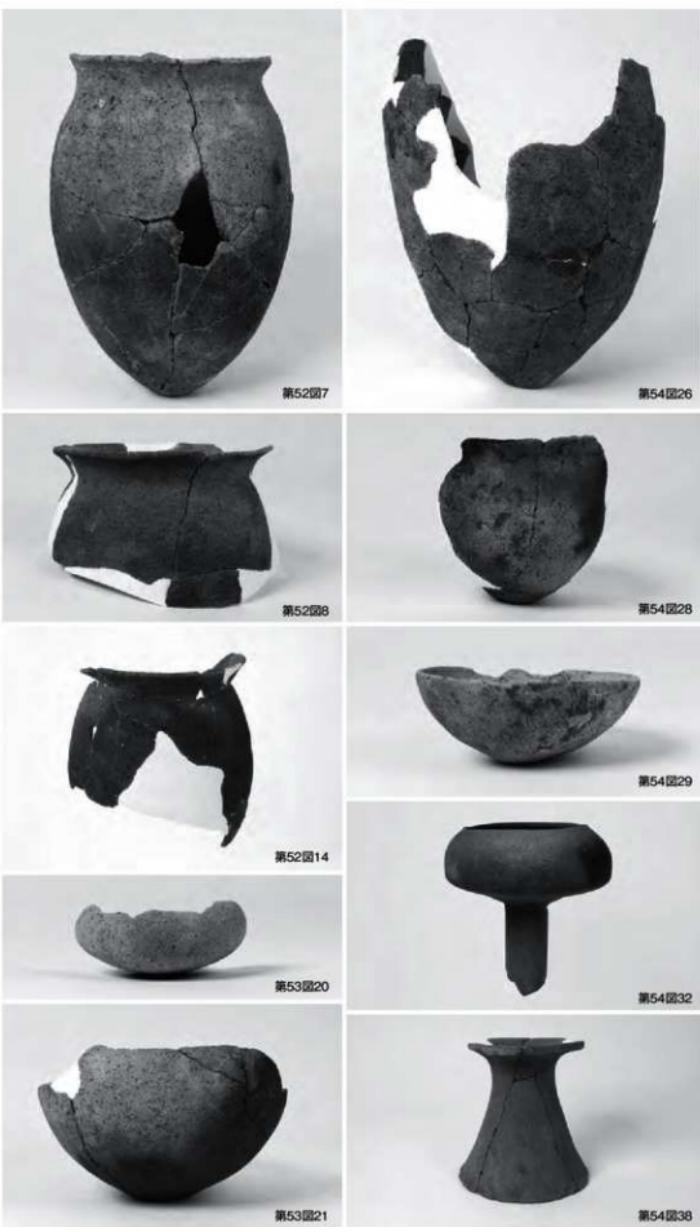


西ノ原遺跡出土遺物 4 (4・7・11・16・22・24・31号竪穴住居跡)



西ノ原遺跡出土遺物 5 (31・32・34・35号竪穴住居跡)





西ノ原遺跡出土遺物 7 (1号溝)



第54図39



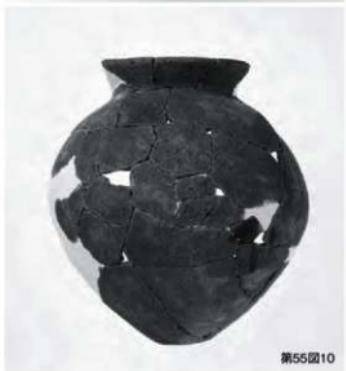
第56図12



第55図29



第56図16



第55図10



第56図20



第56図11

第58図34





第63図35



第65図3



第63図36



第65図5



第63図37



第65図5



第63図38



第66図8



第63図40



第66図13



第63図40



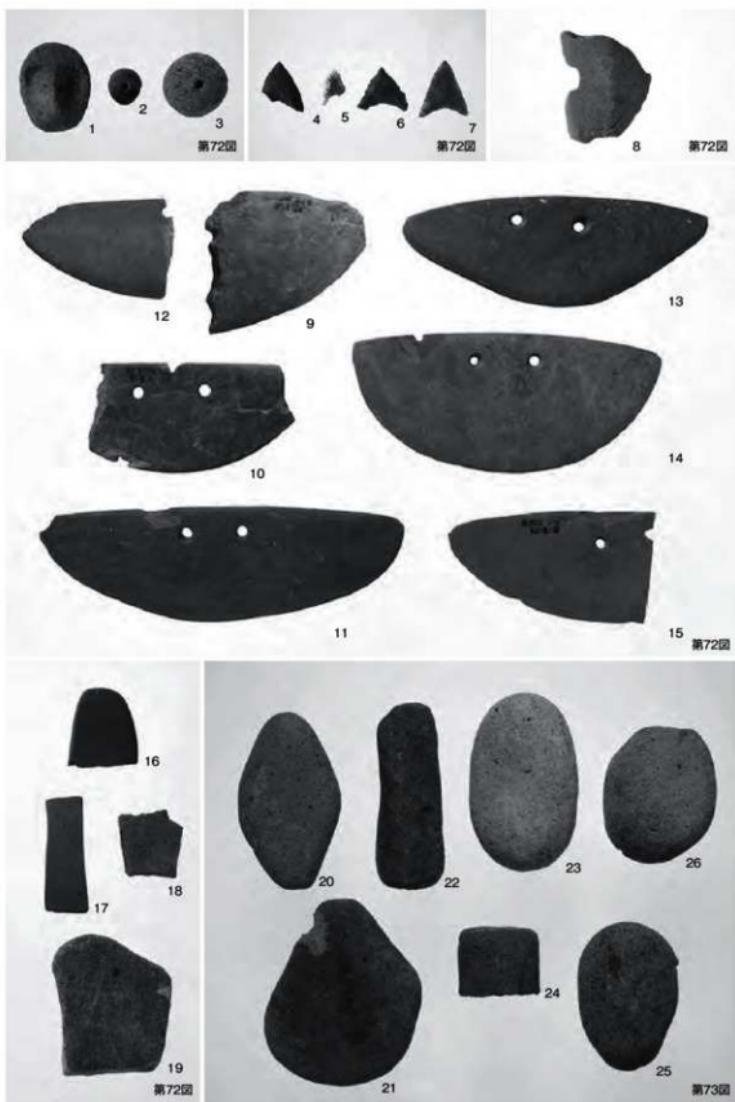
第66図13



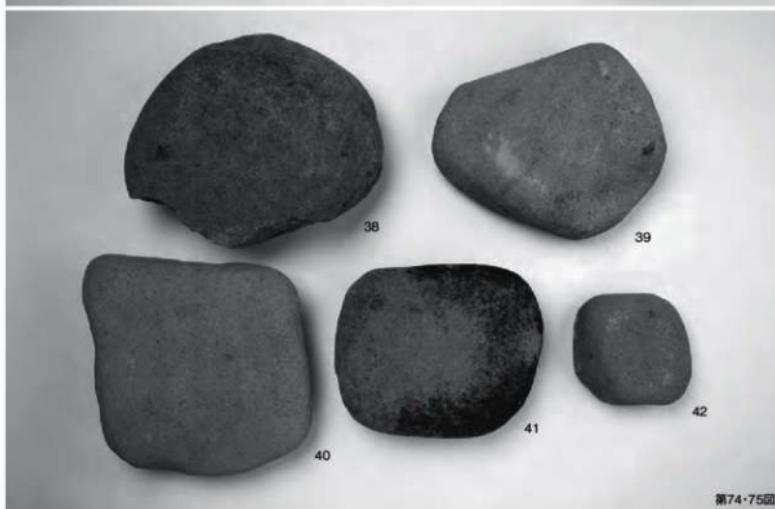
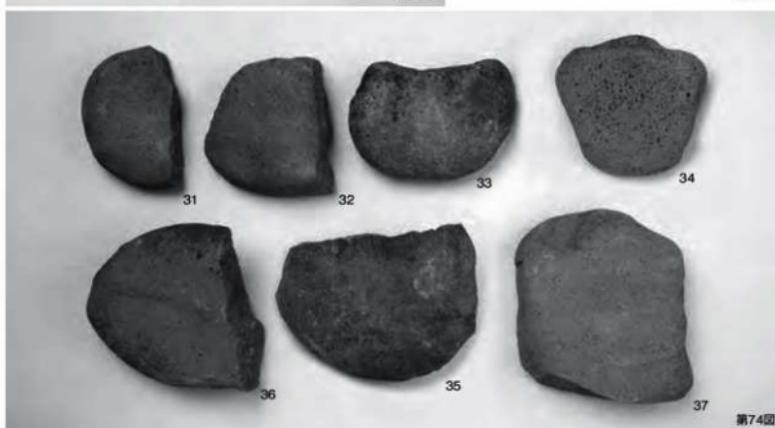
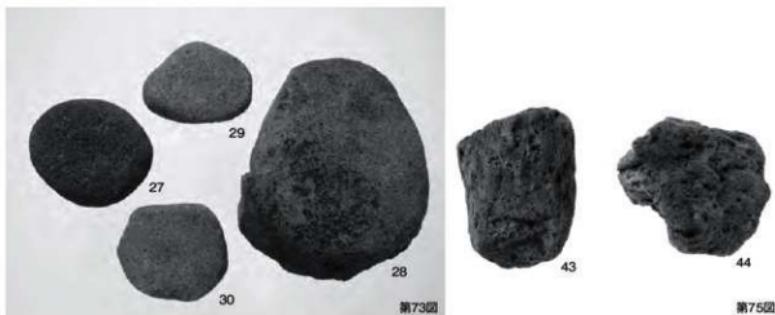
第64図2



第67図18



西ノ原遺跡出土遺物11（土製品・石製品等）



西ノ原遺跡出土遺物12（石製品等）

大西遺跡



1 調査区遠景（南から）



2 調査区遠景（南東から）



1 4次調査区全景
(合成、上が北)



2 調査区北部 (上が北)

大西遺跡



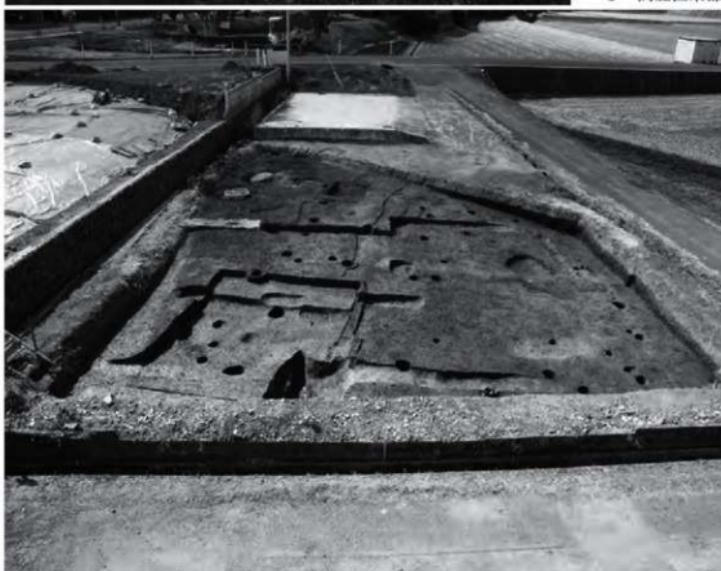
1 調査区中央部
(上が北)



2 調査区南部 (上が北)



1 調査区東部（北から）



2 調査区西部
(北から)

大西遺跡



1 1号竪穴住居跡・1号掘立柱建物跡（北から）



2 2・3号竪穴住居跡
(南東から)



3 3号竪穴住居跡壁際土坑
(西から)



1 4号堅穴住居跡
(南東から)



2 5号堅穴住居跡
(北から)



3 6号堅穴住居跡
(東から)

大西遺跡



1 7号竪穴住居跡
(南東から)



2 7号竪穴住居跡壁際土坑
・梯子根痕 (西から)



3 7号竪穴住居跡壁際土坑
完掘状況 (北西から)



1 8号竪穴住居跡
(南東から)



2 9・11号竪穴住居跡
(南東から)



3 10号竪穴住居跡
(南東から)

大西遺跡



1 10号竪穴住居跡カマド
(南東から)



2 12号竪穴住居跡
(北から)



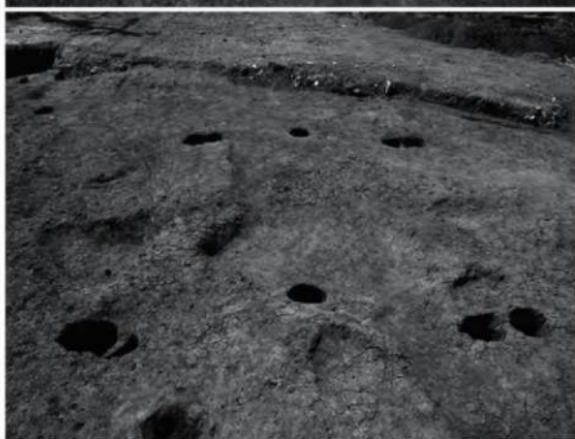
3 13号竪穴住居跡
(南東から)



1 14号竪穴住居跡
(南東から)



2 2号掘立柱建物跡
(北東から)



3 3号掘立柱建物跡
(北東から)

大西遺跡



1 5号掘立柱建物跡
(東から)



2 6号掘立柱建物跡
(北東から)



3 7号掘立柱建物跡
(南西から)



1 8号掘立柱建物跡
(北東から)



2 9号掘立柱建物跡
(西から)



3 10号掘立柱建物跡
(南西から)

大西遺跡



1 11号掘立柱建物跡
(北東から)



2 12号掘立柱建物跡
(南西から)



3 1号土坑 (北東から)



1 2号土坑（北から）



2 3号土坑（西から）



3 3号土坑土層（西から）

大西遺跡



1 4号土坑（南西から）



2 5号土坑（南から）



3 6・7号土坑
(南東から)



1 9号土坑（南西から）



2 10号土坑（北西から）



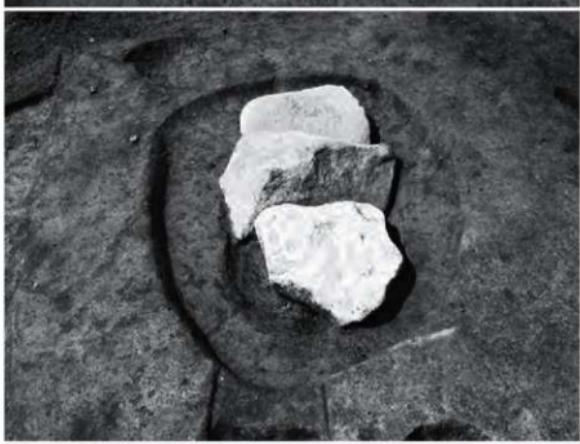
3 11号土坑（北西から）

大西遺跡

1 12号土坑（南西から）



2 8号土坑検出状況
(東から)



3 8号土坑完掘状況
(東から)





1 1号溝（環濠）上層遺物
出土状況（東から）



2 1号溝（環濠）下層遺物
出土状況（北から）



3 1号溝（環濠）北半部
(南から)



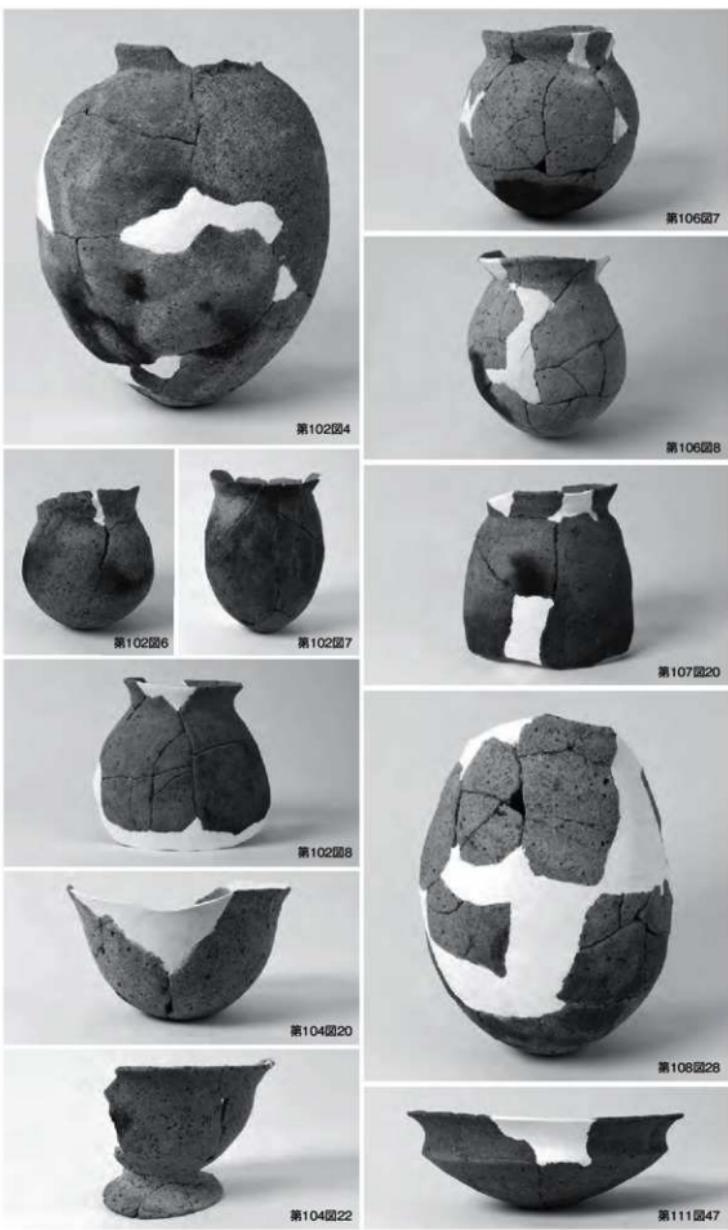
4 1号溝（環濠）南半部
(北から)



大西遺跡出土遺物 1 (2・3・6・8~10号竪穴住居跡・5号土坑)

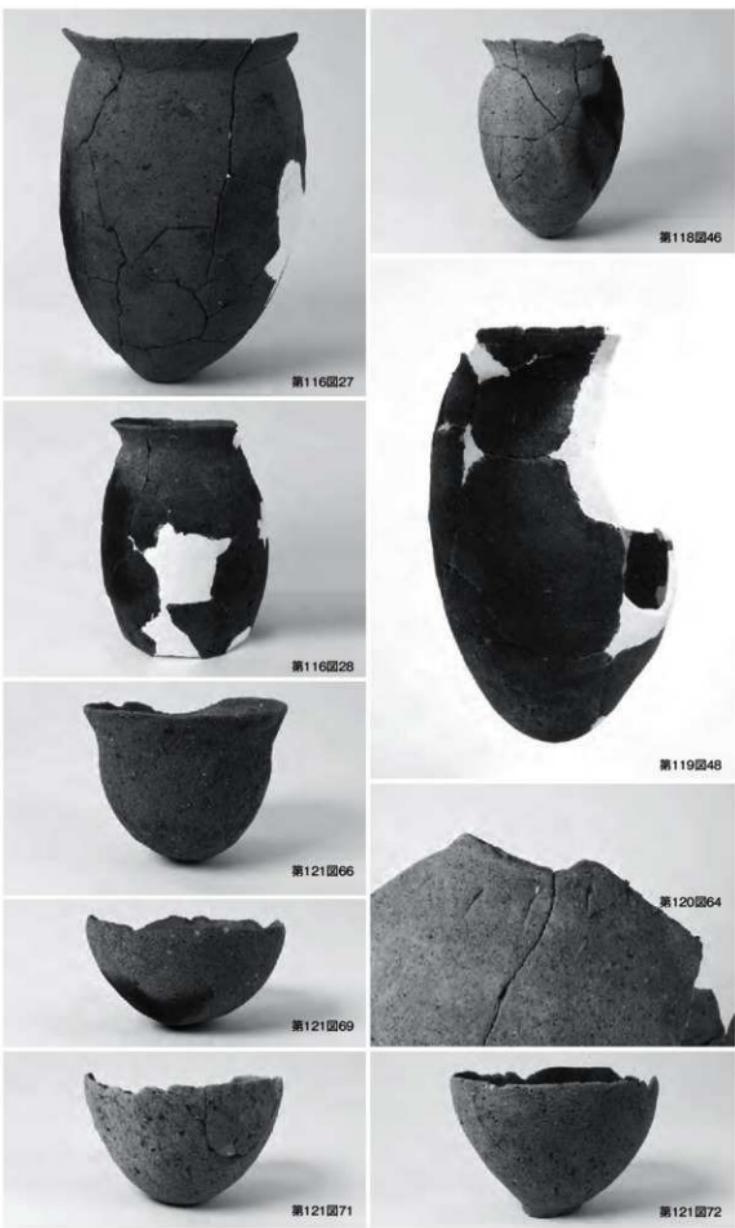


大西遺跡出土遺物 2 (6・7・9号土坑・1号溝)



大西遺跡出土遺物 3 (1号溝)





大西遺跡出土遺物 5 (1号溝)





第127図34



第130図29



第127図37



第130図11



第129図3



第129図5



第130図12



第129図7



第136図70

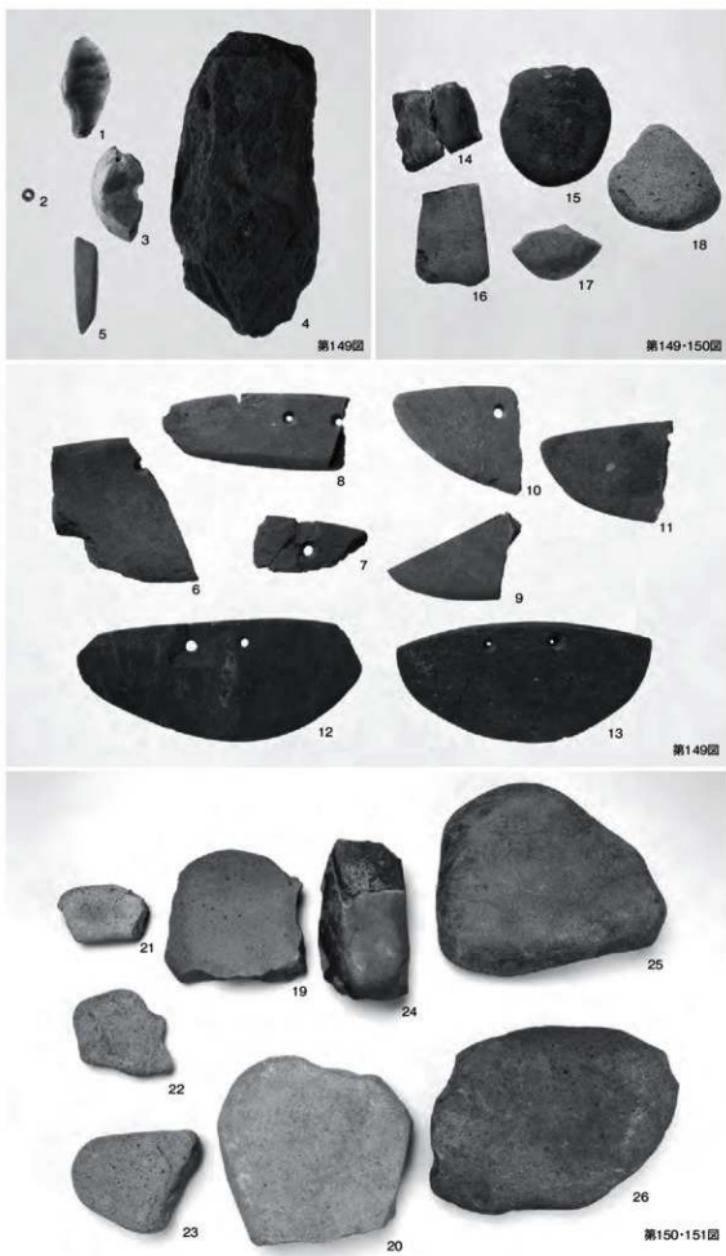




大西遺跡出土遺物 9 (1号溝・P57)



大西遺跡出土遺物10 (P57 · 鐵製品)



大西遺跡出土遺物11（石製品）

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 27	登録番号 3

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
- 25 -

西ノ原遺跡第3・4次
大西遺跡 第4次

平成28年3月31日

発行 九州歴史資料館
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 九州チューエツ株式会社
〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-9-1

